

---

# 不思議な物語

弓ノ原祈亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議な物語

### 【Nコード】

N4060P

### 【作者名】

弓ノ原祈亜

### 【あらすじ】

魔法学校を舞台に広がる運命の恋の物語。

誰もが一度は憧れる自分だけの王子様。

出会える事は幸せなのか、それとも悲しみを生むだけなのか。

主人公リリイは爆弾娘と呼ばれる魔法の制御が出来ない落ちこぼれ。使い魔と親友とそれなりに平穏な日々を過ごしているのだが。

ある日から運命の歯車が一気に動き出す。

自分の中に眠る想いと背負っているもの。

徐々に解き明かされていきます。

## 始まりの物語（前書き）

これはブログで連載していた時のを改良したものになります。  
なので、ブログに載っているのとは表現や文章が違う部分もあります。

ずっと書き続けている物語です。

とても私の中では特別な思いが込められてあります。

ぜひ、感想や意見をお聞かせください

## 始まりの物語

遙か昔、神は一つの世界を作り出した。

世界は均衡に保たれ、精霊が地を作り、海を作り、空を作った。

そして神は二つの種族を生み出した。

光を司る妖精族。妖精族は自然の力を自在に操る術を持つ。

そしてもう一つは悪魔族。闇を司る悪魔族は妖精族と相反する力を持つ。精霊を吸収することで力を得ていく。

相反の力を持つ性ために、二つの種族の間では争いが絶えなかった。ぶつかり合う衝撃が世界を動かし、均衡を保ったまま何千年もの時を過ごしてきた。変わらない関係。変わらない均衡。

だが、均衡が崩れる時はある日突然起こる。

交わることがない光と闇。それが交わることで均衡が崩れ始める。

悪魔族の青年と妖精族の少女との間に子供を身籠ったその時に。

子供は光も闇の力を持つ新しい命の始まりだった。

それが人間の始まり。人間は優しさも憎しみも持つ相反の気持ちを二つとも持つ儚い生き物。

均衡を崩した二つの種族は罰を与えられ、力を大きく削がれ、世界から追放された。

妖精族は妖精界へ。悪魔族は魔界へ。

世界と妖精界と魔界は表裏一体。すぐ手が届く並行世界。だが、神により入口は封印された。

しかし、悪魔族は人々を騙して入口の封印を壊させた。

悪魔族が再び現れ、精霊を吸収することで力を取り戻し世界に君臨した。

約千年続く暗黒時代の始まり。

人々は奴隷にされ、生贄にされ、闇の世界が続く。

絶望が支配知る世界には、希望も優しさも何もなかった。

苦しい事を苦しいとさえ思えず、ただ生かされて消えていくだけ。

だが、真の光は闇の中でも輝きを放つ。

ある日、世界に一陣の光が差し込む。

暗黒と絶望の世界。

それを打ち破ったのはたったの十人の青年と少女だった。妖精界の封印を解き、聖器と呼ばれる最強の武器をそれぞれ授けられて。

それをもとに解放軍を立ち上げ、悪魔族を魔界に再び封印を成し遂げた。

その封印を守るために、十の聖地に聖器を納める城を建てた。

それが、現在まで続く王家と公家の始祖の話である。世界の中心に城を建て、世界を統べるのは解放軍盟主として勝利に導いたクリス・ライツパー。唯一の王家で、九の公家の長でもある。

北大陸に、騎士の国ピース公国。氷河の国スグワール公国。清流の国ダークダ公国。風の国スファール公国。雷鳴の国トーライナ公国。南大陸に、海の国木安公国。地の国果蘭公国。安らぎの国蓮公国。火の国竜環公国。

そして中心大陸に月光の聖地ライツパー王国。

それが今の始まり。

人々は平穏な日々を手にいれ、穏やかな月日を過ごしていく。

これから永遠に・・・

もしもそれが壊れるときは世界が破滅へと足を踏み入れてしまった時であろう。

そうならない事を祈ろう。

その為に、記憶を綴っておこう。

私が知るすべてを・・・

預言者

著：

## 始まりの物語（後書き）

今回の話はこれから始まる物語の軸になる世界観の話でした。

この後から主人公が出てきますので、よろしくお願いします。

## プロローグ

君の事は絶対に忘れない。

君が不安にしているなら抱きしめたい。

優しい笑顔を独り占めになりたい。

たとえ、君が俺を覚えていなくても君への想いは消えない。

どんな事が起きても、君を迎えに行くのは俺だ。

忘れていてもいい。

必ず、また恋に落ちる。

それが俺たちの運命だから・・・

世界に平和な時が流れて約千年の時が訪れようとしている今日この頃。

暗黒時代の面影は消え、人々の心にもただの昔話という印象しか残っていないだろう。

それが表面的なものだと、水面下で争いが幾度となく繰り返されていることなどに気付くものは果たしているのだろうか。

平和という麻薬に侵された世界。

そう、皮肉に考えてしまうのは生まれつきなのだろうか。家庭環境のせいだろうか。

ぼんやり、そんなことを考えながら青年は必死に走っていた。

中央大陸の中心地、王都アクアリーデ。世界中の宝石、食べ物、服。全てを集められていると言って過言ではない物資に恵まれた都である。

城下にはたくさんの店が立ち並び、活気のある客寄せの声があちらこちらから聞こえてくる。



行きかう人は、どれもそれなりの身なりの者ばかり。  
馬車が多く通るのも珍しくなかった。

貴族は自分の家紋が入った馬車の装飾を競い合う。  
平民は辻馬車を乗り合わせて移動するのが主流だ。  
せわしなく馬車が通る道は、基本的に人は歩けるような状態ではない。

でも、その間をすり抜けるように青年は疾走する。  
きつと、まわりの人は風が通り抜けたように感じていることだろう。  
切れる息を噛み締め、青年は腰に下げた細剣にそつと触れる。宝物  
を愛でるように優しくそつと。  
そして小道にそれる。それを追いかけるように数人の男も細道に駆け込んできた。  
だが、青年の姿はない。

「どこへ行った？」  
「死角を探せ！」

男達がざわつく中、上から一筋の影が落ちる。  
男たちが気づく時には影は目の前まで迫っていて、青年が家の屋根から飛び込んできていた。

一瞬で引き抜かれた細剣は光を反射させ、光を放つ。  
あまりにもあっけなく決着がついた。

青年は血が剣にこびりつかない様に、倒れている男の外套できれいに拭う。

そして小さく笑みをこぼす。

「悪いが、時間がないんだよ」

青年は何事もなかったように、再び都の大通りに出て行った。  
そして、鞘に収まった剣を外套の上からさすり、早足で向かう。

目的地へと向かう為に。

青年の視界には大きな船が見え始めていた。

貴族が被る帽子から垣間見える美しい白銀色の髪が風に揺れる。そして、不敵の光が宿るのは空の様な、そして海の様な蒼い瞳だった。

「あと少しだ……待っていてくれ。俺の花嫁」

## プロローグ（後書き）

次の話で主人公が出てきます!!  
楽しみにして頂けると嬉しいです!!

## 爆弾娘登場

「きゃ　　！！」

大きな爆発音とともに少女の悲鳴が部屋中に轟く。もうもうとたち上がる煙に涙目でせき込む少女。

煤で汚れた鼻をハンカチで拭いながら、少女は大きく肩を落とした。

「あーあ。また失敗しちゃったわ。どうしよう」

そう呟き、粉々になってしまった鉱石の破片を集め始める。涙目になっっているのはきつと煙のせいだけではない。

濃茶の円らな瞳に浮かぶ涙を必死に零さない様に堪える。毛先に癖のある亜麻色の髪にも煤と鉱石の破片がついていた。

「いった……」

小さな破片が白くて細い指に突き刺さる。血がぼたりと零れ落ちた。散々だ。練習は失敗するし、怪我也するし。

どうしていつもこうなのだろうか。

少女の名はリリイ。名の通りの美しい部位を揃える顔立ちをしている。だが、今は煤けてなんとも言えないひどい状態だった。

彼女がいるのはスグワール公国のサワデラ山脈という山奥にある魔法学校である。リリイは一人前の魔法使いを目指し、日々精進しているのだ。

魔力も創立以来の強さを持ち、筆記の魔法学は校内首席。そんなリリイは誰よりも期待され注目の的だ。

しかし、彼女は決定的な問題点があった。

魔力が強すぎて制御がうまくできないのだ。

大技を繰り出すことはできても、細かな術になると全く制御できず、暴走することもしばしばだった。

まさに今。鉱石を魔法で磨くという、細かい作業の練習をして失敗したところだ。

石英を磨き水晶を削りだす。魔法使いは宝石を魔法の補強道具にするため、研磨は基礎中の基礎なのだ。

だが、リリイは一度も成功したことがない。

手で磨くのと魔法で磨くのでは、補強道具にしたとき力の差が出てしまう。削る時に自分の魔力も宝石に宿らせるからだ。

リリイは指に布を巻き、実験室をあとにした。

とぼとぼ歩く音が情けなく響く気がする。

「リー、大丈夫？」

ふと声が足元から聞こえてくる。足元にいたのは燃えるような紅い毛並みの動物だった。

狐のような猫のような独特の顔立ち。

リリイの使い魔である。

使い魔といっても、母から譲り受けたお下がり的な存在で、自分で契約を行ったわけではない。

物心がついた時から一緒に幼馴染のような、弟のような感覚だ。

リリイはじとりと、使い魔を見下ろす。

「アン……爆発の瞬間、逃げたでしょ」

「え？ そうだった？」

とぼける様に、喉を鳴らせてリリイの足にすり寄るアン。リリイは怒る気にもなれず、小さく息を吐く。

これではいつになったら一人前の魔法使いになれることやら。

授業がとつくに終わってしまった校舎はしんと静かで、リリイとアンの足音が大きく響く。

他の生徒たちは寮か麓の町へ出かけていることだろう。

そういえば羊皮紙とペン軸の残りが少ない事を思い出す。それに練習用の鉱石も先程使った物が最後だった。

すでに夕暮れに染まった空を窓越しに見上げ、リリイは足を止める。今日はさすがに買い物に出る時間は残っていない。明日にでも行こうか。そんな事をぼんやり考える。

アンにも甘い焼き菓子も買ってあげようか。うちの使い魔は大の甘党なのだ。

アンを抱き上げ、リリイは小さく笑う。

いつもの当たり前の一日が終わろうとしている。

早く一人前になって人様の役に立てる魔法使いになろう。改めて自分の目標を噛み締めながら、寮へと戻って行った。

校舎の隣にある大きな寮棟は東が男子寮で西が女子寮になっている。一階は共同の憩いの広間と食堂がある。

大体の生徒はいつも広間で談笑したり、魔法を教えあったりする事が多い。

優しい暖炉の暖かさと生徒の笑い声で包まれる和やかな場所だ。だがリリイが戻ってきた時間帯が夕食時だったからか、食堂からの談笑の音が響いているだけだった。

そんな広間の椅子に、座りながら転寝をしている少女がいた。

リリイは柔らかに笑いながらその少女に駆け寄った。

「ラル、風邪ひいちゃうよ」

優しく揺らしながら声をかける。少女の艶やかな金髪の長い髪が一緒に揺れて、きらきら輝いているようだった。

少女の名はラルリーグ・ペグシグ。リリイの親友だ。

くりつとした黒に近い茶色の瞳がリリイを捉えると、につこり微笑んだ。

「リリイ待っていたんだよ。ついつい寝ちゃったみたいだけど」

「ごめん、ごめん。練習なかなか上手くいかなくて」

リリイは少し情けないように笑いながら頭をかく。あまり女の子らしくない仕種だが、本人は全然気にしていない。

今の時代、女性は穏やかに清楚である事を望まれるが多い。

だがリリイはどちらかというと、いやはつきり言つと負けず嫌いで少しばかり気が強いところがあった。だから、制御できない事も悔しくてたまらない。

いくら美人でも性格で損する事はしばしばだが、そんな体裁を気にする人に理解されなくてもいいと、リリイは思ふのだ。

それでか、年頃なのに恋や男性への興味がどこか低い。

「夕食食べに行きましょう」

ラルリーグは女の子らしい軽やかな笑みをリリイに向ける。

魔法を使うと集中力も体力もかなり消耗する。リリイは疲れとともに上手くいかないことへのやるせなさもあり、無性にお腹が減っていた。

リリイはすぐに頷き、広間から食堂に続く廊下を歩き始めた。

学校といっても古びた印象がなく、豪華で装飾の細やかな所まで埃一つない。そして、学校というよりも貴族の屋敷のような雰囲気も持つ。

庶民でしかないリリイは入学して二年になるが、いまだに落ち着けないところがある。

貴族はこういう豪邸に当たり前のように暮らしているのだろうか。

自分にはきつと無理だろうと思うが、考えるだけ無駄な事だった。

階級で仕切られた社会。王家、公家。その下に侯爵、伯爵、子爵、男爵、騎士・・・階級の下であるリリイにとっては別世界にすぎなかった。

だが、魔法使いというのは少し特殊な身分を持つ。魔法使いは生まれながらの階級ではなく、魔力を持つかで決まる。

優秀な魔法使いは名家のお抱えにしてもらえ、それなりの扱いを受けられるようになる。だから、庶民の出であっても貴族のようになるのだ。

リリイは驚沢したいとか、有名な貴族に雇ってもらいたいとか、そこまで野望を持っているわけではない。

本当に単純に人々の役に立てるようになりたいのだ。

ラルリーグは侯爵の位を持つ人の遠縁になるという良家の子女だ。だが、こういうわけか魔法使いを目指し、家出同然にして今に至る。だから、ひっそりと素性を教えてもらえた時も侯爵の名は誤魔化された。そしてリリイはラルリーグの胸の内を考え、気にしないと心に決めているのだ。

色々思いにふけていると、食堂から美味しそうな匂いが漂ってきた。自分たちの決められた席に座ると、ぱつと皿の上にはパイ、パン、サラダに子羊のソテー、フルーツが現れる。今日のスープはオニオンスープだった。

さすが魔法学校だ。座ればいつでも出来立ての美味しい料理が並ぶようになっている。

足もとのアンにもミルクが用意されていた。

たくさん魔法使いの卵たちが集まり、美味しい食事を食べながら談笑する声がたくさん聞こえてくる。

リリイは大好きなパイを口に頬張る。ミートの肉汁が口中に広がっ



てたまらなく、至福な時だ。

ラルリーグは手慣れた手つきで優雅に子羊のソテーを口に運んでいく。魔法学校は庶民が多い。だからか、ラルリーグの優雅さがひとときわ際立つ。

男子生徒の憧れに満ちた視線が注がれているが、本人は親友に微笑んで親友の口元のソースを優しく拭いている。

「リリイったら、子どもみたいよ？」

「だって美味しいから、つつい口いっぱい詰め込んだのよ  
ね」

「私のパイも上げるわ」

「えっ？ いいの？」

「そのかわり、このクロワッサンもらうから」

仲良く好きなものを交換して、また口に頬張る。リリイは羨ましそうに向けられる視線で背中が痛かったが、これにはもう慣れてきた。

「ラルって、人気があるわよね」

改めてしみじみと呟く。ラルリーグは少し困ったように微笑み、小さく肩をすくめる。

そんな仕草も可愛らしく見えるから、リリイは少し羨ましいとも思えた。

「あら。私はリリイの方が人気あると思うわ」

「どこが？ 危険爆弾娘って言われているのよ」

それは事実だった。実技の度に爆発や暴走を重ねるリリイに対して、影でそう呼ぶ者は少なくない。

だから、いつも優しくリリイの傍にいてくれるラルリーグには感

謝しているのだ。それと同時に、不釣り合いな自分が傍にいてもいいのかと思う事もある。  
しかしラルリーグの友情を疑うなんて、そんな罰当たりなことは出来そうにもなかった。

## 爆弾娘登場（後書き）

ようやく主人公登場です。

この後の活躍を見守って頂けると嬉しいですww

## これが私の日常

「僕はリリイが世界で一番可憐な花だと思っけど？」

……来た。

リリイはげんなりとした気持で声の主の方を見やった。

はちみつ色の短い髪に青い瞳。すっきりとした顔立ちを持つ青年。女の子がそられる外見を全て合わせ持ったかのような容貌である。まわりから小さく黄色い声が上がったのを嬉しそうにほほ笑む。

「トーイ、あなたの席はあっちじゃないの？」

明らかにつつけんどんな言い方をするリリイに対して、少し非難めいた目を向けるトーイ・ラダスク。もちろん彼も魔法使いの卵である。

「僕とリリイの中じゃないか。いつでも僕の隣の席に来れば隣のやつを追い出すのに」

「ニスがすごく恨めしそうに睨んでいるわよ。席を動かせるのは校長だけでしょ。それに、ラルと私は食べたいの」

本来のトーイの隣の席にはニスという名の女子生徒が座っている。もちろんトーイに思いを寄せているのは間違いない。

軽く睨みリリイはサラダを口に頬張る。そんなリリイにさえ、トーイは熱い視線を送る。

「愛しい君はガードがかたくて切なくなる。だけど、それをこじ開けるのはきつと最高に至福の時なのだろうな」

こじ開けたら余計にこじれるわよ。とリリイは思ったが、口に出さずにいたのは早く去ってほしいからだ。

今度はトーイに思いを寄せる女子生徒の視線がリリイの背中を刺す。せつかくいい気持ちで食べていたのに台無しではないか。

それでもお構いなしにリリイの手を熱く握ってくる。

まわりの穏やかな雰囲気がだんだん色めきだし、リリイとトーイに視線が集められてくる。

それを面白がっているのではないかと、リリイは思う。

トーイは熱い視線を送ったままりリリイの手を引き寄せる。

「この想いを君に……」

「わっ、ちょ、ちよっと」

手の甲に口づけをするつもりだ。

そんなことされたら後で、他の女子生徒のどんないやがらせが飛んでくるか。

引っ込めようにも男の力にはさすがに勝てない。

リリイの中で堪忍の緒が切れる音が聞こえた気がした。

「いい加減に……」

手を何とか振り解こうと力を込めた時だった。

がちゃんっ。

金属がぶつかる音が聞こえたかと思うと、トーイは頭の上からオニオンスープを被っていた。

ぼたぼたとオニオンスープの滴が床に落ちていく。

まわりからどつと笑いが起こる。誰がやったのか分からず、リリイも硬直したままだ。

恥をかかされたに違いないトーイは顔を真っ赤にして俯いている。

その隙に、ラルリীগはリリイをトーイから引き剥がし、急いで

食堂を出ていく。

我に返ったリリイは何が起きたのかさっぱりだ。

「今の、まさかラル？」

「さすがにそんなことできないわ。でもチャンスだったから逃げちやっただけ」

「そっか。ごめんね、ありがとう」

申し訳なさそうにうなだれるリリイに、ラルリイグは悪戯っぽく笑う。

「ほうら。私が言った通りでしょ？ リリイは人気があるって」

「今のは人気があるって言うか……からかいの対象にされているとは思えないわ」

「でも恥かかせてやれて良かったじゃない」

「これはこれで、他の女子生徒の反応が怖いけどね……」

がつくり肩を落とすしかない。

トイがリリイに言い寄るようになったのは一年程前からだった。

トイがいつから入学したのかよく覚えていないが、気がついたら女子生徒の憧れの的となって、存在感を示すようになっていた。

そしてある日突然。

「僕は君に恋をしてしまったようだ」

と言いだし、事ある事に口説こうとするのだ。

だが、そこに彼の本音があるとはリリイは思っていなかった。

彼が言い寄ればリリイは女子生徒の反感を買う。今は少し落ち着いてきたが、羊皮紙が破られたり、ペン軸を折られたり、嫌な思いばかりしてきた。

それをトイは面白がってみているような節があるのだ。  
だから、リリイはできるだけトイとは関わらない様にしていたいが、今日みたいに否応なしに近づいてくるのだ。

しかし今日はいつものように彼のペースでは終わらなかった。どうやら誰かがリリイを助けてくれたらしい。

しかも、プライドが高いトイが一番傷つくようなやり方で。  
胸の内はすかつとしたが、ラルリーグでなければ誰なのだろうか。

「とりあえず、今日は部屋で休もう?」

リリイの肩を優しく押し、ラルリーグは柔らかく笑いかける。  
それに頷き、自室へと歩き始める。

その時、ラルリーグは柱から一瞬、人影を見た気がした。  
淡い水色の髪が柱に溶けるように消えていく。  
目を大きく開け、首をかしげる。

「ラル? どうかした?」

「ううん。気のせいだったみたい」

ラルリーグはリリイに向き直り、二人の自室へと急いで行った。

予想はしていた。だから驚くことではない。

リリイは無残にも切り刻まれてしまった羊皮紙を拾い集め、小さく息を吐く。

くすくすと笑い声が耳にざわざわと聞こえてくる。

トイに派手に言い寄られた次の日は大抵、陰湿な制裁を受けるのだ。相手にされたくてもされない悲しみと、リリイにだけ向けられ

る行為への苛立ち。

しかも昨日の出来事はリリイのせいで彼が恥をかいってしまったという、怒りも込められて。

相手にするだけ無駄だと、リリイは知っている。だから気にしなかったように予備の羊皮紙を取り出し、授業の準備を始めた。

今日、どうせ買い物に行こうと思っていたところだったから、今日の授業の分だけあれば事なき終われる。

「……」

だが、腹立たしい気持ちがふつふつと沸き上がってくるのも止めようのないもので。

リリイはあからさまにこちらを嫌な笑い顔で見ている女子の集団を一瞥する。

相手にするのは無駄だけど、気持ちがどうにも治まらない。

リリイはちらりとアンに視線を向け、切り刻まれた羊皮紙に視線を向けないまま放り投げる。

リリイを見ていた女子達に届きそうになった直前に羊皮紙が炎を上げた。

「きゃあああっ」

慌てて散り散りになる頃にはあっという間に炭になって床に落ちていた。

アンがぷつと吹き出すように笑う。炎を属性とするアンにとって、これぐらいの悪戯はお手の物だ。

「何するのよ！」

当然の如くリリイを囲みに来たが、丁度本鈴が鳴り響いたところだ



った。

時間厳守の魔法学校で鳴り終わっても着席していないとそれだけで減点されてしまう。しぶしぶ女子生徒たちは自分の席に着くしかなかった。

横で成り行きを見ていたラルリーグが呆れたように溜息をこぼす。

「知らないよ？ 後で十倍返しにされても」

「あの子たち、なんだかんだ言って私の魔力が怖いのよ。直接来れば暴走に巻き込まれかねないから。だから陰湿な手しか使えないの」

きつと今来たのは感情で何も考えていなかったのだろう。冷静になれば本鈴が鳴って助かったと思ったのは彼女達に違いない。自分を卑下するような言い方にラルリーグはまた小さく息を吐いた。

リリイは負けず嫌いで、精神力も強い。知識だつて誰にも負けないだろう。でも、どこか自分に自信を持っていない。

それが制御できない一番の問題点ではないだろうかと思う。だが、自分で気づけなければ本当の意味で気づけないし、ゆるぎない自信にはならない。

ラルリーグは予備のペン軸をリリイの机にそつと置いた。目を丸くする彼女に無言で頷く。

リリイが被害を受けたのは羊皮紙だけではなく、ペン軸もそうだった。リリイが言わなくてもラルリーグは分かってくれている。

嬉しくて、頬が熱かった。

## 運命の恋はどこ……

授業が終わりを告げるとリリイはラルリーグとアンと共に、麓の小さな町にまでやって来ていた。

辺鄙なところにあるだけに物資の流通はあまりよろしくない。だが、魔法学校の学生が多く利用する町には、羊皮紙やペン軸などを取り扱う店は多く、活気がないわけでもなかった。

学校で必要なものは、十分この町に来れば手に入るのだ。

毎回、リリイは大量の羊皮紙やペン軸を買わなければならない。勤勉家なのもあるが、いたずらで破かれることも少なくないのだ。

まさに今日の様に。

肩から提げていたカバンに羊皮紙とペン軸、インクの瓶を詰め込む。見た目はあまり大きくないカバンだが、特殊な魔法が掛けられていて何倍もの荷物が入るようになっていたのだ。

アンにビスケットを買い、一枚渡すとリリイの肩の上で嬉しそうにビスケットを齧り始める。

リリイとラルリーグはホットココアを買い、ベンチに座って一息をついた時だった。

「ねえ、リリイ」

おもむろに声をかけられ、ラルリーグの顔を覗き込む。ココアの温かさのせいか、うつすら頬が紅潮している気がした。

「リリイの初恋っていつ？」

「へっ？ な、何急に……」

年頃の女の子なら誰もが口にする話題であろう。だが、リリイとラルリーグはそういう話をしたことはあまりない。

単にリリイがそういう話に疎いせいなのか。でもずっと、そういう話をラルリーグはしたかったのかもしれない。

「初、恋……」

リリイは宙を睨む。

恋って、男性に思いを寄せること。それぐらい、リリイだってわかっている。

しかし、どこか実感できないというか、他人事のような、そういう感覚に陥ってしまう。

深く考えようとすると、頭の中に靄がかかった様に何を考えていたのか分からなくなる。

初恋、私はしたのだろうか。それともまだなのか。

心がざわざわとした。

恋したのか考えると、胸が苦しくなるのはどうしてなのだろう。

何かが浮かびそうだが見えないで終わってしまった。

「まだ、分からないかな。したことないかも」

「そう？ 誰かにときめいたりもした事がない？」

「そういう感覚もこういうものなのか分からないわ。ラルは？ あ  
るの？」

「うん」

さらりとラルリーグは頷く。驚きを隠せないリリイに小さく優しく笑う。

「私には運命の人がいるんですって。その人を見たら一目でこの人だわって、分かるみたいなの。なんだか素敵じゃない？」

「ラルは見つけたの？ 運命の人」

「さあ……まだ断定はできないけど、この人かもしれないって思っ

たの」

につこりとほほ笑むラルリーグは恋する少女のようだ。いや、きつと恋をしているのだ。運命の人かまではまだ分からないが、そうだといいという人に。

「運命の人だといいね」

「うん。でも……運命の強さならリリイの方が強いかもしれないわ」  
「？」

「一瞬で恋に落ちるってこと」

おどけたようにラルリーグは言った。だが、そこにかいかいではなく本当にそう思っているような雰囲気だめられていた。

私の運命の人。

そういえば誰かにも同じような事を言われた気がする。誰だったか、リリイは思い出せない。

ラルリーグは心内を言えて、すっきりしたように柔らかい表情でココアを口を含む。

ココアの甘い匂いが、そっとリリイの心をノックするかのようだった。

ラルリーグもアンも、生徒みんなが寝静まった夜。リリイはこっそりベッドで体を半分起こして、一冊の本を眺めていた。

ランプの明かりに照らされた本は童話の絵本。

お姫様と王子様の話。王子様が囚われの身になってしまったお姫様を命がけで助け出し、幸せな結婚をする物語。

恐ろしい魔女が竜を呼び出す。だが、王子様はお姫様のために立ち

向かっていくのだ。深い茨に閉じ込められた塔に臆することなく向かっていく姿が、絵本の割に迫力がある。

リリイはこの絵本が大好きでいつも大事に本棚に入れておいた。確か、幼い時に母からもらった大切な絵本。

絵本のお姫様は結婚式で幸せそうにほほ笑んでいる。王子様が助けにくるまでも疑わずひたすら信じて待つているお姫様。

リリイにとってこのお姫様は憧れなのかもしれない。いつか、自分にも何があっても信じていられるような人と恋をして、幸せな結婚をすることが。

でもリリイはまだ恋をしたことがない。憧れが現実になるかはまだ先の話。

ラルリイグに恋の話が聞かされ、ちょっと羨ましかった。

私も早く恋をしてみたい。

トーイみたいに軽薄な男ではなく、信頼できそうな人と。

リリイは絵本に頬を寄せてそっと瞳を閉じる。

今ならいい夢が見られそうな気がする。夢の中だけならお姫様になれるかもしれない。

そして助け出してくれる王子様は……

リリイは夢の中へと静かに入って行った。

夢の中は白い靄がかかったかのように、はつきりしない世界で、リリイは辺りを見回す。

何かを探しているかのような焦燥感。心がざわざわして落ち着かない。恐怖が足音を立てて追いかけてきている様だった。

必死に走りだす。何を求めているのか分からないまま、それでも居ても立ってもいられなくて衝動がリリイを掻き立てる。

ふと、目の前に人影が現れた。

リリイは迷う事無く、その現われた人影に飛び込む。

ああ、ようやく会えた。ずっと、待っていたの。

そんな気持ちがりリイの胸を高鳴らせてくる。

柔らかく抱き寄せられ、リリイは安心したようにほほ笑み、抱きしめ返した。

温かな温もりが焦燥感や恐怖を溶かしていく。

こんなにも誰かに安堵した事があっただろうか。こんなにも人の温もりは心地よいものなのだろうか。

そっと、頬を撫でられ、リリイは顔を上げる。靄がかかっていて顔がはっきり見えない。でも、絶対に大丈夫だと確信が持てる。

うつすらと輝く蒼の光は瞳の輝きだろうか。銀色の光が靄を吹き飛ばしていく。

リリイの耳元で誰かが囁く。

「愛しいリリイ。あなたは運命に導かれる日が来るわ。大丈夫、恐れないで。あなたなら分かるはず……自分だけの王子が誰なのか……」

……

私だけの王子様？ それなら今ここに……

突風が吹きあがる。突風で目が開けられない。だが、突風が吹く直前、何かを見たような気がした。

それは精霊のような神秘的な銀色の髪が靡く瞬間だった。

## 翌朝にて

朝日が目に沁みて眩しい。

リリイはぼんやり体を起こした。

何だか変な夢を見ていた気がする。何だか頭が上手く働かなくてよく思い出せない。

だけど、何だか大切なものを見つけた気がする。

いや、思い出したと言っべきか。だがそれを覚えていないのだから結局思い出せていない事になる。

夢見がいいのか悪いのかよく分からない。

リリイは気を取り直してベッドから立ち上がる。窓を開ければ冷たい朝の風が、薔薇色のリリイの頬を撫でていく。

北の国であるスグワール公国は一年通して氷に閉ざされている所も少なくない気候の国だ。ここは秋過ぎにならなければ雪も氷もないが、朝は夏でも肌寒い。しかも、まだ春先で、本格的な温かさはまだ訪れていない。

夜に薄着で出回っていたら凍死してしまうだろう。

小さなくしゃみの音が聞こえてくる。

「リー、寒いよう」

リリイが寝ていたベッドの端で、毛布がもぞもぞと動く。ちらりと真紅の毛が覗いていた。

「アンは立派な毛皮を持っているでしょう」

そう言って、リリイは毛布をひっくり返す。こてん、とアンが転がるように出てくる。

「僕はデリケートなんだよ。リーみたいに神経図太くないんだからね」

「……今日はご飯抜きでいいって言っているみたいね？」

少し低い声でリリイが呟く。すると、アンは急いで背筋を伸ばす。

「まさか！ 僕は一日に甘いものを五回は食べないと生きていけないでしょう？」

「使い魔はそんな事ないわよ。お腹がすいても主と精神で繋がっているから主が死ななければあなたも死なないわ」

意地悪に言っていると、アンは反省したように項垂れていた。リリイは小さく笑い、制服でもあるローブに袖を通す。

漆黒の布地に金色の布で縁どられている質素ながら存在感があるローブは、魔法使いの象徴的な衣装でもある。

魔法使いの基本は表舞台に立たず、ひっそりと裏から力を発揮する者だ。だからローブについているフードを被り、顔や表情など見えない様にしている事も珍しくない。

フードまでは被らないが、リリイはローブが気に入っていた。ローブの袖口は広くて色々和小物も入れておき易くて重宝している。おしゃれ心もまだ、リリイの中ではあまり重要ではないらしい。

髪を梳かし、亜麻色の自分の髪を見つめる。何の特徴もない、ありふれた髪色だ。ラルリイグみたいに綺麗な金髪にも憧れる気持ちもあつたが、今日は何だか変な気分で自分の髪を見つめる。銀髪が似合う人ってどんな人なのだろうか。

「やだ……」

リリイははつと頭を振る。どうしてそう思ったのかよく分からなかったが、我に返ると恥ずかしくなってきた。



早く朝食を済ませて頭を働かせよう。

「アン、ラルを起こしに行くよ」

考えていた事を振り切るようにリリイは大股で部屋を出ていく。アンは置いて行かれない様にリリイを追いかけに行った。

今日は週に一度の休暇の日だ。いつもなら生徒で溢れている食堂も、早起きの必要がない今日は空いていた。

女子生徒に絡まれる事も今日はないだろう。

半分寝たままのラルリীগは目がとろんとしていて、リリイに寄り掛かっていた。ラルリীগは朝に弱く、リリイが起こさなければなかなか起きられない。

熱い紅茶を飲み、いくらか目が覚めてきたラルリীগは小さく欠伸をする。

「今日は早起しなくていいのに、どうしたの？　なんか用事でもあるの？」

「実は昨日、うっかり練習用の鉋石買い忘れちゃったのよ。今日なら市場も開かれていますし、丁度いいかなって思って」

リリイはアップルパイを口に頬張り、紅茶で流し込む。ラルリীগはいり卵を一口もそもそとゆっくり噛んでいた。

「今日行くの？　私、寮直で一日動けないんだけど」

寮を管理する仕事は何ヶ月かに一回、回ってくる。廊下や窓の掃除をしなければならぬのだ。それは広い寮全てなので、ほぼ一日か

かってしまう。

もちろん、リリイはラルリーグに無理して付き合ってもらおうとは思っていなかった。

「平気だよ。市場ぐらい一人で行けるから」

「ダメよ、女の子が一人で行くなんて」

「私、女の子として認識されていないし。市場は自分の庭の様なものだし」

ラルリーグは目がすっかり冷めてしまったか、大きな瞳をリリイに向けている。そんなに自分は信用がないのだろうか。

いや、そもそも女の子が一人で出歩くのは非常識な行為であるのは分かっている。だが、この学校では自分のことは自分でやるのが習慣になっていて、女子生徒が一人買い物に出てもそんなに白い目で見られない。

「とにかくやめようよ。今度の休暇なら私も行けるし」

ラルリーグにしては頑なだった。穏やかな彼女がここまで言うのは珍しいことだ。だが、リリイは早く制御が出来るようになりたい気持ちが強かった。

「僕がいるから平気だよ」

足もとからひよっこり顔を出して、アンは口のまわりについたミルクをぺロぺロ舐めまわす。

「僕は優秀な使い魔だからね。リーに変な男が来たらお尻を燃やしてやるよ」

なぜか誇らしげに胸を張っている。リリイは私の魔力のおかげで、よ、という言葉に喉あたりで我慢した。

ここまで言われると、ラルリーグも折れるしかなかったようだ。

「すぐに帰ってきてね」

小さく呟き、ラルリーグは少し寂しそうに笑った。

何だか胸が痛んだ。こんなにも心配してくれる親友がいるなんて、

何て自分は幸せ者なのだろうか。

何か喜びそうなものをお土産に買ってこようと、リリイは優しく笑い返した。

## 市場にて

週に一度、町では市場が行われる。

市場には近隣の村からも出張して店を出すので、いつになく賑やかになる。小さな見世物小屋や動物園も来る事もあり、小さなお祭り騒ぎだ。

リリイは昨日と同じカバンを下げ、肩にアンを乗せ、人の流れに沿って市場を歩いていった。

甘い焼き菓子の匂い。優しい花の香り。陽気な歌が聞こえてくる。今は争いもない平和な世界。それをなんとなく実感しながらリリイは頬を緩める。

暗黒時代にはきつと考えられない情景が広がっていることだろう。

リリイは鉱石を売る店の前で足を止め、鉱石を眺める。

花崗岩に、長石、石英。原石ばかりでなく、綺麗に研磨され真の姿を現した宝石たちも、陽の光を浴びて輝いていた。

ふと、鉱石屋には珍しく真珠が置かれていることに気がついた。

真珠は貝が生み出す海の宝石。そして、ライツパー王家を守護する宝石が真珠だ。だから、真珠は神聖な宝石として崇められている。だから、こんなで店に出回るなんて滅多に無い事だ。

「そう言えば、どうして王家の宝石は真珠なのかしら？」

王家の象徴とされているのは月。月明かりが闇夜を切り裂き、希望の光へと導く、希望の光とされているのだ。

だったら守護する宝石は月長石の方が合っている気がする。

「お譲ちゃん、知らないのかい？」

鉱石屋の主人がリリイを見ていた。独り言が聞こえてしまったのか。

少し、恥ずかしかったが、話が気になる。

「何が？」

「真珠は確かに海から出来る宝石だ。だがな、真珠は月に住む女神の涙とも呼ばれているんだ。別名が月の雫と言っくらいだ」

「へえ、そういえば母も言っていた気がするわ」

「いいこと教えたんだ。奮発してくれよ」

抜け目がない言葉に、リリイは破顔していつもより多く鉱石を買うはめになった。

すぐになくなるし、いいか。とリリイは思っただけで鉱石屋を後にした。アクセサリー屋で、ラルリーグに似合いそうなガーネットのブローチを見つける。小振りだが、小さな深紅の花がいくつも咲いているかの様で、品が良い仕上がりになっている。

リリイはそれも買い、ラルリーグが喜んでくれる事を願い、自然と笑みがこぼれた。

「ねえー。用心棒にはご褒美無いの？」

ふて腐れたような声が肩から聞こえてくる。アンがお腹をさすって、リリイをじっと見ていた。

「分かっているわよ。この間来た時に見つけたカップケーキ屋に向かってる所」

「さすがリー！ 僕チョコレートたっぷりがいいな」

「猫にはチョコは刺激物のはずなんだけどね」

「僕は猫じゃなくて使い魔でしょ！ 早く食べたいなあ」

うつとり呟くアンに、リリイもつられて笑ってしまう。リリイとアンは精神で繋がっている、一心同体だ。

さつきもリリイの行きたい気持ちを酌んでラルリーグを説得してくれたのだろう。

一言多いが、リリイのことを誰よりも分かってくれている。

あと少しでカップケーキ屋に着く時だった。急いで歩いてきている人に気がつくのに少し遅れた。

「きゃあっ」

リリイはその人と思い切りぶつかってしまった。

その反動で、アンが投げられたように飛ばされる。気がついた時は人ごみに紛れて、アンの姿が見当たらない。

「やだ、アン！ どこ？」

リリイは人込みをかき分けるように、必死にアンを探す。飛ばされて、着地に失敗していたら、人に踏まれてしまうかもしれない。そうしたら大けがで済まないかもしれない。

（リー？）

「アン！」

心に直接聞こえてくるアンの声。精神がつながっている使い魔とはテレパシーで話すことができるのだ。

動転していてすっかり忘れていたが、リリイはアンが無事だったことに一安心した。

「今どこにいるの？」

（馬車乗り場の裏辺りみたい。ごめん。足が痛くて動けないよ）

細い弱々しい声に、リリイはぎよっとする。やはり飛ばされた拍子

に怪我をしてしまったらしい。あのアンが弱々しい声を出すなんて、相当苦しんでいるのだろう。

「今から行くから動かないで待っていてね!」

リリイは急いで、馬車乗り場へと向かった。

馬車乗り場は、市場から少し離れた所に設けられてあった。何台かの馬車が、帰るお客を待っている。

実を言うと、リリイは大の馬嫌いで近づくと足がすくむ。昔蹴られて大怪我をした事があるのだ。

だが、アンを待たせる訳にはいかない。リリイは意を決して出来るだけ馬に近付かない様に馬車乗り場の簡易なテントの裏あたりに急いだ。

「アン、どこにいるの?」

しかし、アンの姿はどこにもなかった。リリイは周りを見回す。

そういえば飛ばされた所から角度的に合っているだろうか。よくよく考えるとこつちに飛ばされることはない事に気がつく。

でも、だったら。さっきのアンの声は誰?

がさりと、草を踏む音が聞こえる。リリイははっと振り返ると棍棒が振り落とされる瞬間だった。

鈍い音と共に頭に衝撃が走る。痛みを感じる間もなく、リリイは意識を失った。

市場にて（後書き）

話がここから動きだします!!

じゃんじゃん頑張ってもらいます（ ^ o ^ ）



恐怖の中で見つけるのは……

がたがたと揺れる衝撃が、頭の痛みに響いていく。リリイは気だるい中、意識を取り戻していった。

頭ががんと痛む。そのせいか、体中上手く力が入らない。

意識がはつきりしてくると、リリイは縄で体を縛られ、猿ぐつわされている事に気づいた。

どうやら馬車に乗せられているらしい。馬車といっても、人が座るような場所ではなく、荷物入れかどこかに乗せられているらしい。

「このどこにでもいそうな女が例の女なんですか？」

どこからか声が聞こえる。リリイは意識を失ったままのふりをして会話に意識を向けた。

「主からの報告だと間違いないそうだ。時間をかけて怀柔したい所だが、あと少しというところでそうも出来なくなってしまったらしくてね」

何の事だかりリイは状況がさっぱり飲み込めない。何でこんな目に合っているのだろう。怀柔？ 私を？ 誰が？

「万が一、契約をしていたら厄介だ。契約すると体のどこかに印が刻み込まれているらしい」

そんなもの、リリイの体にはどこにもない。誰かと勘違いされているような気がする。

「お前、今の内に印があるかどうか確認しておけ」

「生娘の体を隅々まで見ていいってことか？」

嬉々とした声が聞こえてくる。

ちよつと待った。体を隅々まで見るって……誰の？ まさか。

「変なこと考えるなよ。あの娘に手を出したら殺されるぞ」

「だが、触らないとよく見られないだろ？」

「……そうだな。二人で見た方がよく分かるかもしれないしな」

雲行きの怪しい会話が途切れる。そして、馬車が止まった。

まずい。背中から嫌な汗が流れる。

知らない男に体を触られるなんて絶対に嫌だ。

がちやりと、扉が開く音が聞こえた。うつすら目を開けると、男が二人乗り込んでくる。

涎をぬぐう嫌な音に吐き気がする。

怖い。怖い。

「！」

男の手がリリイのローブを掴む。ナイフがローブの胸元あたりに近づく。

声が出ない。

どんなに魔法の勉強をしても、体術を習っていても、男の前では弱い女の子でしかない。

涙が溢れてくる。

助けて……誰か！

「おい。誰の花嫁に手を出している？」

凜とした張りのある声。リリイは目を見開く。

明らかに二人の男とは違う声だ。男の手が止まった。

訝しげに、声の主をきよろきよると探している。

リリイは意を決し、立ち上がった。リリイが起きていると思わなかった男たちが慌てふためく。リリイは自由な足で思い切り男を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた男は荷台の外まで飛ばされた。

頭が痛くてめまいがする。もう一人の男が憤慨して、ナイフを振り上げる。

「この女！ なめやがって！」

リリイは避けるほどの体力が残っていなかった。思わず目を瞑ってしやがみこんだ。

だが、ナイフがリリイに振り落とされることはなかった。

そつと目を開けた時はもう一人の男も荷台から吹き飛んでいた。

男を吹き飛ばしたのは誰だろうか。それにリリイはすぐに気がついた。

目の前に男がもう一人立っていたのだ。風にそよぐ月明かりを糸にしたような白銀色の髪がリリイの目を奪った。

どきん、どきんと胸が痛いくらいに鳴っている。今までに感じたことのないような衝撃が胸を走り回っている。

くらりと、視界が歪んでいく。まるで見てはいけないものを見て、それを拒むように視界が閉ざされていく。それと、リリイは体中から張りつめていたものが抜けていくのを感じた。

床に直撃するかと思ったが、柔らかく抱きとめられる。ぼんやりする視界で、見上げるがよく見えなかった。

だが、どうしてなのかすごく安心できた。もう大丈夫と、支えている手が告げているかの様だ。

「やっと見つけた……俺の花嫁……」

優しく抱きしめられる。リリイはその抱きしめられた時の温もりに  
安堵しながら、意識を手放した。

## 不安の影

次にリリイが目を覚ました時には魔法学校の医務室のベッドの上だった。

頭に包帯を巻かれていて治癒魔法も掛けてもらったのか、気分は随分と良い。

泣きはらした目のラルリーグはリリイが目を覚ましたことにいち早く気が付き、安堵したように涙をこぼす。

リリイは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。ラルリーグの忠告を聞いていればこんな事にはならなかった。ラルリーグに心配かけることもなかったのに。

「リリイ、頭の怪我の具合はどう、痛くない？ 何か欲しいものがある？」

ラルリーグはそっと、リリイの手を握る。優しい温もりが心まで温めてくれる様だ。

あの、悪夢のような出来事が本当に夢だったのではないかと思えてしまえるぐらいに。だが、頭の殴られてできた打撲が真実だと訴えかけてくる。

「ねえ、リリイ。その傷、どう見ても殴られたような感じだって先生言っていたわ。何があったの？」

「ラル、私にもよく分からない。多分人違いされて誘拐されそうになったんだと思うの」

正直なところ、リリイにも何が起きたのかさっぱり分からなかった。男たちは誰かに命令して浚おうとしていたようだが、その理由が分からない。

リリイはシーツをぎゅっと握り締めた。思い出すだけで背筋が凍る。自分が非力だと言う事。男のいやらしい視線。自分はただの女の子でしかない事を思い知らされた。助けがなければ、人前に出られないくらい辱めを受けるところだった。

それにしても誰が助けてくれたのだろうか。

見た事がない様な美しい銀の髪だけが脳裏に焼き付いている。おとぎ話に出てくる妖精や、精霊の様な神秘さを秘めていた。でもどこか懐かしを感じさせる。

見た事がないはずなのに。

思い出すと、知らない動悸が襲いかかる。

リリイの恐怖を感じ取ったのか。ラルリーグは眉をひそめ、リリイの手をしっかりと握りしめた。

「もう大丈夫。私がいるから怖い事なんてないわ。まだ疲れているみたいだし、ゆっくり休んで？」

「ありがとう、ラル」

リリイはゆっくり目を閉じる。しばらくして、寝息が聞こえてきたのを確認して、ラルリーグは立ち上がった。瞳の輝きが一瞬揺らぐ。不安そうな、だがどこかきつぱりとした意思を感じる様でもあった。

「あなたを運命が見放してくれればいいのに」

小さく、苦々しく呟く。

そして、ラルリーグは医務室を出て行った。

医務室に静寂が訪れる。

春の渡り鳥の鳴き声が遠くから聞こえてくる。

リリイはそっと目を開け、ずきずきする胸に手をあてた。

ラルリーグの眩き。リリイに向けての言葉が胸に突き刺さる。  
今のラルリーグの眩きはどんな意味があるのだろうか。嫌そうな、  
苦しそうな声だった。

もしかして、自分がラルリーグを苦しめているのだろうか。ラル  
リーグを知らず知らずのうちに傷つけてしまっていたのかもしれ  
ない。

でも嫌いというか、何かを知っているのを黙っている様だった気も  
する。それを苦しんでいる？

リリイに言えない何かを抱えている。しかも、リリイが関係するこ  
とで。

「大体、謎が多すぎるわ」

リリイは何だか腹立たしくて、宙を睨む。

「リー、起きたの？」

ふと、ベッドの下から声が聞こえる。よく知っている自分の使い魔  
の声だ。

アンはぴょんと飛ぶとリリイの顔の横に着地した。

「リー、市場で迷子になったりするからだよ。僕、何度も声かけた  
のに反応返ってこなかったし、一人でふらふらした罰だね」

言いたいこと言うのが、この使い魔の性分だ。昔から小姑のように  
言われ、リリイはいらないストレスをたくさん抱える羽目になって  
いた。

リリイはアンのしつぽを思い切り握り締めた。  
もちろん、あまりの痛さにのたうち回る。

「悪いけど超機嫌が悪いのよ、私。分からない事がいっぱいあって」  
「本当にリーはきょう……うつん、なんでもない」

言いかけた言葉を、アンは急いで飲み込む。リリーの目が怖かったからだろう。今はまじめに話をした方が身のためだと感じたのか、まっすぐリリーに向き直った。

「アン、市場で私を呼び掛けたって、どこから？」

「えっと、カップケーキ屋ってここ？ 早く買いに戻ってきてよ。とか、いい年になって迷子なんて恥ずかしいよ……とか」

リリーの痛い視線を感じるのか、だんだん口調がしどろもどろになっていた。

だが、リリーはそれよりも「やっぱり」と思う。

リリーが聞いたアンの声は本物ではなかった。誰かが仕組んだのだ。リリーがああ馬車乗り場の裏に誘導するために、ということとは。

「……かなり顔見知りの可能性が高いってことね」

「確かに。僕の真似をしてリーに気づかれないなんて、僕たちのことをよく知らないといけないよね？」

リリーは小さく頷く。あまりそうは考えたくないが、状況がそう語っている。

アンの真似をしてリリーを呼び出せるほど二人の関係を熟知している事。それに、リリーを浚おうとしていた男たちの会話。「あと少しで懐柔できる」と言っていたのだ。

リリーを懐柔しているということならば、相当仲がいい事になる。

「まさか……」



リリイは嫌な予感に頭を振る。そんな筈、絶対にない。

だが、どんどん不安な気持ち膨らんでいく。

だから、悩んでいるの？

だから、苦しそうなもの？

親友だと思っていたのは私だけ？

リリイは拳を握り締める。自分の嫌な考えを振り払うかのように。

アンはリリイが何を思ったのかすぐに気がついた。そして、小さな肉球のついた前足で、優しくリリイの額を撫でる。

そんな筈はない。だが、彼女が何かを抱えているのは事実で。

そして、きっとリリイが傷つけてしまった事も事実であるのだろう。頭が混乱する。胸がずきずきと痛い。

涙をこらえながら、リリイは毛布に顔を埋めた。

## 庭師の青年との出会い（前書き）

明けましておめでとございます!!

この話は新年にぴったり？な感じで新しい登場人物が出てきます

よろしくお願いします

## 庭師の青年との出会い

自室に戻っていいと言われたのは、あれから三日ほどたった昼下がりの事だった。

春風がリリーの頬を撫でていく。

リリーは中庭のベンチにアンを引き連れて座っていた。

三日前に比べて、頭は少しずつ冷静さを取り戻してきている。だが、心はまだ追いつかない。

空を見上げて小さく息を吐く。

あれから、ラルリーグは何度もリリーの元に顔を出しに来てくれた。いつもと変わりのない優しい笑みを、リリーに向けてくれていた。

だが、嫌な予感を払拭出来ることはなく、むしろ、ラルリーグに会うたびに胸がもやもやとする。

笑顔の仮面をつけた人が目の前にいるような気がしてしまう。

前の様に、ラルリーグの笑顔を素直に受け止められない自分がいた。

なんて心が狭いのだろう。まだ確信したわけではないのに。

親友の事を信じることなんてできない。自分はそんな薄情者だったのだろうか。

それも、少なからずリリー自身にショックを与えていた。

今もラルリーグと顔を合わせたくなくて、中庭の中でも特に木々が鬱蒼と植えられた所にあるベンチに隠れるように座っている。

自分が嫌いになりそうな気分だった。

だけど、整理できない。まだ馬車での出来事が心を震わせるし、ラルリーグの言葉も離れない。

リリイは空の色を見つめる。昼間では見えない月を思い出す。白銀色の、闇を切り裂く温かで、優しい中にも強さを秘める希望の光。私を助けてくれたのは誰なのだろう。

銀髪の男の人だというのは何となく覚えている。気を失う前に輝く銀髪。

どこか懐かしい。

どこかで会った事があるのか。いや、あんなに特徴的な髪を忘れるだろうか。

思い出すと、ラルリーグとはまた違う胸の痛みが心を騒がせる。

まだ知らない胸の痛み。

本当に知らない？

「リー、どうしたの？」

アンが心配そうにリリイの顔を覗く。はっとして、リリイはアンの事を優しく抱きしめた。

「うっん。何でもないわ」

そう、何でもない。心が落ち着かないだけ。

早くいつもの日常を取り戻さなければ。

とりあえず、今は自然の力を分けてもらって元気になろう。

リリイはアンの毛並みを撫でながら、目を閉じる。

自然の音だけが聞こえてくる。さわさわと葉の音と小鳥の囀り。

心が落ち着く優しい音色に耳を傾ける。

そして、ざくざくと枝を切り落とす音。

切り落とす音？

違和感に気がついて目を開けた時、リリイの真上から切り落とされた枝が落ちてくる。

「きゃっ」

小さな悲鳴を上げた時、アンが素早くリリイの手から飛び出て、枝を蹴り上げる。

ぎりぎりでリリイは枝の直撃を免れた。

「あ、ありがとう。アン」

「全く、危ないなあ」

アンはぶつぶつ言いながらリリイの肩の上に戻る。

落ちてきた枝はそんなに大きくなかったが、顔面に直撃すればかなり痛かっただろう。

訝しげにリリイは木を見上げる。

大きなブナの木。その木の上に人影がある。

今までどうして気づかなかったのだろう。大きな鋏を持った青年がリリイを見下ろしていた。

輝く蒼い瞳が面白そうに光る。リリイは言葉が出なくて息をのむ。

青年は高い木の天辺から飛び降りた。羽が生えているかのように軽やかに。

リリイは思わず見惚れてほうと、息を吐く。

深く被ったハンチングハットから覗くのは双方の蒼い瞳とそれに不釣り合いのような焦げ茶色の短い髪だった。

作業着についた葉を手で払い、リリイにゆっくり近づいてくる。

「すまない。少し手元が狂ってしまったんだ。怪我はない？」

リリイは小さく眉をひそめる。言葉が謝罪しているが、顔がにやけていて誠意が全く籠っていない。

人を魅了する魅惑的な瞳。リリイは胸が痛かった。

銀髪の人を思い出した時と同じ動悸。でも、髪の色が全く違う。明らかに違う人のはずなのに。なんだか変な言葉を口走ってしまいそうになる。

「会いたかった」と。この人は初対面なのに。

リリイは大きく息を吸い込み、気持ちを落ち着かせる。

「あなた、誰？ 初めて見るけど生徒じゃないでしょ？」

青年は小さく口元を結ぶ。小さくて一瞬の青年の表情をリリイは気がつかなかった。すぐに青年は朗らかに笑いかけていたから。

「二日前から入ったただの庭師だよ。校長に伸び放題になっている中庭の整備を任されているんだ。君はこの生徒かな？」

「そうよ。仕事をしているのに気がつなくてごめんなさい」

「いや。怪我がなくて何より。優秀な使い魔を持っているようだね」

青年は自分を睨んでいるアンに優しく微笑む。

「俺はネス。よろしくな」

「私はリリイです。こちらこそ」

リリイは微笑んで青年、ネスと握手を交わす。ネスは何か言いたげにリリイを見下ろしている。

「何？」

「リリイって小さいなって思ってた」

そう言つて、小さな子どもをあやすように頭を撫でられる。リリイの顔は真っ赤になる。

「し、失礼な人ね！ 小さいって……気にしているのに」

口を尖らせて顔を横にそらす。

確かにリリーの身長はどちらかというと平均よりも小さい方だ。だが、余分な脂肪も筋肉もないしなやかな体は、十分に誰に引きを取らないほど魅力的だ。

残念なことに肝心な本人は全く気付いていなく、コンプレックスばかり抱えている。

ネスは何かを懐かしむかのようにリリーを眺めていた。

その視線が何だかくすぐったかった。しかも、動悸の激しさが増す。

「あら、リリー。ここにいたの？」

リリーはどきりとして、声のする方を振り返った。そこには優しく微笑むラルリーグが立っていた。

リリーに嬉しそうに駆け寄り、優しく手をとる。

「医務室に迎えに行ったらもういないんだもの。探しちゃったわ」  
「ラル……ご、ごめんなさい。ちよつと空気吸いたくて」

やっぱり、ラルリーグの事を真っ直ぐ見られない。リリーは居た堪れない気持ちでいっぱいだった。

ふと、ラルリーグがネスの方を見やる。

ネスの眉がぴくりと上がる。

「あら。この方は？ 生徒じゃないみたいだけど知りあい？」

リリーの瞳をぐいつと覗き込むようにラルリーグが聞いてくる。

心の中に無断で踏み込まれたようで、何だか嫌な気分だ。

だが、それを悟られない様にリリーは笑顔を作る。

「今知り合ったばかりなの。中庭の整備をしている庭師の方よ」  
「そう。今知り合ったばかりなの」

ラルリーグはふふと笑い、ネスを見るのをやめてリリーの腕を優しく引く張る。

「それよりも、午後の授業が始まるわ。午後からは出るのでしょうか？」

「そうだけど」

「ならすぐ行かないと間に合わないわ。さ、行きましょう」

「で、でも……」

もう少しここにいたい、そんな気持ちがある事にリリーは自分で自分に驚いた。名残惜しそうにネスを見上げる。

ネスは鋏を肩に担ぎ、もう歩き始めてしまっていた。

「じゃあ、お二人とも勉強頑張りな」

そう言つて、ネスは茂みの中に消えていった。

リリーはラルリーグに手を引かれるまま中庭から出ていく。無意識に何度も振り返りながら。

不思議な人だわ、とリリーは心の中で呟き、諦めたようにラルリーグと並び校舎へと向かつて歩き始めた。

アンがそつと離れた事にも気がついたのは校舎に入ってからだった。



## 庭師の青年との出会い（後書き）

彼は一体何者なのでしょうか・・・？

ただの庭師？

うん。

きっとそう。

でも、何か・・・？

続きもぜひよろしく願います

## 木漏れ日の温もり

教室に入ると生徒たちからの視線がリリーの全身を刺す。リリーを見て、ひそひそと隠れて話をする女子生徒たち。面白そうにリリーを眺める男子生徒たち。

あの事件の事が噂になってるのは一目瞭然だった。

あの事件の事はリリーも分からない事だらけで、あまり触れたくないところでもある。遠慮のない視線が刃物の様に思えた。

ラルリーグは予習のため、魔法書を開いて読みふけていて、リリーの事に気が付いていない様子だった。

気がつかれるのも何だか嫌だった。リリーは何事もなかったかのようになしやんと背中を伸ばして、授業の準備をする。

本鈴が鳴り、視線はリリーから外れて前の黒板に向けられた。

ほっとしながら、何故か先ほど出会ったばかりのネスに無性に会いたかった。ネスの笑顔が心を温めてくれる気がする。

羽ペンを動かしながら、リリーはそっと空を見上げ、ネスの瞳の色を思い出した。

授業が終わるとリリーは急いで立ち上がり、教室を去った。

ラルリーグが驚いたように目を丸くしていたが、あまり気にならなかった。

今日は授業を受ける気になれない。

足は中庭へと向かっていた。

ふと中庭に出る直前、廊下の真ん中にトイーが立っていた。

いつもと変わらない笑顔をリリーに向けてくる。そういえば、医務室にトイーからお見舞いの品として毎日果物と大量の花が送られていた事を思い出す。

不本意ではあるが、見舞う気持ちは少なからず嬉しいものだった。

邪険にするのはさすがに失礼だろうと、リリイはトーイの前で止まった。

「やあ、リリイ。君のクラスはまだ授業があるんじゃないのかな？それとも僕に会いに来てくれた？」

「違うわよ。ちょっと体調良くないから中庭に休みに来たの」

「そう。体調が悪いように見えなかったけど？」

悪戯っぽく笑い、リリイに一輪の花を差し出す。きれいなヤマユリの花だった。

「一応退院お祝いという事で受け取ってくれるかな？」

「ありがとう。お見舞いもしてくれて嬉しかったわ」

リリイは素直に花を受け取り、かばんの先に差し込んだ。目を細めて嬉しそうに口元を緩めるトーイの姿は、他の生徒と違うと感じさせる。奇特なものを見る好奇の目ではなく、前と変わらない柔らかな視線。

あんなに嫌な奴だと思っていたのに心が少し軽くなる気がした。

「あと、今日は中庭には入れないみたいだよ」

トーイが中庭の入り口を指さす。授業が始まる前まではなかった看板が立てられていた。看板には「整備中のため、進入禁止」と書かれてあった。

ネスが立てたのだろうか。先ほどリリイに切り落とした枝を落としてしまった事を考慮したのかもしれない。

猛烈にがっかりした気持ちが心の中を渦巻く。仕方がないから諦めるしかない。

トーイはふと、体を屈めてリリイの耳元で小さく囁く。

「リリイ。僕の言葉は信じられないかもしれないけれど、よく聞いて。ラルとは関わらない方がいい」

「え？ どういう事？」

いきなりの不穏な言葉にリリイは後ずさりしそうになる。それを、トーイが腕を掴んで阻止する。

「実はラルは黒教徒の使徒かもしれないんだ」

リリイは大きく目を見開く。

黒教徒とは悪魔族の復活を願う、邪神を崇める人たちの事を指す。暗黒時代こそ、人間の本来の姿だと訴え、全ての人々は理を壊した罪人だと主張している。

あまりにも過激な思想で、国は黒教徒を弾圧している。そんな危険な人たちの仲間？

あのラルリーグが？

「そ、そんな筈ないでしょ？ なんで魔法学校になんているのよ」  
「生贄と、新しい仲間を作るためじゃないかな。魔力の強い人間は悪魔族にとって格好の贄になる。そして優秀な魔法使いを仲間にするれば国を恐れる必要はない」

ぞつとする話だった。例えラルリーグがそうであっても、そうでなかったとしても。その可能性はないとは言えないのだ。もしかしたら近くにいないかもしれない。

「ラルは身元を隠してかなり高い金を払って、この学校に入ったらいいんだ。しかも、ラルに思いを告げた男子生徒は次の日には辞めた事になっている」

確かにこの学校をやめるものは少なくない。金銭的な理由もあるが、訓練や高度な授業についていけず挫折してしまうらしい。

ラルリーグはよく男子生徒に呼び出される事があった。だが、リリーは誰に呼ばれたのかまではさすがに知っていることは少ない。

だから、トーイの話を鵜呑みにする事は出来ない。だが、確かに最近は男子生徒がいつの間にか減っている事には気が付いていた。

それがラルリーグの仕業だというのか。

自信もってそんな事無いと言いたい。だけど、馬車での男たちの言葉がリリーの頭から離れない。

私を懐柔出来そうなんて、一人しかいないから。

それをトーイの言葉が裏付けているような気がして、リリーは気分が悪くなってきた。

嫌な感情で押しつぶされそうだ。

ふらつくリリーの体を、トーイが力強く支える。

「大丈夫。僕が君を守ってあげるから。君への気持ちは嘘じゃないよ。緊張してすぐふざけてしまうのは僕の悪い癖だ。でも、信じてくれ。僕は君だけを……」

「トーイ……」

頭がくらくらした。こんな不安な時に聞くトーイの言葉はとても力強く、いつもみたいな嫌悪感はなかった。

ヤマユリのいい香りが、何も考えられなくなる。

トーイの顔がリリーと重なる。トーイの顔が近づいてくるが、リリーは動けなかった。

唇が触れそうになった時。ふと、ひゅんつと風が鳴いた。

その音にはつと我に返った。風で、ヤマユリの香りが飛んでいく。急いでリリーはトーイの胸を押しつける。

「やめてよ。恋人でもない女性にそういう事するあたりが信じられないの」

「恋人じゃない、か。はつきり言われると僕も傷つくんだけど」

わざとおどけた様にトーイは肩を落とす。我に返り、改めてトーイを見る。

甘い言葉ばかり吐く男はろくな男がいないというが、まさに典型的な男だと、リリイはつくづく思った。

危うく大切な唇を奪われるところだった。

「ご忠告には感謝するわ。でも自分の事は自分で守れますからお構いなく！」

リリイはそう言って、中庭を塞ぐ看板を退かし、中庭へどんどん入っていく。

「入ってはダメだつてば」

「忘れ物があるの。失礼するわ！」

そう言い放ち、リリイは泣きそうになるのを必死に堪えて中庭のブナの木があるベンチに向かって歩いていった。

ベンチにはブナの木の葉から零れる光が宝石のように輝いて揺らいで降り注がれていた。

そこに座り、リリイは突っ伏した。

何もかも嫌な気分だった。

いつからこんな嫌な気持ちばかりになってしまったのだろうか。

しかも今は唯一慰めてくれるアンまでも居ない。あの気まぐれ使い魔はどこに行って遊んでいるのだろうか。

よくある事だが、今日は許せる気持ちになれず、さらに苛々が募っていく。

涙が溢れてきそうだった。

でも拭ってくれる人は誰もいない。寂しさで呼吸するのもつらい。

リリイは目を閉じてベンチに頬をつけ、降り注ぐ温かな日差しを全身で感じようと、寝転んだ。

さわさわと葉の揺れる音が子守唄の様に心地が良かった。でも寂しさは消えず、ぎゅっと掌を握り締める。

しばらくすると、葉の音とともにリリイの小さな寝息が聞こえてきた。体は全快ではないし、精神的に相当疲れが溜まってしまっていたらしい。

進入禁止の看板があるからか、中庭はとても静かだった。そんな静かな中庭にそっと、草を踏む音が紛れてくる。

一つの影がリリイに落とされても、リリイは起きる気配はなかった。影の主は安心したように息を吐き、ベンチの端に腰を下ろした。しばらくリリイを眺め、そっと髪を撫でる。

閉じられた瞳から滲むのは小さな涙だった。光を反射して宝石の様に輝きを放つ。零れる事はない涙がリリイの心を表しているかの様で、切なくなる。

傷ついている心を、寝ながらも必死に隠そうとしているのか。でも、隠しきれない思いが苦しめている。

このまま連れ去ってしまえばいいのに。でも、まだ出来ない。

そっと気づかれない様に指をリリイの目元に持つていく。湿ったまつ毛に触れ、わずかの涙を拭う。

そして、優しくこめかみにキスを一つ落とす。

「早く俺の花嫁になってくれ……」

小さく呟き、影の主はそっとその場を離れた。名残惜しそうに何度も振り返りながら。

## 動き出す陰謀

陽が少し傾き、肌寒くなってきた頃、リリイはつんつん突かれるのを感じて、目を覚ました。

目の前にあったのは小さな海と空……ではなく、ネスの蒼い瞳とばつちり目が合っていた。

「おい、風邪ひくぞ？」

「きやあつ」

恥ずかしくて急いで起き上がる。急に顔を上げたのでくらくらした。面白そうに箒を持ってネスがリリイの顔をのぞいている。

「リリイ、こんな所で寝ているなんて、生徒って意外と暇なのか？」

「えっと、違うの。ちよっと今日は気分がさえないから授業さぼっちゃったの」

「へえ。進入禁止の中庭で？」

につこりと言われ、リリイはうつと言葉に詰まった。確かに進入禁止と書かれてあったのに入ってきてしまった。

しかも泣きながら寝てしまったなんて恥ずかしすぎる。

「……ごめんなさい」

「いいけど、別に。落ちてきた枝で低い鼻がもっと低くなくてもそれは俺のせいじゃないからな」

「あなたねえ」

リリイは何か言い返してやりたいが、今回は明らかにこっちに非があるので言い返せなかった。そして、思わず鼻を触ってしまう。



ネスはリリイの隣に腰を下ろし、大きく背中を伸ばした。手は真っ赤に腫れていた。作業に不慣れなのか、相当の量の仕事をこなしたのか。

まさか不慣れという事はないと思うが……

「何か嫌なことでもあったのか？」

「え？」

ネスの優しい声にどきりとする。そしてはっと、目元を触って気付く。ぼろぼろ大泣きはしなかったが、堪え切れない涙で目が腫れてしまっていた。

それと、夢の中で優しく涙を拭ってもらえた気がしたのを思い出す。優しい温もりが目元とこめかみに残っていた。

それにネスの視線も重なり、頬が紅潮していくのを感じる。

ネスはリリイの言葉をじっと待っていてくれた。

「……うん。嫌な事は確かにいっぱいあるけど、一番嫌なのは自分かな」

「どうして？」

「友達を信じられなくなってしまった……ずっと私を助けてくれていたのに。一緒にいて傷つけてしまっていたかもしれない。嫌われているかもしれない。しかも、友達の悪い噂まで聞いてしまっている」

リリイは不思議と言う事を躊躇わなかった。ネスなら聞いてくれる気がするのだ。

しかも、どこか安心できる。

ネスはリリイの瞳をじっと見つめる。リリイは全てを見透かしそうなネスの瞳に、吸い込まれてしまいそうだった。

ふと、優しくネスの口元が緩む。

「リリイは小さな事も気になって仕方がない性分だろう。しかも気になったら頭から離れなくなる」

「そう、かな」

「でも大丈夫。リリイの心の目はしっかりしているから。人の本質をしっかりと見抜ける力を持っている。肝心な所は間違えないよ」

不思議だった。

ネスに見つめられると動悸も激しいけど、それと同時に安心できる。ネスの言葉は信用していいと思える。

私の事を全て知っていて、分かってくれているような感覚。

今日会ったばかりなのに。

それとも、そう信用させてしまう魔力を秘めているのかもしれない。あの澄んで輝く蒼い瞳には。

ネスはふと目を細める。リリイが「何？」と聞こうとした時には口を塞がれ、茂みの中に引き込まれていた。

「しっ」

ネスに耳元で囁かれ耳が熱帯びていく。リリイは必死で頷く。

塞がれていた口を解放され、ネスを見上げる。ネスは口元に一本の指を立て、悪戯っぽく笑っていた。だが、すぐに表情は真剣なものへと締まる。

茂みの間から見えるのはラルリーグの姿だった。リリイを探しに来たのだろうか。

しかし、いくらなんでも隠れる必要はあったのだろうか。

リリイが眉を顰めて、ラルリーグを見る。

ラルリーグは周りを見回すと小さな手鏡を取り出した。どきりとする程、漆黒の装飾された不気味な鏡だ。

あんなものをラルリーグは持っていただろうか。

「主様、例の娘を捕えるのもあと少しです。なぜか少し感づいてい  
るようなので早急に事を進ませていきたいと思えます」

手鏡を使つて誰かと話をしている様だった。

リリイは嫌な心臓の跳ね上がり、気分が悪くなってくる。

誰と話をしているの、ラル？

例の娘って誰？

「……はい。魔力だけしか取り柄も何もない娘ですが、悪魔族の復  
活への最高の贄になるでしょう」

大きな岩がリリイの頭を殴ったような衝撃が走る。むしろ、本当に  
そうだったら良かった。そうすれば、聞かなかった事に出来たかも  
しれないのに。

ネスは力の抜けていくリリイの体を支えてくれていた。

ラルリーグは手鏡をしまい、周りを見回しながら静かに中庭から  
去って行った。

ネスに引きずられるように、リリイは茂みから出てくると、その場  
に座り込んだ。立てない。いや、立とうという気力がわいてこない。  
二年間ずっと一緒だったラルリーグ。お互いを信頼し合い、何で  
も言い合える親友。

そう思っていたのはリリイだけだったのだろうか。

あまりの出来事に涙も出てこない。

ネスはリリイを抱き上げ、軽々とリリイをベンチに移動させてくれ  
た。ネスの表情も険しいものだ。

だが、何を考えているのか気付けるほど余裕はなかった。

「ラル……最初から友達じゃなかったのね」

自分があまりにも滑稽に思えてきて、悲しすぎて笑いが込みあがってくる。私は結局、ずっと孤独だったのだ。それに気づけないなんて。

「リリイ」

ぐいっとネスに顔を引き上げられる。今の顔を見られたくなかった。きつとひどい顔をしている。リリイは顔を背けようとするが、ネスの力が強くて動かせなかった。じっと見つめられ、だんだん気持ちの波が押し寄せてくる。気持ちの波は涙となって溢れた。

「ふっ……っっ」

「馬鹿だな。我慢してどうする。こういう時は泣いていいんだ」

力強い言葉。甘えてはいけないという気持ちと、甘えてしまいたい気持ちとがせめぎ合う。

絶望した心を、ネスが掬い上げてくれる様で、涙が止まらなかった。優しく抱きしめられ、リリイはネスの胸に体を預ける。

温もりが心を包み込んでくれる様な気がして、リリイは嬉しかった。悲しい気持ちが溶けていく。

リリイが落ち着いた時は、既に陽は落ち、周りは夜の闇に閉ざされていた。ぽっかり浮かぶ月は細い糸の様だ。星が宝石のようにきらきらと瞬いている。

「落ち着いたか？」

「ごめん、なさい……」

「そこは謝るところじゃないだろうっ？」

うつすらとした闇の中、ネスが悪戯っぽく笑う。それにつられて、

リリイも小さく笑う。

「えっと、ありがとう……」

「そうだ。それで合っている」

満足そうに言い、リリイの頭を撫でた。また子ども扱いされているような気がしたが、今は気にならなかった。

「もう少し、ラルのこと考えてみるわ。あれが本当のラルの姿とも限らないから」

「そうか。よし。目を閉じてみな」

「え？」

「目を閉じて心の目で見るんだ。お前の心の目はしっかりしているって言っただろう？ きつと何が本当なのか見抜ける」

リリイはネスの言う通り目を閉じる。心の目、本当に自分にもあるのだろうか。見抜けるのだろうか。

ふと、ちゃりんと、小さな音が聞こえる。

目を開いてみると、ペンダントが下げられてあった。大きな真珠がまるで満月のようなペンダントだ。

「これ？」

「俺のお守り貸してやるよ」

「え？ でも」

「いいから。その代り、絶対に肌身離さず身につけておく事。いいな？」

有無を言わせないネスの言葉に、リリイは頷くしかなかった。頷く姿を見て、ネスは安心したように微笑んだ。

なんだか、ネスが近くで守ってくれる様で、くすぐったい気持だっ

た。

「ありがとう。でも、本当にいの？」

「ああ。しっかり持っておいてくれよ」

「うん。ありがとう」

ネスは眩しそうに目を細めた。暗闇の中なのに、変なの。

とりあえず、ラルリーグの事は確信するまでは今まで通りでいようと思えた。きっと、ネスがペンダントを貸してくれたから、一人じゃない気がするから頑張れる気がするのかもしれない。

先ほどまでとは比べ物にならないくらい元気がわいてきた。

ネスは不思議な人。本当に。どうしてこんなに元気を分けてくれるのかしら。

「ねえ、また明日もここに来てもいい？」

「ああ。大抵ここににいるから話ぐらいいつでも聞いてやるよ」

ネスの言葉に安堵しながら、リリイは自分の力で立ち上がった。なんとか頑張れそうだ。

「ありがとう。じゃあ、また明日」

リリイはそう言って、中庭を去って行った。その姿をずっと、ネスは見送る。

ほうと息を吐き、つい先程まで抱きしめていたリリイの感触を思い出す。男の自分とは明らかに違う体。温かくて、とても柔らかくて溶けて消えてしまうのではないかと思った。

ネスはふと、非難するような視線を感じ、ひとつ咳払いをする。茂みから水色の髪が靡くように現れた。

「別にやらしい事を考えていたんじゃないからな」

「そうですか。顔にスケベと書いてありますけどね」

投げやりのような言葉に、ネスは一瞬むっとするが、リリイといった時の気持ちをまだ感じていたかったから、気にしないように努める。

「それより、至急調べてほしい事がある」

「ラルリーグの事ですね」

「淡々と言うな。内心焦っているくせに」

ネスのからかうような言葉に小さく眉をひそめたが、青年はついと顔を背けるだけだった。

「私はしがない主のために動くしかないのですから、自分の事を気にしているわけにはいきません」

敬語で丁寧な口調だが、どこかぞんざいでな言葉使いが特徴的だった。ネスを敬っているようだが、対等の様に感じさせるのは、青年の態度が大きいからであろうか。  
だが、ネスは気にした様子もなく、小さく手を振る。

「お前の腕は信用しているんだ。頼むよ……時間は無い」

きらりと、青年の紫水晶の様な瞳が不敵に輝く。

「御意のままに」

そう言って、水色の髪 of 青年は深く礼をとると、闇に溶けるように消えていった。

残されたネスは月を見上げ、小さく息を吐く。そして、強く拳を握

り締める。

「何としてもリリイを……」

ネスの最後に呟いた言葉は風に乗って消えていった。  
リリイが座っていたベンチを名残惜しそうに見つめ、深くハンチン  
グハットを被り直す。ネスも闇夜の中、動き始めた。  
もう時間は、ない。



## 立ち向かう朝

次の日の朝、リリイは鏡の前に立つ自分の姿を見つめる。

少し泣いて腫れていた瞼も、冷水で冷やしたら目立たなくなった。

だけど、今までの自分とどこか違う気がするの、気のせいだろうか。

何だか、制服のローブが味気なく感じて物足りない。もっと、花やアクセサリーで飾りたいと思う。

今まで女子生徒の制服への不満の聲が、意味のないものに思えていた。だが、今日はいつになく同意したい気分だ。

ふと、朝日を受け輝く胸元。そこには真珠のペンダントがあった。

陽の下で見ると、その美しい光沢がより一層、鮮やかで眩しい光を放つ。

きっと、極上の真珠に違いない。

ネスのお守り、それだけでも輝きを増す気もしてくる。

リリイにとって、今まで一番素敵なペンダントという事には間違いない。

でも、しがない庭師が持てる品物だろうか。

そういう疑問も湧いてくる。実はとんでもない代物だったりして。

リリイは頭を振る。そんなこと思っるのは貸してくれるネスに対して失礼というものだ。

このペンダントが勇気を分けてくれる。

だから、今日も頑張れる気がする。

他の女子生徒に見つからない様に、そっとローブの中に隠すように首から下げた。

なんだか、見られたくないのである。

「それにしても、アンのやつどこに行つたのかしら」

リリイは部屋を見回し、小さく息を吐く。

気まぐれな猫の気質の使い魔は、ふといなくなる事が多々とある。今までも勝手に散歩したり、麓まで降りて甘いものを食べていたりする事が少なからずあった。

だから最初は気にしていなかった。

だが、朝になつても帰つてこないなんて滅多にない。何かあったのだろうか。

あの、リリイを襲つた事件。アンの事も熟知していたから心配だ。アンは「リーはとろいから気をつけなよ」なんて言っていたけど、のんきな使い魔ほど隙だらけな存在はない。

午後まで待つて帰つてこないようなら精神をつなげてどこにいるのか探してみよう。

精神をつなぐという魔法使いと使い魔にとって当たり前の術も、リリイはうまく制御できず、普段はアンから送られてくる精神を受けることがほとんどになつてしまっている。

歯がゆいが、だったらもつと訓練を積むしかない。魔力だけが取り柄だなんて、思われなくなかった。

とんとんと、珍しくラルリーグのノックの音が聞こえてくる。

「リリイ、おはよう。朝ごはんを食べに行きましょう」

穏やかなラルリーグの声。リリイは大きく息を吸い、吐く。頬を叩き、気合いを入れる。

「うん、今行くね」

リリイは意を決し、ドアノブを回した。

今日の朝食のメニューはアップルパイに、こんがりと焼いたガーリックトースト。スクランブルエッグにハーブ入りのソーセージ。燃費の悪い魔法使いの卵たちの活力になるように、今日も大量の料理が皿に現れる。

食堂は授業のある今日はとても賑やかだった。机ごとに色々な話題が飛び出してくる。

今日の授業の事、課題の事、クラスメイトの話。生徒たちは話題に欠く事なく、楽しそうに過ごしていた。

リリイも必死にラルリーグに話しかけ、楽しい時間を過ごそうと努めた。

でもどこか余所余所しかった。

とにかく栄養補給だけはしっかりしておかなければ。

リリイはアップルパイを頬張り、甘酸っぱい香りを楽しむ。

ラルリーグはスクランブルエッグと、ハーブ入りのソーセージを美味しそうに口に運んでいる。

アップルパイをかじりながらリリイの動きがふと止まった。

ラルリーグが首を傾げてきたので「何でもない」と急いで返す。

今何か、違和感があつた気がする。何がそう思ったのか、よく分からない。

でも、確かラルリーグは……

何かを思い出しそうで思い出せない中途半端な感覚。

リリイはいつもなら足元にいるはずのアンを思い出し、そっと足元を見下ろす。

やっぱり不安な気持ちになって、心が不安定だった。

認めたくない事が起きている気がして、それから目を逸らそうとし

ている？

でもネスの言葉が蘇る。

心の目、私は見抜けるだろうか。真実を。

そして受け止められるのだろうか。

アップルパイがやけに酸っぱく感じたのは、隠しきれない不安がリイの心を締め付けているからだだろうか。

そっと、胸元に触れリイは残りを口に運んで行った。

## 胸の痛み

今日の午前の授業は、実験が主だった。

岩を雷魔法で砕いたり、炎を水魔法で消したりと、実践的なものばかりで、リリイは大抵大きな失敗をする。

今日も派手に岩を粉碎してしまい、担当の教師に説教という名の雷を落とされる羽目になってしまった。

少しずつ制御ができてきた気がするのだが、でもまだまだなのが現実だ。

特に今日みたいに気持ちぐ不安定な時は失敗をしやすい。

リリイは頂垂れながら、他の生徒の様子を見学する。

同じ年数を重ねた同級生たちは誰もが自在に魔法を発動させ、操るリリイみたいに力が入りすぎて失敗など、初歩的な失敗をする者は誰もいない。

ラルリীগも相変わらず手際よく魔法を操っていた。

周りから賞賛の拍手をもらい、嬉しそうにほほ笑む。リリイとは全然違う。

私だけが取り残されていく。

こんなんで一人前の魔法使いになれるのだろうか。  
ぼんやりと眺めていると、ふと鋭い悲鳴が聞こえてくる。

誰かが起こした魔法によって少し大きめに砕かれた岩の破片が辺りに吹き飛ぶ。

地面に大きな岩の刃が突き刺さっていく。

悲鳴をあげながら生徒たちは自分の周りに結界を張ってそれを防ぐ。こういう時、ラルリীগはリリイの所へ飛んできて、結界を張ってくれる。

だが、今日は距離がありすぎたのか、ラルリীগは自分の周りに

結界を張るので手一杯の様だった。

それとも、今回は動く気がなかったのか。

大きな岩の刃はリリイに向かっていくつも降ってくる。

今は守ってくれるアンもない。リリイは思わず目を瞑り、しゃがみ込む。自分の体に岩の破片がぶつかるのを覚悟しながら。

「きゃああああっ」

リリイに岩の破片が落ちる直前、突風が巻き起こる。

突風によって、息ができない。くぐもった息を吐きながらリリイは空を見上げる。

岩の破片は刃となりリリイに落ちる事はなかった。突風によって速度が落ち、人がいない芝生へと落ちていた。

リリイは辺りを見回す。こんな強力な突風、自然の力ではあり得ない。魔法で起こされたものだ。

ざわつく生徒たちの中、一瞬見慣れない水色の髪が動いている気がした。だが、すぐに生徒たちのざわめきに溶けるように消えていった。

気のせい？

でも確かに見た気が……

「リリイ、怪我なくて良かったわ」

ラルリীগが駆け寄ってきてリリイに微笑みかける。

リリイは頷き、突風によって巻き上げられた葉を払いながら立ちあがった。

「運よく風が吹いて来て、良かったわ。じゃなかったら今頃、リリイは串刺しになっていたもの」

ぎよつとする言葉にどきりと胸が鳴る。

安心した様にラルリーグはふふと、笑う。何だか、それを願っていたような笑みに、リリイは心に鈍い痛みが走る。

ラルリーグを信じようと思えば思っほど信じられなくなっていく気がする。

どうして？

ラルリーグはラルリーグなのに。

今の出来事で、校舎の窓がいくつか割れてしまい、午前の授業は早めに切り上げられる事となった。

リリイはラルリーグに見つからないようにそつと移動していた。目的地は勿論、決まっている。

中庭への通路には、今日も「整備中につき、進入禁止」という看板が立てられてあった。

リリイは周りを気にしながら、そつと中庭へと入っていく。耳を立てると、かすかにざくざくと木を切り落とす音が聞こえてくる。

リリイは気付かれないようにそつと、音のする方へと歩いていく。

ネスが今日はポプラの木の枝を切っていた。枝が硬いのか、悪戦苦闘しているように何度も鋏を動かしながらやつと切り落としている。庭師なのに切るのに慣れていない？

それとも疲れている？

遠目からそつと見る。そう言えば、ネスの事をよく見る余裕がなかった気がする。

体力にいる仕事をしているだけあり、筋肉質な腕が作業着から覗くだけで、無駄な肉がなくて、すらりとしていて、どこか庭師という

響きが似合わないと思えてしまう。

庭師にしておくにはもったいない、何か見えない何かを隠し持っているような雰囲気。

不敵で、強い輝きの瞳。あれは庶民の瞳？

もつと気高くて、人の上に立つ……

「変なの」

ぽつりと呟く。

見れば見るほど違和感がある人。何か、ベールに包まれている様で曖昧な存在感。隠そうとされていて隠し切れていない強い輝き。

本当は誰？ そんな疑問が宙に浮いている。

そして、一番の違和感は。

「うおっ」

変な声にはつとすると、ネスが枝から落ちそうになっていた。

慌てて、リリイが駆け寄ろうとすると、ネスは慌てることなく体制を整え、ひょいっと飛び降りた。

最初に出会った時もそうだった。あの身軽さはただの反射神経の良さだけじゃない。ちゃんとした訓練を受けている身のこなしだ。

疑問が湧いてくると、止まらなくなる。どうしてだろう。ラルリイーグの時とは違う不安な気持ちで胸が苦しい。

ネスはリリイに気がつく、柔らかく笑い、手を振ってきた。

「お前は本当に暇人みたいだな」

確かに頻繁に中庭に来る生徒は珍しいかもしれない。しかも、立ち入り禁止の看板が立っているのに。



「来てもいいって言ったじゃない」

「へえ、じゃあ俺に会いに来たんだ？」

ネスは悪戯っぽく笑い、リリーの顔を覗き込む。不安な気持ちを吹き飛ばすぐらいの威力のある笑顔が近づいてくる。

頬と耳が煮立ったかの様に熱い。顔を背ける力もなく、ネスを見返すしかない。

なんだか、振り回されているみたいで悔しい。

ネスの事で一喜一憂してしまう。今は、話しかけられて嬉しい。素直にそう思っているが、どうしてもだか分からない。

「今日もボディガードいないのか？」

「アンの事？ アンは基本的に気紛れだからすぐにどこかに行っちゃうの」

「それで、寂しいのか？」

「え？」

「昨日泣いていたから」

につこりと言われ、リリーは更に赤面するはめになる。やはり、泣いている事に気づかれていた。

でも、恥ずかしいけれど、嫌な気持ちにはならなかった。

負けず嫌いなリリーからすると、珍しい事だった。

ネスには弱っている所ばかり見られている気がする。

だけど、欲しい言葉や温もりをくれたのもネスだ。

ネスといくと、信じて大丈夫だと思える。違和感がたくさんあるのに。

騙されている？

それとも、私の心の目が実はネスを見抜いているのかもしれないから？

近くのベンチに座り、ネスは使っていた大きな鋏を袋の中にしまう。鋏は使い込んだというよりは、新しめの物だった。

ちらりと、リリイは見てはつとする。なんだか、あら探しをしているようだ。

よくない行為だと思い、あからさまにするのはやめようと、リリイは視線を外した。

「ネスって、昔から庭師していたの？」

「リリイ、俺が中年の親爺に見えるか？」

「え？ 見えないけれど」

「だったら、分かるだろう。やり始めも今もあまり変わらないさ」

なんだか曖昧な言い方だが、突っ込んで聞けず、リリイは小さく息を吐く。

きっと、何か探ろうとしても、この人には敵わない。何も聞き出せない気がした。

「リリイは何年ここにいるんだ？」

「あと少しでちょうど二年になるかな」

「その前は何していたんだ？」

「え？」

ネスのさりげない質問。知り合ったばかりの人同士がする、他愛ない問いかけ。

だが、その時。リリイを見るネスの顔は無邪気に答えを待っているようには見えなかった。

どこか意味が深くて、一語一句聞き逃さないだろう、そんな隙のない笑みを向けられていた。

リリイは、残念なことに質問に意識が集中してしまい、その事に気づけなかった。

「……お母さんと住んでいたわ」

「へえ。どこ辺りに？ スグワール公国内か？」

「え？ さあ……小さな村であまり交流の少ない村だったから」

リリイは答えながら冷汗が背中を伝うのを感じる。

自分の思い出を聞かれているだけなのに、怖い。思い出したくない事を暴かれそうで落ち着かない。話して感じる

思い出そうとすると靄が掛ったように詳しく思い出せない。  
虚無感。

何か大切な事が抜け落ちているようで怖かった。

ネスは小さく笑い、リリイの頭を撫でた。

ふっと、一気に心が軽くなるのを感じる。

切ない笑みだった。色々な思いが込められた小さな笑みがリリイの脳裏に焼きつく。

「ごめん……」

小さな呟き。何に対しての謝罪なのだろう。

質問について？

からかい調子な事を？

あなたは謎が大きくて分からない。

でも、傍にいたい。もっと知りたい。

この気持ちはどこから生まれるのだろうか。

リリイの胸も苦しかった。切なくてきゅうつと心が小さくまとまっ  
ていく。

「そういえば、今日は新月の夜だから気をつけろよ？」

ネスはハンチングハットを被り直し、リリイに向き直る。

いつもの柔らかな笑みを浮かべて。

新月の夜は悪魔族に夜を支配されると言い伝えられている。その夜に外に出ていると、魔界に連れて行かれるとか、生贄にされてしまふとか、体に乗っ取られてしまふとか、色々言われている。

迷信は迷信だが、新月の夜になると精霊が過敏になる事は魔法使いの卵のリリイも知っている事だった。

だから、魔法を使うと、いつも以上に危険が伴う。

特にリリイみたいな人が魔法を使うと、きっと収集がつかなくなるほどの大惨事を起こしかねない。

そして、黒教徒の聖夜としているのも新月の夜だ。

確かに用心した方がいい夜には違いない。

リリイが頷くと、安心したようにネスはリリイの手に、自分の手を重ねる。ごく自然に。だから、気がつくのに一瞬遅れた。

「ペンダントがあれば大丈夫。今日は早く寝るよ?」

「う、うん……」

触れられる手がじんじんと熱い。そこだけ発火しているかの様だ。手を引っ込めたくても手に力が入らない。

何か魔法を使っているのだろうか。

青い瞳と目が合い、眩暈さえしてくる様だ。

「わ、私! 午後の授業に出なきゃ。またね」

渾身の力を込めて、するりとネスから抜け出し、リリイは一目散に走った。

取り残されたネスは一瞬呆気にとられていたが、重ねていた手をそっと握り締める。

さらさらと砂の様に零れていく。

時間がないのに。焦るばかりで、上手く掴み切れない。

自分の気持ちを押し付けそうになった。リリイを暴こうとした。まだその時じゃないのに。自分の我儘で。ネスは深く息を吐き、鋏を腰に下げる。

「……分かってるな。今日動くだろう」  
「それは間違いなく」

ネスのすぐ後ろから声が聞こえてくる。水色の髪が風に揺れて輝いている。  
いつからそこにいたのか、そこにいるのが当たり前の様に立っていた。

「リリイから目を離すな」

「あなた様は振られましたからね」

「まだ振られていない」

むすりと言い返し、そう成りかねない自分に額に手を当てる。そうならない事を祈るしかない。

ネスはベンチから立ち上がり、まだ現れない新月を見上げる。今日を何とか乗り切らなければ未来はない。

「リリイ……」

小さく呟く。愛おしそうに、狂おしそうに。

長い夜はすぐそこまで足音を立てながらやって来ている。

## 夢の中に宿る想い

夕方になり、リリイは自室に戻って来ていた。

午後の授業は変わりなく、ただいつものように頭に入ってこなかった。ネスのことで頭がいっぱいだったのだ。

まだ頬は熱帯びている。胸の動悸も治まらない。

リリイはふと、絵本を本棚から取り出す。

大好きな童話。お姫様と王子様の話。

私にもいつか王子様が来る事を祈りながら、いつも見ていた。

リリイは絵本に描かれてある王子の絵にそっと触れる。

頭に焼きつくネスの笑顔。そして、銀髪の人の後ろ姿。

今まで心の中に男の人の存在があったことはなかった。ラルリーーグや勉強で手いっぱいだった。

でも、今は違う。男の人二人の事が離れない。

ネスは謎が多い。でも安心できる不思議な人。

銀髪の方は助けてくれた命の恩人。

神秘的で引き寄せられる何かを感じる。

でもネスの温もりに心がとろけそう。

どうして？

二人も気になるの？

私は……

「恋、しているのかな」

だったらどちらに？

リリイは頭を振る。まだ自分には恋なんて早い。

きっと、運命に人はまだどこかで待っている。

ラルリーーグが言っていたではないか。運命の人に会えば分かるも

のだと。

でも、胸の動悸が苦しくて……会いたいと思ってしまうの。

ふと、ヤマユリの花の香りが漂ってくる。

トイからもらったヤマユリだ。花には罪がないので、もらった後、花瓶に挿しておいたのだ。

大輪のヤマユリは一本だけでも存在感があり、いい香りを運んでくれる。

でも、今はいつも以上に香りが強い感じがした。

急に眠気がリリイを襲う。

アンと連絡を取ろうと思っていたのに。こんなに強い眠気は久しぶりだった。

疲れているのかもしれない。体力的にも、精神的にも。

リリイはベッドに横になる。すると、眠気の波が襲いかかってきた。

リリイは瞳を閉じ、眠りの中へと落ちて行った。

頭が重い。ずきずきと鈍い痛みが頭の中をぐるぐると回る。

リリイはゆらゆらと自分の体が揺れているような感覚に陥っていた。そう、ここは自分の夢の中。夢の世界にいるのだ。

夢の中は自分の心を表すかのように、揺らいでいて曖昧で不安定だった。

また、不安な気持ちで胸がいっぱいになる。

居た堪れなくて、走り出す。前にもそんな事があった。走ると待っているのは。

揺らぐ白銀色の髪。優しく輝く髪の人。その人に抱きしめられると、不安な気持ちが吹き飛ぶ。

温かくて、心地よくて。リリイはその人の胸にすり寄る。  
前の夢の時より、姿がはつきり見えるようになった。

見上げると、ぼやける表情の中で唯一見えるのは蒼い瞳。空のようで、海の様で。そうか、夜の海に浮かぶ蒼い月の光に似ている輝き。

そして、輝くのは白銀色の短めの髪。月光を糸にした様な滑らかな髪が軽くそよいでいる。

あなたはいつか会える運命の人？

ううん、違うと思う。

だって、私はこの瞳もこの白銀色の髪も知っている。

でも、蒼い瞳の人と、白銀色の髪の人とは別人だからちぐはぐしている。目の前の人は違和感なんてないのに。

私の記憶がちぐはぐしている。

「本当は気が付いているくせに」

誰？

今の声は私に声をかけているの？

リリイは周りを見回す。だが、他には誰もいない。でも声はどこか懐かしい声。

「このまま、離れ離れになっていいの？」

誰と誰が？

そう思いながら、嫌な胸騒ぎがする。

「あなたの心は分かっている筈。あなたは恋をしている？」

リリイの脳裏によぎったのは温かな笑みの青年の顔。そして銀の髪  
の青年。

頬がかあつと熱くなる。



それが答え？

「もう二度と、手を離さないで、お願い……」

切ない声だった。リリイは見上げて夢の世界を見つめる。

二度とつて、どういう意味？

リリイの中でばやけた残像が、一瞬飛び交う。

目の前の青年の姿が揺らぐ。

リリイは目を閉じて、揺らぐ青年に手を伸ばす。

未来の運命の相手ではない。知らない人ではない。

ずっと待ち望んでいた約束。約束の鍵を持つ少年。目の前の青年は、心はずっと分かっていた。

そう、出会った時から。だけど、心の目で見るのを恐れていて、気付かない振りをしていた。

心はこんなにも訴えていたのに。

リリイはそっと、目を開ける。

目の前の青年の姿がはつきりと見える。

揺らいでもばやけてもいない、柔らかな笑みの青年が、リリイに微笑んでいる。

リリイも笑い返す。そっと、青年が手を差し出すリリイはその手を取る。

青年は悪戯っぽく、片目を閉じ、リリイの手のひらに唇を落とす。

どきんと、大きく心臓が跳ね上がる。

俺、いつかお前を迎えに行くから。お前は俺と婚約したんだからな。

こんやくつてなあに？

俺のお嫁さんになるってこと

うん、いいよ。でも次に会えた時、私はきっと……の事覚えていないよ。どうするの？

大丈夫。また好きになる様にしてやるよ。

じゃあ、こんやくするよ、私。絶対に迎えに来てね。

勿論。どんな姿になっても、どこに行っても見つけ出してみせる。

柔らかに微笑む小さな少年。腰に剣を下げ、額に冠を抱くまだ小さな私だけの王子様。

幼いリリイは嬉しくて涙をこぼす。

運命は二人に別れを強いた。

ぼやけていた過去の記憶の一部がリリイの中で開花していく。

幼い時、魔法を教えていた父に連れられて大きな屋敷に行った事があった。そこにはリリイよりも一つ年上の少年が待っていた。

リリイは幼い時に知り合った少年に淡い恋心を抱いた。少年もリリイを気に入る、婚約ごっこのような遊びの約束をした。

でも、いつか本当になればいいとリリイは思った。本当に迎えに来てくれれば迷う事無く付いて行くだろう。

だけど、今の今まで忘れていたのは、運命がリリイと少年を引き裂いたからだ。

リリイの運命と少年の運命。

記憶が戻る事はないと、母はリリイに諭した。切ない顔の母を見てリリイは受け入れるしかない事を知った。

涙を流して流して、アンに慰められ、リリイは運命を受け入れた。奇跡を信じて。

そして、その思いは……

会いたい。会って、話さなければ。

そして、真実の名を呼ばなければ……

## 動き出す闇

夕闇がリリイの部屋を染める。リリイの亜麻色の髪が夕焼けに焼けたように橙色の金の髪のように輝いていた。

そこに一つの人影が現れる。

ラルリーグは深く眠っているリリイを確認すると、口の端を釣り上げた。

新月の闇の夜の訪れを喜んでいるかの様だ。

リリイの体を軽々と持ち上げる。魔法を使って、リリイが起きないように持ち上げたのだ。

ふと、ラルリーグは瞳を閉じ、振り返る。

気配のない後ろ。だが、ラルリーグはくすくすと、鈴を転がすように笑った。

「女の子の部屋に入るなんて感心しませんわ。何か用ですか？」

ラルリーグの声に応えるように、もう一つの人影が現れる。

水色の髪の青年だった。魔法学校の男子生徒の制服である、黒いマントと質素なシャツに動きやすい綿のズボンを履き、そこに立っていた。

紫水晶の瞳が、じとりとラルリーグを睨んでいる。

「お前は何者だ？ どうしてリリイに手を出す」

「可笑しな事を言うのね」

ラルリーグは目を見開いて、青年を見つめ返す。青年はその視線を不快そうに受け止める。

「私はリリイの親友よ？ リリイの部屋にいたって可笑しくも何と

もないわ。でも、貴方の方が可笑しいわね。リリイの事に思いを寄せる男子生徒かしら？ 寮の罰則は厳しいわよ」

確かにぱつと見たら青年がリリイの部屋にいる方が可笑しい。だが、平然と青年はラルリীগを見据えたままだ。

「だったら、可笑しいのはお互い様だろう。お前はリリイという少女の親友ではない」

青年のきつぱりとした声が部屋によく響く。ラルリীগはやれやれと、肩を竦める。

そして、冷たい光を宿した瞳でリリイと青年を見比べる。

「私はリリイの親友よ。それは変わりないわ。だって、二年間この子を憎らしくても支えてきたのは我が主様の贄に育てるため。だから、なつてもらわなければね」

「お前は真実を語っていない。お前が……リリイの親友の筈はない」

迷いのない言葉に、ラルリীগは眉を顰める。

青年は胸元から札を何枚か取り出す。魔法が込められた魔法符だ。放てば、詠唱なしで魔法が発動する。

「あなたに何が分かるというの？」

「俺には分かるんだよ。リリイの親友が誰なのか。どこにやった？」

青年の瞳に初めて、怒りが宿る。

「あいつだけでなく、リリイまで連れて行くのは許すわけにはいかない。俺の主の方が先に目をつけたのでね」

青年が魔法符を放つと突風が巻き起こった。リリーの部屋の本や羊皮紙など色々な物が舞い上がる。

ラルリーグはこの風魔法に見覚えがあった。そう、午前中の授業でリリーを岩の破片から守った突風と一緒にだった。

にやりと笑い、ラルリーグは突風の中、リリーを引き寄せる。

青年もリリーに手を伸ばす。

外は完全に陽が落ちている。新月が空を支配していた。

「もう、こっちの時間よ」

ラルリーグは懐から杖を取り出す。そこから強烈な閃光が放たれる。その瞬間、鈍い痛みが青年にぶつかる。

青年は目を開けていられず、一瞬リリーに手を伸ばすのが遅れた。

閃光が消えた時、リリーとラルリーグの姿は無かった。

青年は拳を握り締める。

あと少しという所で間に合わなかった。

いつもそうだ。大切なものは寸前で消えていくのだ。

「主に報告しなければ」

青年はよろける体を起こし、ラルリーグの笑みを思い出す。残酷な笑み。

違う。違うのに。

「ラル……」

青年は空を見上げる。諦める訳にはいかない。自分のためにも、大切な自分の主のためにも。希望はまだ消えていない。

ネスは傷だらけの青年を見て絶句した。そして、言われる前に何が起きたのか悟った。

労わるように椅子に座らせ、冷たい水で血を拭う。

「申し訳ありません、主」

「何言っているんだ。お前なりに精いっぱいやってくれたよ」

ネスの言葉に、青年は目を細める。この優しい主だから、付いていこうと思ったのだ。そう思っ、もう何年になるだろう。そして、運命も共にする決心もした。

大切なものを切り離す事になるとしても。

「痛そうだね。大丈夫？」

緊迫した雰囲気を一気にぶち壊しそうなんきな声が聞こえてくる。ネスはやれやれと声の主を振り返る。

「師範。もう少し空気読んでくださいよ」

「おっと。生意気な口を持っているのは君かな？」

ネスはぎゅうつと頬をつねられ、涙目になる。何とか、つねり攻撃から逃れると、赤くなった頬を撫でながら向き直る。

薄紫の髪をだらしく垂らしているが、濃い葡萄色の瞳に迫力があり、ネスを圧倒する。

アカギラ・ルルーミル。魔法学校の校長を務め、王宮の神官の一人だ。

ネス達がいるのは校長室の一室で、アカギラの書斎になっている。

「大体、どうして移動魔法使えなかったのですか？　それがあれば十年びったりで迎えに来られたのに。中央大陸からここまでどれだけの距離があつたと思うんですか！」

ネスは言いたくはなかったが、愚痴がついつい出てしまう。  
苛立ちが目に見えていた。

アカギラはやれやれと肩を竦める。

「だから言つたじゃないか。制約がかーなーりーあるんだって。だから簡単に君を私の魔法で連れてくる事は出来ないんだよ。それに、リリイは父の私の事も覚えてないんだ。覚えているのはアンの事とぼんやりと母の事だけだ」

不満そうにアカギラは言い、大きな椅子にどっかりと座った。  
そうだったと、ネスは肩を落とした。

アカギラとリリイは実際に血の繋がりがある親子だ。

だが、今はある制約の為に近づけないし、リリイも父であるアカギラの存在を覚えていないという。

それだけではない。

自分が暮らしていた里の事も覚えていない。

それはネスも知らなかった事で、アカギラに言われて驚いたのだ。

十年より以前の記憶がないのは承知していた。だが、二年より以前の記憶がないのは知らなかった。

そして、その経緯はあまりにも過酷なもので、ネスはそつと目を伏せた。

リリイに関して、父でありながらアカギラはほとんど触れられない状態のまま今に至る。自分の経営している学校の生徒にする事まで



はぎりぎり出来たらしい。だが、それ以上の事は出来ない。話しかける事も出来ない。

そして、リリイの存在を他の人に伝える事も許されない。

だから、アカギラが悪いわけではない。

それに、事情を察してネスを庭師として魔法学校に引き入れてくれた。

ばれればかなり咎められる事間違いないのに。

だから、むしろ、感謝しなければいけないくらいだ。

ちなみに、アカギラはネスの師範で昔、アカギラはリリイを連れてシルバーの屋敷に行っていた事があり、様々な知識や術も教え込んでくれた恩人でもある。

だから、ネスはアカギラには頭が上がらない。

「とにかく、今日起こる事は俺が止めます。絶対に」

「悪いね。娘の事なのに動けなくて」

「いえ、ここまでやっていただけて感謝していますよ」

それには青年も頷く。アカギラは目を細めて微笑んだ。

「ネス、君になら百歩譲ってリリイを任せてもいいかなと思っているんだ。頼んだよ」

「はい」

何だかすつきりしない言葉だが、反論すればもっと厳しくなるので我慢した。

アカギラは青年に向き直る。

「あの子もまだ大丈夫だから、きつとね。だから焦ってはいけな  
よ」

「はい」

「えっと……そう言えば君はここでは何て呼ぼうかな」

「今更、何言っているんですか？」

「もう言い飽きてきたけど、色々面倒な事で言えないのね。うん……ジオガード君も頑張ってる」

青年、ジオガードは小さく頷き立ち上がる。ネスは頭をかしげる。

「何で、ジオガードなのですか？ ジオドでいいじゃないですか」

「それじゃあ、君みたいにつまらないじゃないか。捻りの欠片もなくて」

「あ、そうですか」

アカギラと話しているとどうも、緊迫感が出ない。

だが、それが緊張している心をほぐすアカギラのいいところもある。

ネスは鉄の代わりに剣を腰に下げた。ハンチングハットを深く被る。これだけはまだ取るわけにはいかない。

「主、作業着のまま行くのですか？ もう着る必要はないのでは？」

ネスは小さく肩を竦める。まだリリイは思い出していない。だって、この格好でなければ違和感があるだろう。

彼女にとって、俺は「庭師のネス」という存在でしかない。

ジオガードはまだ魔法学校の男子生徒の制服である、黒いマントと質素なシャツに動きやすい綿のスポンを履いていた。

何気なく学校に溶け込むにはそれが一番だったからだ。

だから、庭師と男子生徒という組み合わせは何だか合っているような、合っていないような、変な感じである。

「魔法が解ければ制約も解ける。それも今回が最後のチャンスだよ」

ネスは静かに頷く。

鍵はリリイが握っている。リリイのこれからの運命も、ネスの運命も。

「他の生徒に気がつかれず、術を行うなら地下の実験室かな」

アカギラは校舎の地図を取り出し、ネスとジオガードに示す。二人は頷き合い、アカギラに深く礼をとる。

「必ず……戻ってきます。リリイと共に」

「ラルの事も忘れないでくださいよ、主」

ジオガードにじとりと言われ、ネスは「勿論」と頷く。

そして、二人のナイトは校長室を出て行った。

## 真実の親友

リリイは意識が戻ってくると、きつい薬草の匂いが鼻を刺激してきた。

体も重くて、変な感じだ。

意識がはつきりしてくると、どうして体が重いのかが分かってきた。水の中にひもで拘束されているのだ。

水、という表現は合っているのかどうか。何だか変な薬草の匂いの元はこの液体からだ。しかも少し粘っている。

余計体に纏わりついて気持ち悪い。

どうして、こんな所に自分はいるのだろう。おかしい。自分は自分のベッドに寝転んだ所までは覚えている。

目を開けてみようか。いや、また変な事件に巻き込まれているのなら、意識のない振りをしている方が、隙をつけるだろう。

といっても、この拘束されたままでは動きたくても動けないだろうけれど。

一回怖い目に合ってしまうと、意外と冷静でいられる自分に、リリイは少し驚いた。

だが、全く怖くないわけではない。

でも、出来そこないの魔法使いの卵だろうと、自分は魔法使いの卵なのには違いはない。こういう時にこそ、本領の見せどころだ。

リリイは耳を澄ませる。小さな声が聞こえる。

女の、聞き覚えのある声だ。

ときんと、胸が張り裂けそうになる。この声はラルリーグだ。

「これで、魔力を吸い続ければあの娘には用がなくなるわ。そうしたら、渡せばよいのです」

「ですが、それで納得されるでしょうか……」

「この娘に入れ込むあいつかいけないのよ。この娘なんか……ただ

の魔力しか役に立たないくせに」

吐き捨てるような声にリリイは泣きそうだった。

ラルリীগはずっとそう思ってた。一緒にいたのか。やはり、自分だけが親友だと、思っていただけ。

「魔力を抜いても少なくとも数年は生きられるわ。人って生命力が強いよねえ。だからその間、あいつは好きに使えばいい。子を産ませたいのなら、叶わなくもないわ」

子？ 私に子供を産ませたい？

誰が？

何だか聞いていていい気分のしない会話だ。

「まあ、魔力を根こそぎ取るのだから、この潤ったその肌は萎れて、老婆のようになっていくでしょうけれど」

ラルリীগが心底愉快そうに笑う。人を見下すような笑い方。無性に悲しくて、腹立たしかった。

ラルリীগがこんな笑い方をするなんて信じられなかった。

だって、ずっと一緒にいたラルリীগはとても優しく、慈しみながら微笑む素敵な女性だった。

あれ、そういうえはその笑顔を見たのはいつが最後だった？

最近は見えていない。最近を取り繕う笑顔。

この前まで、当たり前のように優しい気持ちのこもった笑顔をリリイに向けてくれていた。

あれが嘘？ 偽り？

そんな……そんな事無い。

ラルリীগの優しさは心から滲み出ていたもの。それを分かって

いたはずなのに。

目を閉じていると、分かる。これが心の目なのか。  
ああ、もっと早く気付いてあげればよかった。

リリイはそつと目を開ける。

ここは地下の実験室だという事に気がつく。ここなら、リリイが助けを求めて声をいくら上げたとしても、気付かれないだろう。

しかも今日は新月。他の生徒は早めに自分の自室に入り、いつもよりも早く寝てしまっているだろう。

新月は闇の、悪魔族と魔族が飛び交う魔の夜と言われているのだから。

こんな日にこんな事をするのだから、十中八九黒教徒の仕業だ。

なんでそんな人たちに目をつけられたのか分からない。確かに魔力は強いけれど、出来そこないの私なんかになくても、他にもたくさんいる。

一回だけで済まず、二回も襲ってくるという事は、ラルリーグの言葉の「魔力だけしかようがない」という魔力に何か秘密があるのだろうか。

もう、このまま様子を見ている気にはなれなかった。

魔力を抜かれるのも嫌だが、それよりも、ようやく気付けたから。

親友を、ラルリーグを助けなければ。

（その気持ち、信じてもいいよ。）

アンの声がリリイの頭に響いてくる。アンの声を聞いたのは、ごく久しぶりの様な気がした。

（ごめんね、連絡が遅くなって。ちょっと手古摺ったけど、何とか見つけ出したから。リーの大切な親友をね）

アンが誇らしげに言う。リリイの胸に希望が輝く。

私の心は間違っていなかった。アンは気が付いてくれたのだ。リリイの違和感を。そしてその答えを見つけ出してくれた。

リリイは体に目一杯力を込める。まだ魔力も体力もそんなに取られていないらしい。

まだ、動ける。一人じゃないと思えるところに力が湧いてくる。

「数多をかける英知の風よ 我の声に応え給え」

「え？」

リリイの詠唱に気が付き、ぎょっとしたラルリীগが駆け寄ってくる。

思い切りでかいものをぶちかましてやる。

暴走する自分の魔法を目一杯引き出す。

「唸れ！ 風の精霊ジルフェー！」

一瞬その場に風が訪れる。そして次の瞬間に強烈な突風が吹きあがる。

リリイの体に纏わりついていた液体も縄も、かまいたちの風が吹き飛ばす。リリイは風に乗って、ラルリীগに飛び蹴りをお見舞いする。

肩で受けたラルリীগが吹き飛ぶ。

もう一人の魔法使いも風の風圧で押されて倒れこんでいる。

風がやみ、リリイはその場に舞い降りた。思い切り魔法を使ったのは初めてだ。心地よい解放感が体をめぐっている。

まだまだ魔法を使いたい欲が出てくる。

こんな事なら、細かい魔法よりも練習場で思い切り魔法を使っていれば良かったかと、リリイは思う。

ラルリীগは咳きこみながらリリイを睨む。

いや、ラルリーグではない。

「し、親友に対して酷いわね、リリイ。私はあなたのためを思っ  
てやっているのに」

ラルリーグは微笑む。だが、リリイは頭を振る。

「あなたはラルじゃない」

きっぱりとした声がよく響く。ラルリーグは眉をひそめる。

「どうしてそんな酷い事を言うの？ これには訳があるのよ？」

「どんな理由があったとしても、ラルリーグの振りをしているあ  
なたを信じる訳にはいかないわ。あなたはラルじゃないもの」

リリイの言葉には自信が溢れていた。

今見れば、ラルリーグと同じ顔をしていても全然違う事がよく分  
かる。

雰囲気が全然違う。

そして、朝に感じた違和感の正体を思い出す。

あまり好き嫌いが無いラルリーグだが、どうしても苦手なものが  
あった。

「あと一つ。ラルはね、ハーブ入りのソーセージが食べられないの  
よ？」

ぴりり、とラルリーグの顔にひびが入る。

リリイが真実を言い放った時、魔法が解けた。

思わず身を引くと、ラルリーグはリリイの喉に手を巻きつける。



「かはっ……」

「馬鹿ね、気がつかない振りしてれば少しは長生きできたのに」

ぱらぱらと、ラルリーグの顔が崩れていく。そこから現れたのは見覚えのある顔だった。

「ニス……」

ニスは顔にわずかに残っているラルリーグの顔の破片を乱暴に手で払う。

憎しみのこめた眼でリリイを睨んでいるのは、間違いなく同級生の女子生徒のニスだ。

いつもトーイの隣に座っていて、トーイがリリイの所に行く度、リリイを睨んでいた少女だ。

ニスが黒教徒だったのだ。

「あなたって、本当に憎たらしいわね。トーイも、魔力も、運命さえあなたの物だものね。許せない。あなたなんて悪魔族の復活の贄になればいいのよ」

「どうして……悪魔族なんて……」

息が苦しい。だが、聞かずにはいられなかった。どうして、そんなに暗い心になってしまったのか。

ニスは口元をゆがめて笑う。

「人間はタブーを犯した印に生まれてきた罪の塊よ。罪が世界を支配していたら可笑しいじゃない。私もあなたも罪しかないのよ。だから、暗黒時代こそ、人間が罪を償えるの。あれこそ、理想郷よ」  
「可笑しいのは、あなたよ」

リリイは顔をゆがめる。首の骨がきしむ。苦しい。苦しいけど。

「優しく笑える人……笑顔が輝く人……愛しい人……それが罪？  
そんな筈ないじゃない……」

リリイは二スの手を握る。渾身の力で首から二スの手を引き剥がす。  
せき込みながら二スを睨む。

「そんな馬鹿げたことでラルを傷つけたなら許さない。それこそ罪  
よ」

人の始まりは確かにタブーを犯した悪魔族の青年と妖精族の少女が  
生まれたとされている。

でも、それ自体がタブーなのも可笑しいじゃないか。愛し合うのに  
種族なんて関係無い筈なのに。

悲しいすれ違いばかりが生まれるだけじゃないか。

二スが魔法杖を取り出す。魔法杖は魔力の増幅装置。何倍もの魔法  
が発動する。

すれ違っしかないのか、二スは同級生なのに。

「あなたは最も罪深い人よね。なんせハールン一族の生き残りなの  
だから」

「ハールン一族」

リリイは口の中で反芻させる。  
どこか懐かしい響き。

「あう……」

不安がリリイを襲う。怖くて体の震えが止まらない。

何か、恐ろしい事が記憶の

彼方に。

ニスが魔法杖を振り上げる。

リリィは結界を張れない。リリィは体を庇うようにづずくまる。  
強力な魔力の弾が飛んでくる。

## 重なる悲しみ

「全く。リーは駄目だね」

生意気な声。リリイが顔上げた時、赤い光が放たれる。

息をのむ。魔法弾を強大な炎の柱が弾いていた。この炎は、大切な相棒と同じ温かさを宿していた。

ちよんと、リリイの肩に重みが増す。紅い毛の尻尾がふよふよと動く。

アンが満足そうに胸を張っていた。

「今度は巨大ケーキを食べさせてよね」

リリイは「お調子者」と呟き、アンを優しく撫でた。私の大切な相棒。

ニスが怯まずに再び魔法杖を振り上げる。

魔法杖の先端に付いているカーネリアンが赤く渦の様な光を放つ。禍々しい光にリリイは歯を食いしばる。

人の心の弱さを曝け出すような怖い輝きだ。

その時。柔らかな声が聞こえる。

「リリイは大丈夫。私はこんな光に負けないって知っているよ」

心から滲み出る優しい響き。リリイは振り返る。

涙が溢れてきた。優しい笑みがリリイに向けられている。  
ラルリーグがそこに立っていた。

「心配掛けてごめんね。もう離れないから大丈夫だよ」

ラルリーグは力強くリリイの手を握った。リリイは何度も頷く。  
ラルリーグは無傷なわけではなかった。

着ている制服はぼろぼろに所々焦げている。優しさを湛える顔には  
幾つもの痣があった。どういう扱いを受けていたのか一目瞭然だった。

つと、ラルリーグは滑らかな白い指をニスに向ける。

ニスが苦虫を噛み潰したようにラルリーグを睨んでいた。

「どうして……息の根を止めたはず」

ニスの言葉にリリイは愕然とする。アンが助けに行かなければ、ラ  
ルリーグは殺されていたのかもしれない。

だが、本人は怯むことなく。凜とした視線をニスに向けている。

「私はそんな簡単には死ねないの。リリイを傷つけた事、許さない  
わ」

ラルリーグの右手首が輝く。黄色の力強い光だ。

ばちばちと、静電気が起き始める。

「神々の怒りを受けるがいいわ。雷の精霊よ 我が怒りを鉄槌に宿  
らせ給え 空を割り轟く鉄槌を振り下ろし給え 雷の精霊トール！」

黄色の光の柱が実験室中に轟音とともに現れる。禍々しいカーネリ  
アンの光は一瞬にして吞まれていく。

ラルリーグはリリイの手を引き、実験室を出ていく。

無我夢中で走った。

校舎の真ん中の中庭までやってくると、ラルリーグが崩れるように倒れこんだ。

「ラル？」

リリイは急いでラルリーグを抱き起す。ラルリーグの顔は蒼白で冷たい汗をかいていた。

中庭に取り付けられてあるガスランプの下で見るラルリーグは体中の怪我が露わになって、痛々しかった。

足も腕にも大きな痣がいくつもある。きっと立つのも辛いのに、リリイを助けに来てくれたのだ。

あの魔法もかなり体力を消耗したはずだ。このままでは衰弱して死んでしまうかもしれない。

それでも、ラルリーグは優しく微笑んで「信じている」と言ってくれた。

私はずっと気がつかなかったのに。もっと早く気づいていればラルリーグにこんな目に合わせなくて済んだのかもしれないのに。

がさりと、茂みが揺れる。

リリイが顔を上げると、そこにいたのはトイーだった。

「どうしたの？ ラル、怪我しているのかい？」

心配そうにトイーが覗きこんでくる。リリイはトイーを訝しげに見やる。

こんな時間にこんな所にいるのは可笑しい。基本的に授業が終われば寮に帰るのだ。課題や調べものがある生徒は残るが、今日は新月わざわざ今日、学校に残るのは変だ。教師だって、今日は図書室も締め、課題をやる事も許さないはずだ。

トイがリイに微笑む。

「僕にラルを見せてごらん。治癒学の授業で習った薬草を持っているから」

ラルリーグは玉のような汗をかいている。意識も朦朧としてしまっているようだ。早く応急処置をしてあげなければ。

ここはトイの厚意に感謝するべきか。

リイが頼もうとした瞬間、ラルリーグがリイのローブの袖を引き寄せた。

力なく、ただ弱く、微かだった。

でも、リイにラルリーグが言いたいことが何となく分かった気がする。

ラルリーグはリイが頼むのを止めた。その真意は目に見えている。

リイはトイからラルリーグを守る様に引き寄せる。リイの行動を見て、トイはくすりと、小さく笑う。

「君は僕が約一年半近く口説いていたのにびくとしなかったね。それは何故？好きな奴がいたから？」

「あなたが信用できなかったからよ」

「こんなにも、君に心砕いているというのに、報われないなあ」

そう言いながら、トイはどこか面白そうに口元はつり上がったままだった。

リイは大きく目を見開く。

トイの笑顔に冷たい光がさしていた。笑っているのに恐怖を掻き立てる。人の弱い部分を見抜くような、強い青い瞳。

ネスと瞳の色は似ているのに、正反対の輝きを宿していた。だから、全く違う瞳に見える。

これが本当のトリーの瞳。

「君が僕に口説かれていれば、ラルはこんな目に会わずに済んだのに。君の友達になってしまったから災難だったよね。君が一人ならラルは傷つかなかった。君がラルを傷つけたのと一緒にだよ」

刃の様なトリーの言葉がリリーの胸を突き刺さる。

ラルリーグはリリーと関わってしまったからこんなにも傷ついてしまったのだ。それは変えられない真実だ。

リリーの瞳に涙が浮かぶ。

悔しさと悲しさと憤り。自分への責める気持ちが重く襲いかかっていった。



## 心に宿る光

「あなたは……ニスと仲間なの」

「ちよつと違うなあ。僕は黒教徒ではないからね。もつと神聖な、存在だから。それに、あいつが勝手に俺についていただけだから、関係無いよ」

にこりと微笑んでトーイは言う。まるで他愛のない話をしているかの様だ。

「もしかして、馬車に誘拐したのは？」

「ああ。それは君の信用を僕が得ようと思って仕掛けたんだよ。リイはラルへの不信感を持ったのも、ラルとニスが入れ替わる隙が出来たのも、その一件のお陰だろう？　まさか、邪魔者が入るとは思っていなかったけれどね」

満足そうにほほ笑むトーイに腹が立った。でも、言い返すほどの気力がない。

「君には運命を選んでもらうんだけど、僕と一緒になるならラルはもう傷つかないよ。でも、拒むなら、ラルの命はあと何分かな？」

鈴を転がすように笑い、トーイはリイの顔を引き寄せる。あと少しで唇が触れそうな距離だ。甘いヤマユリの香りがする。トーイの香水の香りだろうか。頭の芯がしびれていく。

「君は記憶があってもなくても、どうしてこんな目に遭うのか分からないだろう？　だけど諦めて。それが君の運命だから」

アンがリリーの肩からトーイに飛び掛かる。だが、トーイは軽く手で払いよける。まるで小さな虫を叩くように、簡単に。

「君の使い魔はちょこまかして使いづらいね。僕と一緒にするならもつと扱いやすい使い魔を上げよう。今から楽しみだなあ。リリーと僕の子ならきつと可愛いよ」

優しい呪文のような言葉。だが、リリーの心を砕く破壊の呪文のような言葉。

逃れられない、ラルを助けない。

その為には、受け入れるしかない？

「ラルを、助けてくれる？」

「勿論。君の親友だからね。大事に大事にしてあげるよ」

トーイが小首を傾げる。唇が近づいてくる。

こうなる運命だったのか。

リリーは自分の運命があまりにも呆気なく感じた。

トーイはずっと口説いて来ていた。という事は想われているのだ。

そんな人と一緒になれるのは幸せなことなのかもしれない。

時間があれば好きになれるかもしれない。

しかも、ラルリイーグが助かる。そして、もう自分のためにラルリ

イーグが傷つくともなくなる。

これ以上の事があるだろうか。

あれ、何か忘れている気がする。大切な事。

やっと思いだせたのに、また霧がかかって見えない。

でも、誰かに出会った気がする。どうして思い出せないの？

ヤマユリの香りがする……

トイーに出会ったのかな。他に誰と出会ったの？

分からない。ううん、トイーの事を誤解しているだけ。私にはあなただけ。

ヤマユリっていい香り。ずっと包まれていたい。

そう。私はトイーと一緒にになって最高の幸せを手に入れられるの。だって私が好きなのは……

トイーがくすりと笑う。

私が好きで蒼い瞳は……

唇と唇が触れ合う直前、銀色の光がリリイの胸元から放たれる。

「ぐっ」

呻きながら、トイーが後退する。

柔らかな銀色の光。温かくて、闇を切り裂く力強さも兼ね揃えた、月明かりのような光。

リリイは胸元に下げていた真珠のペンダントをローブの中から引き出す。光を放っているのはこの真珠だった。

柔らかくて心地よい輝き。ぼやけた意識がだんだんはつきりしてくる。

ヤマユリの香りが漂う。気がつくとかかなり強烈だった。

花は気持ちいを惑わす力を持つという。ヤマユリの香りがリリイの判断力を奪っていたのだ。

この真珠のペンダントは誰からもらったんだっけ。ううん、確か借りたのだ。

不敵で優しさを併せ持つ蒼い瞳の青年。ハンティングハットを被って、作業着に身を包んだ青年。

悪戯っぽい笑顔がとても魅力的な優しい人。

「ネス」

リリイは呻いているトーイを見やる。  
危うく騙されて連れて行かれるところだった。トーイも二スのような存在に間違いない。

「この光……」

ラルリーグが小さく呟く。銀色の光を浴びたラルリーグはトーイとは正反対に、力を取り戻し、体を起こしていた。

「ラル！」

リリイはラルリーグを抱きしめる。ラルリーグの痣の色が少し引いていた。その分、顔には血色が戻って来ている。  
痛々しいのには変わりないが、少しは回復したようだ。

「リリイ、そのペンダント誰にもらったの？ まさか銀髪の……」  
ほっ

ラルリーグは慌てて話そうとして咳込む。喉がひゅっひゅっ音を立てていた。

リリイは頭を振る。

「銀髪の人じゃないわ。こげ茶の髪の庭師の」

「庭師？ こげ茶の髪？ そんな筈は……まさか制約？」

ラルリーグは胸を押さえリリイを見上げる。  
切なそうに、悔しそうな、複雑な表情だった。ラルリーグは何が

言いたいのだろう。

光が収まってくる。リリイははっと、体を起こし、トイーの拳を払いよける。

顔色がどす黒くなっている。今までのトイーと同一人物とは思えないぐらい冷たい顔の人が、そこには居た。

「さすが、体術はお得意だったね。魔法は制御できなくて出来損ないだった。そこで終わらないのがリリイ、君の魅力の一つだよ？」

口調は変わらない。だが、今までの様な抑揚のある感情は感じられない。

トイーの言葉をリリイは信用出来ずにずっといた。それは、きっとどこかで分かっていたからだ。心の声と上辺の言葉。それがちぐはぐしていたのだ。

ラルリীগを守らなければ。これ以上傷つけない。  
トイーの手にナイフが現れる。リリイはガード出来るような固いものは持っていない。だが、やるしかない。

私は魔法使いの卵。そして、大切な人の為なら頑張れる。

ナイフが宙を掻く。リリイはしゃがみ込み、トイーの足を払う。それを、上手く逃れて、トイーはリリイにナイフを振り下ろす。

「くっ」

リリイは手を地面に付き、体をねじるようにして跳躍する。腕をナイフが掠める。熱さの様な痛みが走った。

だが痛みをこらえ、跳躍した反動のままトイーを蹴り飛ばす。

トイーの顎に命中し、口から血が流れ落ちる。

「え？」

リリイは思わずトーイの血を凝視する。人の血は赤い筈。なのに、トーイから流れたのは黒い血だ。黒い血、その血を持つと言われているのは今ではもう昔話や世界誕生の神話の中にだけだ。

まさか……

リリイの集中力が欠けたのをトーイは見逃さなかった。素早くリリイの腹に拳を飛ばす。

圧迫感と鈍い痛みにも、リリイは倒れこむ。

もがくりリイが逃げない様に腹の上に、トーイは乗りかかる。苦しくて息ができない。

「銀色の加護なんて持つからいけないんだよ。そうだね、親友の前で孕むのも趣向としてはなかなかだ」

「やめなさいトーイ！ リリイに触れたら許さない！」

必死に叫ぶラルリーグを見て、トーイは吐き捨てるように笑う。

「ぼろぼろの君に何ができるの？ ニスを追い払うのに力を使い果たしちゃったんだろ。馬鹿だね、あいつよりも俺の方が数十倍厄介だったのに」

ラルリーグは立ち上がりうとして崩れてしまう。立ち上がるほどの体力は戻っていなかった。アンも気絶してしまったのか、動かない。

リリイは必死にもがく。だが、トーイは容赦なくナイフでローブを切り裂く。

リリイの瞳に涙が溢れてくる。

こんなのは嫌。絶対に嫌。

「助けて」

気づかなくてごめんなさい。何も分かっていなくてみんなを傷つけた。でも、傷つけたまま終わりたくない。  
こんな結末は嫌よ。

私を迎えに来てくれるって言ったのに。

「ネス。ネス……」

ネス、あなたの本当の名前思い出したのに。まだ呼んでいないのに。  
あなたは……あなたの名前は……

あなたの名前は……

あなたは……あなたの名前は……

「し……シルバー！」

リリイの声が夜の空へと響く。ラルリィーグは大きく目を見開く。  
リリイ、その名前は。

突風が吹き荒れる。その突風に一瞬きらめくものがトーイを突き飛ばす。

真珠のペンダントが輝きを放つ。

リリイはふわりと体が浮いたと思った。それは、突風のせいではなく、抱き上げられたからだ。

飛び込んできたのは会いたくてたまらなかった月明かりの蒼い海の瞳。ハンチングハットは風に飛ばされる事無く、すっぽりと被ったまま。

お日様の香りのする作業着に抱きしめられる。

「遅くなってごめん、リリイ」

「ネス……」

リリイは目の前のネスを見上げる。涙があふれて止まらなかった。会いたかった。会いたかった。

愛おしそくに、ネスはリリイの背中を撫でる。この温もりがずっと



欲しかった。

「主、いちゃつくのは後にして下さいよ」

きつぱりとした声が現実に戻す。ネスは少しむっとしながら、ジオガードを見やる。

ジオガードはラルリーグの前に立って、魔法符を何枚か取り出し、体勢を整えていた。

トイーは茂みに突っ込まれたらしく、茂みから体を起こしているとこらだった。

リリイはジオガードを見やる。水色の髪青年。あの紫水晶の様な瞳に、リリイは見覚えがあった。

すっと、記憶の欠片が降ってくる。

昔、彼にすでに忠誠を誓っていた子供騎士。

随分と口が悪くて、でもとても大切に扱っていた。

「ジオド？」

「覚えていて光栄ですよ、リリイ。全く、主がいるのに気抜きすぎだ」

じとりと睨まれる。怒られるような事をしてしまったらしい。このジオガードは一度怒るとしつこいのだ。

「ふうん？ リリイは記憶を取り戻したのか。まあ、どこまでかは分からないけれど」

トイーは体を起こし、くすくすと笑う。この状況でも焦る事無く余裕を感じさせる物腰を保っている。

ネスがリリイの顔を覗き込む。

「本当か？」

「主、緊張感のなくなる声出さないで下さい」

ぴしりと言われ、ネスは黙る。どっちが上なのかよく分からない二人だ。

トイは空を見上げる。今日は新月。精霊は怯えて姿を現さない日。だが、トイが手を上げた時、空気が変わる。精霊のざわめきが、風によって運ばれてくる。

これは精霊の悲鳴だ。

魂をわし掴まれるような恐怖に満ちたものだった。

トイはジオガードに向き直る。

「ジオドくんか。この前は僕にスープを掛けてくれてどうも」

「熱湯が良かったが、生憎なかったのでスープで勘弁しておいてやったんだ」

そういえばこの前の食堂で、言い寄ってきたトイに誰かがスープをひっかけて助けてくれた事があった。

あれは、ジオガードがやった事だったのか。

気を抜くなと怒っているのはそこ辺りの事を指しているのか。

精霊の悲鳴がどんどん大きくなってくる。リリイは怖くて、ネスの胸元を引き寄せる。

嫌な空気が漂ってくる。

この気配、リリイは知っている。体の震えが止まらない。

「リリイ？」

心配そうにネスがリリイを覗き込む。

血の気が引いているリリイに、ネスはもっと力を込めて抱き寄せ、空を睨む。

黒い生き物が夜の闇にさらに闇を落とす。そして、全てを飲み込む。希望、優しさ、笑顔、温もり。愛しいものがすべて消えていく。

「大丈夫。守るから」

耳元で囁かれる。小さな声なのに、とても力強く感じたのはきっと、気のせいではない。リリイは嬉しくて、少し落ち着いてきた。だが、落ち着いている場合でもない。この気配が確かなものなら、魔法学校は崩壊してしまうかもしれない。

「トーイは悪魔族なの？」

リリイの問いにトーイは、リリイに向き直る。小さな笑みを浮かべていて、ぞつとした。そんな冷たい笑みだった。

「少し違うかな。君と似たような境遇だよ。正反対の種族だけど」

リリイは唇を噛み締める。

心がざわざわとする。

トーイの言っている意味がよく分からない。

ニスも変な事を言っていた。

ハールン一族。

ハールン一族は唯一妖精族と血の盟約をした一族だとされている。

そして、古の術。様々な術の根源となった秘術を扱える唯一の人間。私がその一族だというのか？

分からない。否定したいのに出来ない。

そして、そのハールン一族の反対という事は……

ジオガードが空に向かって魔法符を投げる。そして、気絶しているアンを抱える。ネスはジオガードの元へと掛けていく。

投げられた魔法符に込められてあるのは、移動魔法だった。

光の渦が四人を包み込む。トイは追う事無く、それを見送りさえしていた。

光の渦の中は気持ち悪くなるような浮遊感があった。だが、それもすぐに収まる。

リリイが気づいた時には違う所に出ていた。

## 精霊との制約

「逃げた、の？」

「まさか。態勢を立て直すのと、ラルを休めるんだ」

ジオガードはラルリーグを抱き上げる。

ラルリーグはジオガードの事を知っているのか、何故か睨んでいる。

「結構だわ。私に構わないで」

「それは、見栄じゃなく元気で言える時に言うんだな」

がつつりと掴んで離さないジオガードと、引き剥がそうとするラルリーグ。何だか変な感じだ。

「二人って知りあい？」

「まさか」

声が重なり合う。息もぴったりだ。

だが、少なくともジオガードはラルリーグを知っている気がするのだが。

リリイはついつと、視線から二人が消えた。抱き抱えられたままだったリリイは、ネスが方向を変えたために見えなくなったのだ。

椅子に下ろされ、ネスの作業着の上着をロープの上から羽織らせられた。ロープはもうナイフによってずたずた状態だった。

軽く見まわすと、少し広めの部屋に大量の本が積まれ、本棚にも本がぎっしり詰まっている。

誰かの書斎だろうか。

「リリイ」

ネスに呼ばれて、どきりと、心臓が跳ね上がった。ネスは床に膝を折り、リリイを見上げていた。

ずっと見たかった蒼い瞳に、こんなにも熱く見つめられるなんて。心臓が破裂してしまいそうだ。

そっと、頬にネスの手が伸びる。ぴくっと、震えるリリイを愛おしそうに撫でた。

「さっき、俺の名前呼んでくれたのは夢じゃないよな？」

ネスの確かめるような、どこか弱い声に、リリイは目を細める。

リリイは黙って頷く。熱くて、声が出ない。

「思い出した？ 俺との約束。迎えに行くって言っただろう？ もう一度、呼んで？」

悪戯っぽく笑う顔がすごく愛しく思えた。

リリイは深く息を吸って、力を振り絞る。声を出すのにこんなに力があるんだっけ。

ネスという名はこの人のニックネームだ。父がよくそう呼んでいたのを思い出す。

リリイはニックネームではなくその名前を呼んでいた。

「シルバー……」

ネス、ではなくシルバーは嬉しそうにほほ笑んだ。ずっと、リリイにその名を呼ばれることを生きがいにしてここまで生き抜いてきた。再会出来る事を信じながら。

シルバーはそっとハンチングハットをとる。すると、今までこげ茶

だった髪の色が本来の色を取り戻す。

ランプの光を弾く輝く髪。白銀色の短い髪がさらさらと流れた。

それがネスの正体。ネスの本当の名をリリイが言い当てた。だから本来の姿を出せるようになった。

ネスではなく、シルバーとして。

美しい月明かりのような白銀の髪に、海を照らす月明かりのように蒼い瞳。

リリイもそつと微笑んだ。二人の男の人が気になっていたのではない。同一人物だったのだ。

きつと、シルバーがもつと違う姿になっても、リリイになら見つけれられるだろう。

色々話したい事はあるが、今は時間がない。シルバーは真剣な表情になり、改めてリリイと向き直った。

「リリイ。俺たちは今、色々な制約の鎖で縛られている。俺が自分から本当の名を言えなかったのも、こんな恰好をしているのもそうだ。そして今の状況を打破するためにはリリイの協力が必要なんだ」  
「リリイ、耳を貸してはダメよ」

ラルリীগが話に割り込んでくる。無理やりベッドに寝かし付けられるのを、必死に拒んでいる所だった。

「お前は口を出す必要はない」

「あら。あなたは主様が大切かもしれないけれど、私はリリイが一番大切なの」

ジオガードと睨み合っている。どうして仲が悪いのかは分からないが、とりあえず今は意見が合わなくて口論しているらしい。

とりあえず話を聞かなければと、リリイは再びシルバーに向き直る。

「協力って？」

シルバーはリリーのペンダントに触れる。  
きらきらと輝く真珠。

「このペンダントに魔法が込められてあるんだ。色々な制約を解くにはこの宝石の名を当てなければならぬ」

「真珠じゃないの？」

見るからにこれは真珠でしかない。シルバーは力なく、頭を振った。

「これは確かに真珠だが、特殊な真珠らしいんだ。リリーが俺の前からいなくなる時、これから起こるだろう災厄からお前を守るために精霊と契約してもらったんだ。覚えている？」

「そこは、知らない……多分。まだ頭が混乱しているけど、思い出せないわ」

そうかと、シルバーは少し寂しそうな顔をした。きっと、シルバーにとっては忘れられない記憶なのだろう。

ずきんと、胸が痛んだが、リリーは話を進める。

「それで、この真珠の名前を当てれば制約が消えるって言う事？」

「そう。俺は正体を当ててもらえたからこの姿でいても大丈夫になったが、ジオドも、お前の父も制約に縛られている状態だ」

「主、肝心な事を言っていないですよ」

まだ、ラルリーグと何やらもめているジオガードが話に入ってくる。ラルリーグが反論しない様に、枕で口を塞いでいる。

重症者に対する扱いではない気がするが、一応応急処置の薬草を塗ってくれている様だ。



「ちょっと、ラルは怪我しているんだから優しくしてあげてよ」  
「こいつが暴れなければそうしているさ」

怒ったように、ラルリーグはジオガードの腕を叩く。どこにそんな力が残っていたのか。ジオガードに会ってからのラルリーグはいつも以上に元気に見えるのはどうしてだろうか。

「それで肝心な事って？」

「ジオド、言ったら本気で怒るぞ」

シルバーに睨まれ、ジオガードは肩を竦める。何か隠している。リリイはシルバーの手を取る。シルバーの頬が少し赤く染まった。

「シルバー、制約で何隠しているの？ ちゃんと言ってくれないと嫌よ？」

「う。そんな顔で見られてもダメなものはダメで」

「主は自分の魔力と引き換えに契約をしたんだ」  
「ジオド！」

責めるような大きな声に、リリイは驚くが当のジオガードは慣れている様に平気な顔をして、ラルリーグに薬草を塗っている。

魔力と引き換え？ という事は今のシルバーには魔力のない状態？ リリイにまた新しい記憶の欠片が降り注がれる。

幼い頃のシルバーは魔力が豊かで、あらゆる魔法を難なく使いこなしていた。そのシルバーの魔力がない。という事は魔法が使えないという事だ。

「何でそんな事したの？ あんなに魔法が好きだったじゃない！」

リリイの脳裏に蘇る懐かしい記憶。

シルバーは魔法が得意で花火を見せてくれたり、妖精を捕まえてくれたりした事もあった。

そのシルバーがずっと魔法が使えない状態だったというのか。

私の為に……

リリイの涙目に、シルバーは観念したように小さく息を吐く。そして、リリイを自分に引き寄せる。

「お前が大きな災厄で命を落とすかもしれないと预言されたんだ。それを少しでも回避するために、師範……君の父に頼んだんだ。守るために精霊と契約を結ばせてもらえるように」

预言を信じて、危険を冒すなんて馬鹿げていると思った。だけど、そうまでして守りたかった。

リリイは俺の「花嫁」だから。

そこ辺りをリリイはどう思いだしているのか不安はあるが、何としても完全に制約を解かなければ。残された時間は少ない。

「父はそれを許したの？」

父はシルバーの師だった。シルバーも父によく懐いていて、父もシルバーを気に入っていたと思う。

幼い子供にそんな枷を与える様な事を許したのか、父は。

「きっと、止めても勝手にやると分かっていたんだ。だから、立会人になってくれたんだ」

「でも……」

「精霊はこの真珠がある限り制約によりリリイに本来の姿を見せてはいけない、十年は会ってはならない。だが、命の灯火になるであ

ろう。そして、この宝石の真実の名を当てられれば制約から解放され、宝石は盾にも剣にもなるであろう」

シルバーは精霊の言葉を一つ一つ思い出しながらじつくりと言う。色々な制約をシルバー達が負ってくれていたから、自分は平和に魔法学校の生徒でいられた。

予言が指しているのは今のこの状況なのだろうか。

「謂わば、主は精霊に試されている状態という事だ。精霊は主を真の契約者と認めれば制約なく守ると約束した。制約がなければ契約は完全なものになる。主の魔力も戻る。だが、間抜けな主は未だに言い当てられず、制約に縛られているのだ」

相変わらず、ずけずけと言う。昔もそうだった。騎士として忠誠を誓ったと本人は言い張るが、態度が大きいのは変わらない。だけど、きつと、ずっとシルバーを支えていたのはジオガードに違いない。

リリイはペンダントを見つめる。

人と人の契約と違い、精霊との契約は試練を言い渡される。その試練の最中は厳しい制約の元に縛られるが、試練を乗り越えた者は自由と大きな力を得る。

制約を無くして、本来の状態に戻りたい。

真珠の本当の名前。

「そして、それを知っているのはリリイだけだ」

「え？」

「精霊が言っていたんだ。真の姿を見せるのは運命の少女のみ。運命の少女と再会できた時、試練は終着に向かう、ってね」

という事は、シルバーにとっての試練は名前を当てるといふより、

行方不明になったリリイを探し当てる事となる。

だから、シルバーは試練をクリアした事となる。あとはリリイに聞けばお終いだ。

シルバーに魔力が戻れば戦力が大幅に増強できる。なんとか出来るかも知れない。

だが、リリイの目が思わず泳ぐ。

ジオガードの目が、すっと細くなる。

「まさか、分らないのか？」

「え？　だつて見てないわ。真の姿って言つか、精霊自体見てないもの」

「そうなのか？　なら仕方ないか」

「主、簡単に肩を下げないで下さいよ。リリイ、よく思い出すんだ。主には……主には時間が残されていない」

「ジオド！　お前、口が軽すぎるぞ。本気で怒らせるな」

シルバーに言われ、さすがの怒りに、ジオガードは口を閉じた。

時間がないってどういう事？

魔力がないから、体が限界という事？

切なそうにリリイを見つめるシルバー。それが答えの様な気がした。やっと会えたのに、私のせいでシルバーが死んでしまう。そんな……

リリイは溢れる涙をシルバーが拭ってくれる事がこんなにも幸せな事なんて知らなかった。

もつと、あなたの事を知りたいのに。

何としても、思い出さなければ。

「なんの精霊だったの？　それによって変わってくると思うけれど」

「さあ？」

「え？　知らないの？」

こくりと頷くシルバーに思わず脱力する。訳の分からない精霊と契約なんかして、たちの悪い者だったらどうするつもりだったのだろう。

精霊の正体も不確かなら、その精霊にもらった宝石の名前を当てるなんて無理だ。

しかも、時間がない。シルバーの残された時間もないし、この学校内で黒魔法が発動するのにも時間がない。

これでは、せっかく再会できたのに意味がないじゃないか。

私の王子様。童話のお姫様を助けに来たように、私を助けに来てくれた王子様は間違いなくシルバーだ。

「大丈夫、リリイ。俺は君にまた会えただけでも嬉しいんだから」

心がとろけそうな優しい言葉。

私は何をしていたのだろう。私は何のためにここにいるの？大切な人を傷つけるしかないの。

「リリイはここで、ラルを看ていてくれないか？」

シルバーの声に顔を上げる。リリイはその言葉の意味を感じ、頭を振った。離さない様にシルバーの手をきつく握り締める。もう離してはいけない。この優しい人の手を。

記憶の欠片がぱらぱらとリリイの心の中に降り注いでいく。

私が里に行かないと結界を作れないんだって。

お前は誇り高いハールン一族の娘なんだ。堂々といればいい。

帰ったら私、里の外にいた事を消される。それが里の掟。私、忘れたく、ないよ……

蘇ってくる記憶。切なくて胸を締め付ける記憶。そう。自分はハールン一族の長の娘。

長の娘として生きるためには、別れが必要だった。

愛しい君の顔、表情、蒼い瞳、輝く銀の髪。

あなたの優しさでどれだけ心を温めてもらった事か。

永遠の別れじゃない。迎えに行く。約束しただろう？お前は俺の花嫁だから。

シルバーの手がかすかに震えていたのを、気が付いていた。

気持ちと一緒にだという事が何よりも嬉しかった。彼の瞳の輝きを信じようと思った。

例え、次に出会った時忘れていたとしても、思い出せなかったとしても、きっとまた恋に落としてくれる。

幼い初恋はそこで止まった。

リリイはシルバーの事、幼いころの記憶は長である母によって消された。でも、母はそれを望んでいなかったのかもしれない。

だって、完全に消されていなかったからリリイはシルバーを思い出せた。こうなる事を母は望んでくれていたのだろうか。

シルバーはどんな気持ちで今までいたのだろう。どんな気持ちで庭師になって私を見ていたのだろう。

## 囚われのお姫様

「主」

ジオガードの低い声にはっとする。ジオガードがシルバーの後ろに控えるようにに立っていた。

ラルリーグは薬草が効いてきたのか、落ち着いている。

すると、シルバーの手がリリイから解かれる。手を伸ばすリリイの手を、シルバーは受け止めなかった。

「大丈夫。ジオドと俺がいればあんな奴には負けない」

「黒魔法を侮ったらダメ！ あれでみんな……」

リリイは頭を抱える。

黒魔法。見た事無い筈なのに、知っている気がする。

とても強力で、恐ろしい力を持っていて、全てを奪っていく。

私の里。母は……？

どうして思い出せないの？

でも、心を凍らせてくる恐怖は、リリイの中で膨らむばかりだった。

「俺はしぶとい。これくらいで逃げ腰なんて格好悪いだろう？」

シルバーがにこりと笑う。手がかすかに震えて見えるのは、きっと気のせいではない。

これではあの時の繰り返しだ。

「嫌。ダメ、絶対にダメ……」



リリイは小さい子が駄々をこねるように、何度も頭を振った。シルバーは困ったように笑い、目を閉じる。目を開けた時は真剣な眼差しになっていた。優しさだけでは通用しない事を知っている鋭利のような輝き。

「ジオド」

ジオガードが素早く魔法符をリリイに放つ。魔法符は光の縄になり、リリイに巻き付いていく。動けなくなつて、リリイはその場に座り込む。

「何これ……解いて！」

「すぐ戻ってくるから、大人しく待っていて」

そう言うと、シルバーは扉へと向かう。ジオガードは黙ってついて行く。リリイが叫ぶが、シルバーは振り返らなかった。

振り返るときつとリリイから離れられなくなると分かっているから、リリイはもう十分に頑張った。そしてたくさん傷ついた。

これ以上苦しい思いをしてほしくなかった。

もう、会えなくても思い出してくれた。それがあれば悔いはない。

シルバーの開けた扉は、静かに閉まり、シルバーとジオガードは部屋から出て行った。

「いやああああ」

リリイの鳴き声だけが虚しく響いていった。

お前は誰だ？

初めて出会ったのはシルバーの屋敷の中庭だった。

大きなバラ園があつて、赤や黄色、白いバラが陽の光と瑞瑞しい花弁が合わさつて、幻想的な庭だった。

リリイは自分の背丈ほどまで伸びたバラの中からひょっこりと顔を出すと同年ぐらいの少年が立っていた。

上質な布で作られたであろう、シャツにズボン。青いジャケットに身を包んだ蒼い瞳の少年。月明かりのような銀の髪も目を奪う。

額を覆うような冠までつけていて、リリイの大好きな童話の王子様が抜け出てきたようだった。

私はリリイ。お父さんに連れてきてもらったの。

そう答えると、少年は「あつ」と思い出したように声を上げた。

師範にご息女がいると聞いて会いたいとお願いしたんだ。そうか、君がリリイか。バラの精かと思つた。

そう言つて笑う少年にリリイは引き寄せられる何かを感じた。

少年が父の教え子のシルバーだと分かり、会いに行く度にバラ園で遊んだ。バラの棘の取り方をメイドに教えてもらい、花束を作つて交換もしたりした。

幸せだった。私だけの王子様。

だけど、あまり長くは続かなかつた。

母に告げられた真実。

あなたが六つになるまでは外の世界で育てるのを許してもらえただけで、明日で六つになるお前は里に帰らなければならないの。

ハールン一族は妖精界の入り口を守る番人。強力な結界を張り、邪な人間や、悪魔族、魔族の侵入を防いできた。

その結界の要となるのが長の子ども。六つから二十までは里から動かず、結界を張り続けなければならないのが掟。

そうしなければ世界の均衡が崩れる。だから、リリイに拒む権利など、全くなかった。そして、未練が残らないように記憶まで消される事になった。

そして、シルバーと婚約の約束を胸にしまい、リリイは里に入った。シルバーと再会出来る事を、心の底で願いつつながら。

自分はハールン一族の長である、ローズ・ハールンの娘。リリイ・ハールン。

なぜか里で過ごした事は思い出せない。

どうして今、魔法学校の生徒としてしているのかも。

本来ならまだ結界を張ってなければならぬ筈なのに。

だが、少し思い出してきた。

自分の運命、そして、信じてきた想い。

初めてネスだったシルバーに会った時、どこか懐かしい気がした。たまらなく切なくなった。

それは心の奥で密かに抱いていたあなたへの想いの証。

リリイはずっと守られてきていた。

そして今も、助けられ、取り残されている。

悪い魔女に囚われたお姫様は助けに来る王子様を信じて待っていた。自分も信じて待てばいいのだろうか。

違う。

お姫様と王子様はリリイにとって憧れではあるけれど、リリイはお姫様ではない。リリイは魔法使いの卵だ。

助けを待つほど無力じゃない。いや、無力かもしれないけれど、待つだけなんて御免だ。

女の子をなめるな。

## 対決

空は夜の闇に覆われて、星の瞬きさえ届いてこない。  
闇夜で渦巻く黒魔法の気配は思った以上に冷たく残酷で、恐怖を掻き立てる。

人の心を蝕む闇の気配。

この魔法で暗黒時代、人は悪魔族に支配されていた。

「聖器があれば止められると思うんだけどなあ」

空を見て呟く声はどこか緊張感がない。師範の影響だろうか。  
シルバーは恐れを見せない様にゆっくりとした物腰で、空を見上げていた。ジオガードはその分、ぴりぴりとしている。

「聖器を扱うための魔力がないくせに何言っているんですか」

「お前は使えるじゃないか」

「持ち出したら殺されますよ」

ぴしりと言われ、シルバーは肩を竦める。黒魔法の対抗できるのは妖精族の秘術と王家と公家の城で祀られてある聖器だけだ。

今の二人は丸腰とあまり変わらない。それでも、シルバーは諦めていなかった。

とりあえずトーイとう青年を押さえてみるしかない。きっと、黒魔法を練るためにまだ中庭にいるはずだ。

せめて、今日が新月以外なら何とかなる気がするが、こうなる為に相手は今夜を選んでいるのだから仕方がない。

中庭につくと、一層黒魔法の濃い気配がして、眩暈がしそうだった。人の弱いところを突く気配だ。

トーイは黒い靄の中に静かに立っていた。

シルバー達に驚いた様子もなく、小さく口元を釣り上げただけだった。

「リリイとの永遠のお別れの挨拶は済みました？」

「別に。再会を喜んだだけだ」

シルバーは冷静な声で言った。

「まさか、あなたのような身分の方が庭師になって潜んでいたなんて、さすがに気がつきませんでしたよ。リリイが中庭を通うなんて、可笑いと思った」

そう言いながらも、物腰の柔らかさは失っていない。だけど、恐ろしく冷たい瞳をシルバーに向けている。

「でも、覚えておいてください。リリイと結ばれるのはあなたではないですよ。この世の始まりと同じ。俺と、新たな罪を作るんです」  
くすくすと笑う。シルバーをからかうかのように。

「やはりお前はダキネルの民だな？」

妖精族と血の盟約を行った一族がハールン一族。

そして、悪魔族と血の盟約を行った民がいる。

黒魔法を自在に操る、ダキネルの民。

まさに、ハールン一族とは相反の存在だ。

悪魔族のように破壊願望が強く、黒教徒の幹部はダキネルの民がほとんどだという。

「そうですね。今更隠す必要はないでしょう。ダキネルの民の長の

長子トーイ・ダキネルが本当の名前ですよ。偶然同じ名前だったトーイ・ラダスクという生徒になりかわってやったんですよ」

同じ名前と言うだけで、本物のトーイ・ラダスクは殺されてしまったのだろう。

ダキネルの民は人を殺す事に躊躇いを持たない。

シルバーも真剣な表情になっていた。腰の剣に手を掛けている。闇に支配された場で、細剣だけが輝きを失っていなかった。

光の魔法を施された剣は黒魔法の中、静かに光を放っている。

「光の剣ですか。さすが、あなたが持つには相応しいですね」

トーイの手には黒い剣が握られてあった。太くて厚い大剣だ。

明らかに剣の大きさが違う。だが、決して折れそうにないと感じさせる迫力を細剣は宿していた。

「この魔法を消すのは無理ですよ。聖器を扱えないあなたには。まあ、リリイが秘術を扱えるならまた別ですけど」

「話しぶりでは扱えないと思っっているみたいだな？」

「魔法すら制御できないのに秘術が扱えるわけがないでしょう？ 無力なままみんな死ぬのですよ」

トーイは剣を振り落とす。それだけで、黒魔法の気配が波動となり、シルバー達を襲う。シルバーが剣で受け止め払う。そして、その勢いのままトーイに斬りかかる。

トーイはそれを薙ぎ、シルバーに蹴りを入れた。怯むシルバーの後からジオガードがナイフを放つ。トーイはそのナイフを易々と剣で振り払う。

今度はシルバーがトーイの足を払う。体勢を崩したトーイにジオガードはナイフを振り落とす。ざくりと、肉を刺す鈍い音が聞こえる。

ジオガードは表情を変えず、もう片方のナイフも振り落とす。だが、それはトイの肘で突き飛ばされる。落ちたナイフを拾い、トイがジオガードに投げた。

ジオガードの肩にナイフが刺さり、ジオガードは膝をつく。

「この濃厚な黒魔法の中で怪我したら化膿して痛いよ?」

黒い血を舐め、トイは涼やかに笑う。

シルバーはジオガードの肩に腰に巻いていた布を押し当てて止血を図る。だが、血は止まらない。

これも黒魔法の影響なのか。黒魔法が世界中に満たされたら大変な事になるだろう。

だが、諦めない。絶対に。

俺が諦めたら全てが終わってしまう。今までの十年の思いまでも。リリイを諦めるなんてできない。

「リリイ……」



## 女の子の底力

リリイは必死にもがいていた。だが、縄はきつく巻かれていて解けない。

ラルリーグに頼みたいが、薬草が効いて眠ってしまったらしい。しかも重症のラルリーグをこれ以上巻きこみたくもない。

「早くしないと」

口に咥えて、？み切ろうとしても、固くて出来ない。魔法の縄だ。そんな簡単には解けたりは出来ないのだろう。

だが、黒魔法の気配は増すばかりだ。こんな気配の中にいたら、普通の人は発狂してしまうかもしれない。

シルバー達も発狂しなくても心が闇に囚われてしまうかもしれない。そうしたら、トーイの思うがままだ。

それは絶対に嫌だった。シルバーと再会できたのはこんな事に巻き込む為じゃない筈なのに。

リリイは真珠のペンダントの目を落とす。不完全な契約のため、制約ばかりに縛られてある私たち。そして、精霊の魔法が込められている真珠。

リリイがトーイの手に落ちそうになった時助けてくれた。あの銀色の輝きがトーイのまやかしを打ち消した。

そうだ。この光にトーイは怯えていた。という事は切り札になるかもしれない。

「お願い。シルバー達を助けて……」

「じゃあ助けに行く？」

リリイははつと顔を上げる。本当に美味しい所だけは見逃さないの

がリリーの相棒だ。

アンがリリーを見下ろしていた。

「アン」

「リーの記憶、戻ったみたいだね。だったら、解放の仕方も分かるはずだよ」

「何の事？ それに私は完全には思い出せていないわ」

アンの言っている意味がよく分からなかった。何を解放できるというのだろうか。アンの黒曜石の様な黒い瞳がきらりと光る。

「リーはあのローズの娘だよ？ 秘術の一つや二つ簡単だよ」

アンは母から受け継いだ使い魔だから、母の事もよく知っている。

「でも魔力が扱えないんだよ？ 魔法すら暴走するのに……」

秘術は魔法など、あらゆる術の根源となったというとても強力な術だ。

リリーのような爆弾娘が放ったら大変な事になってしまう。

アンがにやりと笑う。

黒魔法の属性は闇。秘術の属性は光。闇の中で光が大量に溢れれば闇は消える。もし、リリーが秘術を使えるなら、使わないで死ぬのとやるだけの事をして死ぬのなら……

リリーはアンの言いたい事をくみ取り、小さく頷いた。

答えは一つだ。

「アン」

「了解」

アンは炎を起こし、縄だけを焼き切った。自由になった体を、リリイは伸ばす。まだ動ける。ならば、動かなきゃ。リリイは窓を開ける。どうやら、校舎の最上階の様だ。という事は、ここは校長室。ふっと、リリイの中で記憶の欠片が落ちてくる。

「お父さん……？」

校長室という事は校長である父の部屋だ。見渡すがもちろんアカギラの姿はない。大好きな父にも会えない。こんなに近くにいたのに。

「そつえば、リーはローズの星の話を覚えている？」

泣きそうな顔をしていたリリイにアンは小首をかしげている。

母には寝る前に色んな話を聞かせて貰っていた。妖精の悪戯の話。昔のお姫様の話。そして、空に浮かぶ月や星の名前や由来も教えて貰った。

でも、色々ありすぎてよく分からない。

「星……あれ？ 確か真珠星と呼ばれている星があつた気がする」

あと少しで思い出せそうで思い出せない。すぐもどかしかった。だが、とりあえずこのペンダントをシルバー達に届けなければ。そして、秘術。

上手くいかない可能性の方が高い。でも、賭けるしかない。

リリイは窓を押し開けた。濃厚な黒魔法の気配。ラルリーグに掛からない様にしないと、悪化してしまうかもしれない。

「風の精霊よ、我に力を」

詠唱を紡ぎ、何とか宙に浮けることを確認する。リリイは窓から出て、そつと窓を閉めた。

見下ろすと、暗闇の中でも特に中庭が真っ黒なのがよく見える。あそこだけ空気が違う。禍々しい気配に吐きそうだ。

あそこの上が狙いポイントだ。

自分に扱えるだろうか。

秘術の扱い方はだんだんはつきりと思い出してきた。

秘術は、昔母に教え込まれていて、二年前までは易々と使いこなしていた。だが、間が空いてしまっている上に、魔力を制御出来ていない。

でも、奇跡を起こせるかもしれない。

リリイは両手を中庭の上あたりに向けて、翳す。

失敗したらどうしよう。そんな思いを振り切るように、リリイは深く息を吸い込む。

成功させる。意地になっても！

「ティタン・テュウル・メソホル・メラングリカ 光の神よ 戦いに身を焦がしき女神よ 我がリリイ・ハールンの名の元に審判を下し給え ヴィーハ！！」

体中の魔力が吸い取られるように手の先へ流れていくのを感じる。

巨大な光の塊が中庭の上に向かって放たれる。

閃光が迸り、中庭全体、学校全体を光が包み込む。

黒魔法の気配を打ち払う。

胸元が熱い。見下ろすと真珠のペンダントが輝いている。なんだか、シルバーに呼ばれている気がした。

会いたい。もう一度あなたの胸の中に頬を埋めたい。

リリイは空を見上げる。

黒魔法を打ち消された空には小さな星が幾つも瞬いていた。その星

の中で、一つだけ、ペンダントに込めるように強い光を持つ星があった。

あれは空を守るテトラ星の陣の一つ。そう、名は……

がくんと体が傾く。魔力をほとんど秘術に吸われて、宙に浮くことが保てなくなったのだ。

気持ち悪い。吐きそうだった。

そして、リリィは中庭へとそのまま落ちて行った。

## 守りたい人

トーイはシルバーを可笑しそうに笑った。シルバーは必死にジオガードの肩を押さえている。でも、その下に血溜まりが出来ていた。

「考えもなしで僕を倒そうとするからですよ。あなたは魔法が使えなければ役立たずですから」

「お前は どうして人を傷つける？ 何か譲れないものがあるのか」  
「あなたのような生ぬるい世界に浸かっている人には分からない、決して。迫害を受け、この世に捨てられた一族の苦しみなど」

シルバーは警戒しながら、トーイを睨む。暗黒時代が終わり、悪魔族の血を引く者たちは迫害を受け、辺境へと追いやられた。

今までの仕打ちを考えれば、悪魔族の血を憎む者がいるのは仕方がない事なのかもしれない。なかった。

だが、その中には罪のない子どもや関係のない者たちも大勢いた。憎しみは憎しみにつながる。

平穏で幸せな世界なのは上辺だけ。苦しんでいるものは大勢いるのだ。救いたくても救えない、魂の叫びが聞こえてくるようだ。

「リリイの予言。あなたも知っているのでしょうか？ あの予言がある限りリリイに平穏は来ない。僕もリリイを手に入れるのを諦めませんよ。リリイと子を生すのはあなたではない。僕だ」

ぴくりと、シルバーは肩を動かす。

「リリイは俺の花嫁だ」

強くはつきりと言う。そうしなければ怖いかもしれない。自分に

言い聞かせないと不安に、押し潰されてしまいそうだ。

リリイが知らない予言。

そもそも、その予言が発端だった。

リリイの将来を記す予言はあまりにも強力でリリイが知ればきっと深く傷つく。

自分の事を呪うかもしれない。

だから、シルバーは何としてもリリイを守らなければならない。

その予言を、リリイに知らせる訳にはいかない。

そして、トイはリリイを諦める気はない。ここで追い払っても、また来るのであろう。

そして、きっとトイの他にも。

どうすればリリイを守る？

リリイの予言。そんな物が無ければリリイは平穏な世界にいられたのに。

シルバーはふと、一つの方法を思いつく。だが、それは賭けだ。リリイが拒めば二度と出来なくなる方法。

トイが大剣を振り上げる。この剣ならシルバーもジオガードも真つ二つだ。

「さようなら……王子様」

トイが剣を振り下ろす。シルバーが細剣で受けとめようと振り上げた。

その時だった。

急に空に光の渦が現れた。輝く朝日の様な美しい光。光の渦は中庭を包み込んだ。閃光が迸り、トイを襲う。

「ぎゃあああああ」

トイの鋭い悲鳴が中庭に響き渡る。光は空全体を呑み込み、黒魔

法の気配を一気に食い尽くす。

晴れやかな夜空へと変化していく。

これはまさか。

シルバーは空を見上げる。星が一瞬強く瞬いたような気がした。そして、空から何かが降ってくる。

「リリイ！」

シルバーは無我夢中で走った。そして大きく手を広げる。地面に直撃する寸前の所で、シルバーはリリイを抱き止め、転がり込んだ。リリイを必死に腕の中で守り、怪我をしていないか見下ろす。リリイの胸元でペンダントが淡い光を放っていた。この光、空の星の光に似ている。

「シルバー、大丈夫？」

掠れたリリイの声に、シルバーは胸が苦しくなる。強く抱きしめ、亜麻色の髪に顔を埋めた。

柔らかな感触が、気持ちを落ち着かせてくれる。

あと一步遅ければ、リリイは地面に直撃して即死だった。

リリイの温もりを感じていなければ、気が狂ってしまいそうだ。

「何でこんな無茶をするんだ。死ぬところだったんだぞ」

「だって、私はお姫様じゃないもん」

リリイの言っている意味がよく分からない。だが、リリイが無事だった事にひとまず安心できた。

シルバーはリリイを抱き上げたまま、ジオガードとトイーのいる所へ戻ってきた。

ジオガードはようやく血が止まった様で、布を肩に巻き、応急処置



をしていた。

トイは体中が焼かれてしまった様に焦げてうずくまっていた。唯一の弱点の光の術を大量に浴びたのだ。もう長くはないだろう。

リリイは思わず目を背ける。怖かった。

自分の術で傷ついた人を見るのは。例え、敵だとしても。

まして、トイはリリイにとって紛れもなく同級生だった。

シルバーはリリイをジオガードの近くに下ろすと、投げていた自分の剣を拾った。そして、ゆっくりトイへと歩みよる。

振り上げられた剣がやけにきれいに見えたのは気のせいだろうか。

リリイは目を閉じる。ジオガードが耳を塞いでくれたから生々しい音はリリイには届かなかった。

シルバーの剣はトイの心臓を貫いた。

剣を鞘に戻し、シルバーはリリイ達へと振り返った。

ジオガードは膝を折り胸に手を当てる。心臓の上に手を当てるのは生涯の忠誠を誓う騎士の礼だ。

「主、お見事でした」

「……ああ」

シルバーは力なく頷き、剣をジオガードに預けた。そして、リリイを再び抱き上げる。

## ペンダントに宿る精霊の真実の名

「ジオドも付いてこい」

「御意」

シルバーは中庭の奥へと入っていく。すると、バラの香りが漂ってくる。

目の前には赤や黄色、白にピンクのバラが満開になっていた。夜露を弾いて輝いているようにも見える。

シルバーと出会った時のバラ園のようにとても美しかった。こんなバラが咲いていたなんて知らなかった。

「驚いた？ 俺が植えたんだよ。リリイに見せようと思って。夜なのが惜しいな。昼間なら輝くバラで幻想的になる。昔のように……」

シルバーが優しく微笑む。

先程までの鋭利な視線が緩んで、いつもの表情に戻っていた。リリイの心はまだ恐怖で震えていた。

だけど、少し安堵が出来た。

シルバーも出会いのバラ園を覚えていてくれたのだ。それが嬉しかった。

シルバーはリリイをバラの花で飾られたベンチに下ろすと、静かに膝を折り、リリイを見上げる。

熱い視線に、リリイの胸はときどきと煩いくらい鳴っていた。

「リリイ、俺の我儘をどうか受け入れてほしい。絶対に後悔はさせない。だから掌を俺に……」

「掌を？」

リリイは首を傾げる。我儘を聞いてほしいというから何かすごい事を言われるのかと思った。

不思議に思いながら、リリイはおずおずと両方の掌を差し出した。シルバーは緊張しているのか、顔が強張っている。それでも、リリイが掌を差し出すと嬉しそうにほほ笑んだ。

ジオガードが真剣に見つめてくるのも何だか変だ。いったい何をするつもりなのだろうか。

ふと、掌にシルバーの顔が近づく。そして、優しく掌の真ん中にシルバーの唇が触れる。

心臓が止まるのではないかと思うほど大きく跳ね上がった。掌が熱帯びていき、体中が痺れてしまったか力が入らない。

「確かに見届けました」

ジオガードの声に、リリイはびくりと、肩を震わせる。そうだった。今の口付けをジオガードも見ていたのだ。

恥ずかしくて顔が真っ赤だった。

でも、何を見届けたって？

「リリイ、ありがとう。嬉しいよ、一生大事にする」

抱き寄せられ、意味も分からないまま、頭の中まで痺れてくる。

シルバーの腕の中は心地良いけれど、心臓が壊れてしまいそうになる。意味が分からないが、シルバーが喜んでくれるならいいかと思う。

ふと、リリイは空を見上げた。綺麗な空が、また淀み始めている。シルバーも気がついたのか、ジオガードから剣を受け取り、リリイを自分の背に回す。

トリーは倒した。そして、黒魔法の気配も消した。

だが、消す前の黒魔法の匂いを嗅いで集まって来てしまったらしい。  
嫌な鳴き声が魂を掴むようだ。

「魔族・・・」

「全く、伝説では封印された事になっていませんでしたっけ？」

嫌々そうにジオガードは魔法符を取り出す。

リリイには魔法も秘術も使えるほどの力は残っていない。

空を覆いそうな程、魔族の黒い塊が泳いでいる。

魔族は人の魂が好物だという。暗黒時代、たくさんの人が悪魔族が  
引き連れた魔族に魂を食われたという。

こんな数、倒せるのだろうか。

リリイはふとペンダントが熱帯びているのを感じる。

ふと母の昔話を思い出す。

そうだ。母に教わった話に出てきたのは！

「シルバー！」

「何？ どこか痛いのか？」

不安そうな声。だが、魔族から目を離せず、睨むように空を見上げ  
ているシルバー。

もしかしたら違つかもしれない。母の話は作り話なのかもしれない。  
でも、もし合っているのだとしたら。

「昔、お母さんに聞いたことがあるの。春の空を守る星の陣。その  
一つは月の女神の涙だと言われているって」

「月の女神……」

テトラ星と呼ばれる春の空を守る十字に交差する星の陣。それには  
豊穰、愛、正義、慈しみと四つの星にそれぞれ司る輝きがある。

「真珠って月の涙ともいわれているんでしょ？その涙は豊穡の女神が掬い上げて一緒に空に昇ったというの。そして、豊穡の守る輝きとして星にした」

「もしかして！」

シルバーは淀む夜空の更に上で輝く星を見つける。

「真珠星、それは月の女神と同じ名を持つ星セーナ！」

ペンダントが熱く輝き始める。真珠から銀色の光が溢れだす。その光は、シルバーの中へと吸い込まれていく。

ぞくりとするほど強い魔力。優しくて強くて大らかな光を纏う魔力。この魔力がシルバーの本来の力。

懐かしさも一緒に溢れてくる。

魔族が悲鳴を上げた。月明かりのような銀の輝き。

そう。月の光は闇を切り裂く退魔の光。闇を照らす希望の光。それをシルバーが纏っている。

ああ、本物の王子様みたいだと、リリイは思った。

童話の王子様よりきつと、シルバーの方が格好いい。

シルバーの額が淡い光を放つ。何かの模様の様だけど、眩しくてよく見えなかった。

シルバーが剣を掲げる。光が凝縮し、剣へと集まっていく。それを振り下ろすと、空が閃光に包まれて爆発音が轟いた。

シルバーに包まれながら、リリイはすぐ胸が切なくなった。

きっと、私はこの人をもう二度と忘れたくないと思う。離れるなんて考えたくなかった。でも、その瞬間を逃れられないような気がする。

シルバーを見て、心を巡る高揚する気持ちと恐怖が重なり合う。  
先の事は分からないはず……分からないから進むしかない。

どうか、どうか抱きしめてほしい。そうすれば不安な気持ちは溶かしてくれるから。

柔らかな月明かり。新月で見えない筈なのに、心地よい月明かりが体を包み込む。

それが、シルバーの温もりだと気づいた時、リリイは意識を手放していた。

シルバーは、リリイを抱きとめながら、空を見上げる。

真っ黒な暗闇に射す一筋の光。闇を打ち払うかのような朝日が顔を  
出していた。

長い新月の夜が終わりを告げる。

シルバーは愛おしそうに、リリイの瞼に唇を落とした。

確かな温もりをもつと感じられるように。

## 朝日を浴びて

朝はすがすがしい風を運んできてくれる。夜の禍々しい気配も溶かすように完全に消えていた。

魔法学校では、昨夜の出来事の噂が行きかっていた。新月の夜の精霊の暴走やら、何かの前兆ではないかなど、色々とは話が出ていた。だが、誰も知らない。何が起こったのかは。自分たちが死ぬところだったなんて、思いもしないだろう。

だが、それでいいとアカギラは言っていた。この世界の水面下の事を知られるのは、まだ早い。

それよりも、そう成らないように学業に専念してもらおうと、アカギラはあえて何も言わず、騒ぎ立てない事にした。

そして、そんな俄かにざわつく学校内の最上階に、当事者たちはいた。

シルバーは自分を鏡越しに眺めていた。

元に戻った、と思う。だが、目に見えない魔力や制約が消えたから目に見えて実感できるのは少ないのは仕方がない事だ。

だが、はつきりと分かる印。シルバーは自分の前髪をめぐり、眺める。これが自分の証。見るのはかなり久しい。

本来あるものの筈なのに、見ていると変な感じがする。

嬉しい気もするが、重い気持ちの方が多い気がするのは気のせいではない。

これからの自分の身の振る舞い方を慎重に考えなければ。間違いなく、争いが起こる。

リリイは校長室にあるベッドに寝かしてあった。

ラルリイグは朝方になると起き出し、散々の小言をシルバーとジオガードに言い、ジオガードと喧嘩の真っ最中だ。

最初はまさか本当にラルリーグまでいるとは思っていなかった。だが、今回の事に気付くきっかけとなったのがラルリーグの偽者のお陰な訳でもあり、複雑な心境だった。

リリイは使い慣れない秘術を最大限まで力を引きだし、黒魔法を払った。その代償として、眠ってしまっているらしい。

アカギラはリリイの近くにいられるようになり、嬉しそうに看病している。

だから、シルバーは親子の時間を邪魔しないように、そして喧嘩にこれ以上巻きこまれないように、鏡のある小さな部屋にいて、自分を観察していた。

もう作業着を着る事もないだろうと、着ている作業着に目を落とす。意外にも着心地は悪くなかった。動きやすかったし、体が軽かった。ただ、使い慣れない鍔には悪戦苦闘していたのを、リリイにばれていなければよいのだが。

どたとたと、激しい足音が聞こえてくる。シルバーが逃げようとした時、扉が威勢よく開いた。

体中に塗り薬をつけている重症者の筈のラルリーグが乗り込んできたのだ。

「どういう事ですか！ 誓いを立てたって本当ですか？」

……やはり来たか。シルバーはそう思いながらも思わず半歩下がった。

後ろの方で疲れきっているジオガードが椅子に座っている。もうジオガードじゃ埒があかないと思い、ラルリーグは来たのだろう。俺も疲れているのに。

そんな思いがラルリーグに通じる訳もなく、怒りは頂点に達している様子だった。



「分かっているのですか？ あれがどんな意味があるか、リリイは分かっていたんですか？」

「えっと、元々約束していたし」

「主、それでは意味を伝えずにやったって言っているみたいなものですよ」

「！」

本当に口の減らない臣下というか、何故怒らせるような事をわざわざ言うのだろうか。

これ以上にないぐらい怒っているラルリーグは校内での「高嶺の花」と言われていたお淑やかなラルリーグの面影はない。

リリイが見たら驚くに達しないというぐらい、怖い顔をしている。声も出ないぐらい怒りに悶絶している、ラルリーグを止める手立てをシルバーは持っていない。

あるとしたら、リリイを起こす事ぐらいだろう。

「リリイの事なら出来心じゃない。それに誓いを立てればある程度の悪い虫は付かなくなる」

実際そうなのだ。シルバーの誓いは絶対的なもの。それを覆す力を持つ者は誰もいない。世界で一番権力のある王にだって、出来ない事。

ラルリーグはぎろりとシルバーを睨んだ。まさに蛇に睨まれている気分だった。

「あ・な・たが！ 一番の悪い虫です！ リリイが騙されている分一番性質が悪いです！」

「そんなに怒るな。それに騙してなんかいないぞ？ 俺はリリイの事……」

「顔を赤らめないで下さい！ 気持ち悪くて吐きそうです」

ラルリーグは鳥肌が立ったように腕を摩りながら怒鳴っている。疲れているのに、そんな力どこから出てくるのか不思議である。

「まあまあ。お前もジオドに会えて良かったじゃないか。リリーの事は心配いらないから、ジオドとしっかり愛を」

「それ以上言つと口を潰しますよ？」

「主、空気読んで下さいよー」

呑気なジオガードの声が聞こえてくる。ラルリーグの怒りの矛先が、再びジオガードに向かう。

「大体あなたの主君の教育がなつてないからじゃないの？ もつとあと先の事を考えられる自主的な頭にしてくれば良かったのに」

「無理言つな。元があれなんだからここまでするのも大変だったんだからな」

「お前ら、言いたい放題だな……」

怒る気にもなれず、シルバーはやれやれと息を吐く。

きつと、リリーはラルリーグと仲が良くても本性には気付いていないだろう。あの様子ではリリーを大事にしているようだから、怒った姿は見せていないだろうから。

リリーはどうしているだろうか。悪い夢を見ていないだろうか。苦しんでいないだろうか。

自分だつて傍にいたい。手を握つて、温もりを感じたい。そして、目が覚めた時に一番に見てもらいたい。

こんな事をしている暇があるなら、リリーの傍にいたいのが本音だ。ふと、疑問が浮かんだ。

「そつえばラル。お前はどうしてリリーの存在を見つけたんだ？」

シルバーは制約の関係で十年の間リリイには近づけずに、話題にも出す事は許されていなかった。更にハールン一族の里は、一族以外では王しか知らない。そして、里から出た後もアカギラが完全にリリイの存在を消していた。

ラルリーグはまともな質問に少し気が落ち着いたのか、シルバーに向き直り、いつもの静かな声で話し始めた。

「私はアカギラ様に呼ばれたのです。会わせたい子がいると。それがリリイでした。私は制約には含まれていませんでしたし、年頃も近い上にシルバー様とも旧知の仲。だから選ばれたのでしょうか。もしかしたら、アカギラ様は私がリリイの生涯の親友になれると、どこか分かっていたのではないですか？」

シルバーは「そうか」と小さく頷いた。

ラルリーグがリリイの元に呼ばれたのはきっと予言が関係している。

リリイの予言。それが今回の騒動の始まりだった。

ハールン一族の長の子には、一生の出来事で三つまでの予言を妖精族にもらえるという。

その中の一つはリリイが命に関わる大きな災厄が降りかかる。

それを止めるには運命を共にする者の制約を必要とするというもの。シルバーとアカギラ、そして既にシルバーの臣下だったジオガードが制約を被ることで、免れたはず。

その制約も、今回の一件で解放された。

そしてもう一つ……これはリリイにだけは知られてはいけない。

リリイはいつか運命の相手と結ばれ、子を授かる。

その子供には世界を覆すほどの力を備え、いつか救世主となるという。

運命の相手はリリイが決める。

だから、相手は確定していないから、力づくでもその子供の力を欲する者は出てきてしまう。

今回の出来事では、こちらの予言が発端だ。

そして、最後の予言には、いつか生涯の親友を得るだろう。その者の運命の相手は、リリイの運命の相手のすぐそばにいるらしい。

これは間違いなく、ラルリーグの事を指しているのだろう。

ラルリーグのお相手は……

まあ言うまでもない気がする。

予言はリリイの知らない所でぐるぐると回っている状態だった。

本人も知らないそれは、本来ならシルバーが知る事の出来るものではなかった。

だが、リリイの母親であり、ハールン一族の長であるローズが教えてくれたのだ。

ローズによりアカギラも知らせた。ラルリーグはアカギラにより知らされたごく一部の人間。そして、制約に縛られないラルリーグをリリイの護衛として抜擢したのだろう。

リリイだけは知らない方がいい。そこに書かれている事はあくまでも予言であって真実ではない。これからの事はリリイが切り開いていく事だ。

だけど、それに縛られているのも事実だ。

「どうしてここに呼ばれたのか。リリイと出会って確信しました。生涯守るのはリリイなんだって」

「そのお陰でかなりやられてしまったみたいだな」

うんざりした様に言い、ジオガードは背伸びをした。肩の傷から血が滲んでいる。

それをラルリーグは軽く睨んでいた。

「ジオド。包帯変えないと」  
「だとさ」

ジオガードはにやりと笑い、ラルリーグを見やる。ラルリーグは「う」とあからさまに嫌そうな顔をしたが、自分もやってもらった手前、素直に新しい包帯を取った。

ひねくれ者だが、ラルリーグの事を思っている事をシルバーは誰よりも分かっている。直接会った事はなかったかもしれないが、遠目からはずっと見ていた。こっそり小さい肖像画を持ち歩いている事も、シルバーは知っている。あと少し素直になれば、ラルリーグも恋に落ちるかもしれないのに。

お互い不器用だなと、シルバーは苦笑いを浮かべた。

リリイが目を覚ましたと知らされたのは、その後すぐの出来事だった。

## 目覚めてみて

リリイが目を覚ますと、父が傍らにいる事にすぐに気がついた。

「やあ、リリイ。気分は大丈夫かい？」

「うん、平気」

当たり前のように会話を交わす。とても懐かしかった。父の声を聞いたのも、顔を見たのも二年ぶりになるのだ。

優しいほほ笑み。リリイは父と母がほほ笑み合って話す姿が好きだった。あの柔らかな空気に包まれた二人は幸せそうで、いつか自分も結婚したらそうなれたらいいと思っていた。

父の顔を見ると涙が溢れた。

「お前はいくつになっても泣き虫だね。もう、私はお前の涙をふく資格はないのに」

そう言いながらも、優しくハンカチでリリイの涙を拭いてくれる。子供に戻ったようで、なんだか嬉しいような恥ずかしい気もした。

「色々あつて疲れただろう。ゆっくり休みなさい」

「でも、シルバー達は？」

「ネスたちなら隣の部屋にいるよ。さっきまで喧嘩していたみたいだけど」

「喧嘩？」

リリイが眉を顰めると、アカギラは悪戯っぽく笑い、リリイの額を撫でた。

「大丈夫。喧嘩するほど仲が良くなって言うだろう？ スキンシップをとっているんだよ」

スキンシップかはどうか分からないが、特にジオガードとラルリィーグの二人は何だか訳ありの様子だった。

休んでいた気もするが、なんだか自分だけがこうしているのも気が引けた。みんなもボロボロになるまで戦っていた。守ってくれた。

「ちょっと、みんなの様子を見てくるよ」

「気になる？」

「うん」

「そうか」

と、アカギラはさみしそうに息を吐いた。そして、リリィの体を起こしてくれる。

「父よりも未来の旦那様の方が気になるよな、それは仕方がないよな」

……未来の旦那様？

リリィが首を傾げている横で、自分を納得させるように何度か頷くアカギラ。リリィは何だか変な予感がしてきた。

父は昔の婚約ごっここの事を言っているのだろうか。

あくまでもあれは子ども遊びの中で、まだはつきりと求婚されてはいない筈だ。

ふと自分の手に目を落とし、ぎょっと、大きく目を見開いた。

掌に刻まれた痣。綺麗な三日月が合わさる様に両手にうす赤紫色で浮かび上がっている。これはどう見ても怪我ではない。

そうして、思い当たるのは一つだけ。シルバーの口付け。

リリィに大きな衝撃が走った。

「それでは呼んできてあげるよ」

すーと、アカギラは扉の方に行ってシルバー達を呼びに言っていたが、リリイはそれに気がつかないぐらい、驚きで思考が止まってしまうっている。

シルバーが急いで入ってくるのを見て、リリイははっとした。

「リリイ、体は大丈夫か？」

シルバーが嬉しそうにほほ笑みながらリリイの手を優しく握る。シルバーの温もりは優しくて温かくて心地よい。だが、リリイの顔は少し引き攣っていた。

「シルバー、聞きたい事があるんだけど」

「なんだ？ 何でも聞いてくれ？」

「この両手の……」

「あれえ？ 何しに来たんですか？」

リリイの言葉をかき消したのは、アカギラの気が抜ける声だった。リリイが振り返ると、知らない男の人が立っていた。

灰色かかった銀の髪を一つに束ね、ほりの深い顔に浮かぶのは濃い青の瞳だった。着ている服は細やかな刺しゅうの入っていて、デザインはシンプルだが、明らかに身分の高さを表している。でもどこか誰かに似ている。

「あ、兄上？」

シルバーが悲鳴のような声を上げた。リリイは驚いてシルバーを見ると、顔面蒼白で兄を見ている。



そうか、と思う。確かにシルバーとよく似ているのだ。だけど、兄弟の割には年が離れている気がするが。

## 兄弟喧嘩勃発

兄はすごい形相でシルバーに近付くと、ごつんと、何も言わずに拳骨をお見舞いした。

目から星が飛びそうな勢いだっただ。

「お前は、どうして私の言う事が聞けないのだ？ 城を抜け出して五日間、私がどれほど心配していたと思っっている？」

「兄上は勝手すぎる！ 俺を閉じ込めたり勝手に結婚相手を決めたり！ 俺は人形じゃないんだ！」

急に現れて始まった兄弟喧嘩に、リリイは成す総べなくおろおろするしかない。

声を聞いて入ってきたラルリーグもジオガードも絶句している。

「だ、ダイヤレス様…… どうしてここが」

ジオガードが呟くとラルリーグが口を押さえる。今は何もかもが火に油を注ぐようなものだ。

シルバーの兄、ダイヤレスは怒りでジオガードの声には気がつかなかったようだ。

シルバーとの間に火花が散っている。

何故、急に出てきて兄弟喧嘩をしているのだろうか。

「いいか？ 明後日にはお前の婚約式が行われる。それは絶対だ」  
「こ、婚約式？」

リリイが思わず大声を出す。はっと、口を塞いでももう遅い。

ダイヤレスがぎろりとリリイに向く。大蛇に睨まれているようで怖

い。

今の今までリリイは目に入っていなかったのか、凝視するようにリリイを睨みつける。

「オパールネス、この娘は何だ？ つまみ食いは婚約式が終わってからにしろ」

つ、つまみ食い？

リリイはかちんと、腹が立った。何がどうなっているのかさっぱりだが、明らかに今馬鹿にされた。

しかも、婚約式って何？

シルバーはそういう相手がいながら会いに来たのか？ 思わせぶりな事をしたのか。

悔しくなつて来てすごく胸がむかむかとした。

こんな謂れのない事を言われるなんて、物があつたら投げ飛ばしてある所だ。

「兄上、兄上でもリリイを愚弄する事は許しませんよ。リリイは俺にとって大切な唯一の人だ」

「大切な人だと？」

ダイヤレスの眉が不快そうに跳ね上がる。シルバーは挑むように睨み、リリイを優しく抱きよせた。

「言ったでしょう？ 俺には将来を約束した者がおると。なのに婚約者を勝手に決める、兄上が間違っている」

シルバーの言葉には強い気持ちが入められていた。

リリイは顔が熱かった。嫌な胸のむかつきも、今のシルバーの言葉で吹き飛ぶ。大切に今まで思われていたことが実感できる言葉だっ

た。

シルバーはにやりと笑う。そして、リリーの両手をダイヤレスの前に翳した。ダイヤレスの顔が一気に固まる。

「俺たちは誓いを立てあつた仲。王でも覆せない結婚の証だ」

「結婚？」

リリーが素っ頓狂な声を上げる。だが、それに気づかないぐらい、ダイヤレスはショックを受けている様だった。

リリーはシルバーの「わがまま」の意味がようやく分かった。あれはただの口付けではない。結婚の誓いを立て合っていたのだ。だから、ジオガードも「見届けました」と言ったのだ。

誓いを立てる時には第三者が見届ける事がなければ成立しない。

誓いにはお互いの同意が必要なのに。確かに手は出したけど、それが同意という事にされてしまったのだ。

その印が両手の三日月の痣なのだ。

そして、時間がないという意味もわかった。あれはシルバーの寿命の話ではない。婚約式の事だったのだ。だから、ジオガードは時間がないと焦っていたのだ。

あまりの事に、リリーも黙るしかない。

「お前、勝手にそんな事をしてどうなるか分かっているのか？ お前は長子ではない。長子ではない者は婿に入る。それはただ入るのでは意味がない。意味のあるところに入ってこそお家の為になるんだ」

「結局、兄上は俺を見ていない。だから俺は城を抜け出して勝手にここまで来たんだ。リリーと結婚できないなら、男を捨てる！」

「子供みたいな駄々をこねるな。決定しているんだ。覆すのはお前には無理だ」

「無理じゃない。結婚の証がある。それこそ覆すのは無理だ！」

「だったら、無かった事にするまでだ」

ダイヤレスがリリーの腕を掴む。それを拒むように反対の手をシルバーが引く張る。

思い切り男の人の力で引く張られて、リリーは千切れそうな程痛い。さすがにアカギラとラルリーグ、ジオガードが間に入った。

「おやめ下さい！ 本当に腕が千切れます！」

「兄弟喧嘩は違う所でして下さい！」

何とか男二人を引き剥がし、リリーはラルリーグの後ろに匿ってもらった。腕が赤くなっていて、筋が痛い。

「ジオデイスティルガード！ お前も共犯か！」

ぐいっと、顔が今にも沸騰しそうな勢いでジオガードの胸ぐらをつかみ上げる。

それを冷静に見つめて、ジオガードは為すがままになっていた。

「私が主に情報を流したんです。だから、お咎めなら私が受けます」

「ちよっと待って下さいな。ダイヤレス様！ いくらなんでも横柄すぎます」

ラルリーグがダイヤレスに掴まれているジオガードの間に入る。

ダイヤレスはラルリーグの顔を見て、動きが止まる。

「お前は……いや、あなたはトーライナ公女ではないか」

「へ？」

変な声を上げたのは勿論リリーだった。周りを見回す。

トーライナという名はトーライナ公国を統治する、世界九公爵家の一つ。トーライナ公家。

その公女という事はトーライナ公爵のご息女という事だ。まさか。

ラルリーグが公女様？

もう何が何だか分からない。どうしてそんな身分の方が魔法学校なんかに？

いや、自分の親友が公女？

卒倒しそうなリリイは置いて、話はどんどん進んでいった。

「私の妹との婚約でしたよね？」

ラルリーグは強い口調でダイヤレスの前に立った。

あんぐりと口を開けたまま、リリイは硬直する。

ラルリーグの妹とシルバーが婚約者？

いや、二人とも否定はしているが。

ダイヤレスはラルリーグに向き直る。

「そうだ。何故、ここにおられる？ オパールネスに会いに来て下さったのか？」

「いいえ。それはもう、断ったはずです」

ダイヤレスが複雑そうに眉をひそめる。この人も、今の状況をよく分かっていない人物の一人なのかもしれない

「残念ですが、妹は修道院に入りましたの。なんでも、強引に好きでもない男と婚約されそうになったとかで」

じとりと睨まれ、ダイヤレスは一瞬たじろぐ。ラルリーグの迫力は半端なかった。

「だから、兄上。トーライナ公爵にも断わりの言葉があつただろう？ それはこいつが家出をして、妹のラスク嬢が修道院入りして婚約を破棄したからだ」

王も公家を怒らせるのは避けたかつたのだろう。

王直々に断わりの詫びを入れたのを、ダイヤレスは知らされていなかったらしい。

こつという兄を持つと弟は苦勞する。

さつさと婿に入つて、王位継承問題を片づけたい気持ちも分かるのだが。

ダイヤレスはもう項垂れるしかない。

ついでにと、ラルリーグはだめ押しの行動に出る。

「私はこの、スグワール公国公子ジオデイスティルガルド様と婚約したんです。なので、次は私を婚約者にとかは考えないで下さいね！ あと、私の親友を侮辱したら許しませんから」

そう言つて、ラルリーグはジオガードを引き寄せる。

もう、ラルリーグはやけくそ状態だつたのかもしれない。

リリイにはまた、状況の読めない新事実に頭を悩ませる。

ジオガードまでが公子様？ 意味が分からない。

そして二人は、先程までの仲の悪さが信じられないぐらいに熱く手を握り締め合つていた。

リリイは開いた口が塞がらない。

もう、何が何だか分からないし、もう何が起きても驚かない。

ダイヤレスも怒りながら乗り込んで来たのはいいものの、どういう状況なのかいまいち理解出来なくなつてしまつたのだろう。

顔が固まつてしまつて動いていない。

「とりあえず、一回帰って頭を冷やした方がいいですよ」

アカギラに言われ、ダイヤレスは納得のいかない顔をしていたが、ごそごそと魔法符を取り出しす。

頭を抱えて、思わず長い溜息をこぼしながら。

そして、魔法が発動すると、ダイヤレスは姿を消していったのだった。



## 心の中の王子様

それを見届けると、はぁーと、全員体から一気に力が抜けた。

「ちょっと、いつまで手を握っているの？」

ついつと、ラルリーグがジオガードの手を振り払う。という事は、婚約したというのは嘘だったのか。

どこまでが真実なのか分からないまま話が吹っ飛んで行ってしまっていた。

「兄上も普段は優しくて大好きなんだけどなー」

シルバーの気の抜ける声に、ジオガードが近くにあった本を投げつける。見事、額に直撃した。

「空気読んで下さいっていつも言っているでしょう！ あー、もうこの状況はあなたのせいですからね」

「分かっているさ。だけど、まあ。これで婚約式は完璧に破綻だな」

嬉しそうに頷いているシルバーに、リリイは何だか、無性に腹が立つてきた。

リリイはシルバーの事を覚えていなかった。だから、昔の約束を覚えて、迎えに来てくれたのはすごく嬉しい。

だけど、果たして純粋にその思いだけで来てくれたのかというと、違う気がする。

婚約？ 結婚？

あまりにも急すぎて実感もない言葉に振り回されて、リリイ自身を無視されている気がして、悲しくて、すごく腹立たしい。

ラルリイもジオガードも、父も、みんな、分からない。

「はいはい。一旦、みなさん出て行ってもらえます?」

アンの声だった。リリイが気づくと、リリイのベッドの上にアンがちょこんと座っている。

「しかし」

「あのねえ、分からない? リーにとっては全部意味が分からない事なんだって。整理してあげるから出て行きなよ」

アンの有無を言わさない言葉に、シルバーもジオガードに引きずられるように出て行き、部屋にはアンとリリイだけが残った。

リリイはそっと、アンを抱きしめる。

きつと、今のリリイを一番分かってくれているのは、アンだ。リリイのぐちゃぐちゃになってしまった気持ちを解けるのも、アンしかない。

「リー、偉そうな事言ってごめん。僕もリーにとっては嘘つきなのに」

「嘘つき?」

リリイが首を傾げる。アンのしっぽが垂れ下がっている。こういう時のアンは落ち込んでいる事が多い。

「僕は元々ローズの使い魔だった。だから、あのリーを守る契約が行われた時、僕は範囲に入ってた。だから、リーとシルバーの事、僕だけは覚えていたし、伝える事に制約はなかった」

「アンは知っていたの? じゃあ、ネスとしてシルバーが現れた時はもう気づいていた?」

「さすがに知っているのは十年前の姿だし、髪の色が違っていたから僕は分からなかった。でも、リーの反応を見て、あれって思ったのも本当」

「それは嘘つきじゃないでしょう？　気づいた後も私を思っ黙っていてくれたんでしょう？」

アンから伝える事は幾らでも出来た。でも、それをアンが躊躇っていたのはリリイ自身の問題だったからだ。

自分で思い出せたからこそ、シルバーへの信頼も思い出せた。

「それに、星の名前とか、秘術の事教えてくれたのはアンだわ。必要な事は言ってくれていたから、アンは嘘つきじゃないわ」

リリイに首元を撫でられ、アンは嬉しそうに喉を鳴らした。そして、徐々にしっぽが立つてくる。元気になってきた証拠だ。

「ねえ、リー。まずはラルから整理しようか。僕の知っている事も含めて、さ」

リリイは静かに頷く。

少しずつ解いていかないと、真実も分からなくなってしまう。

「ラルはリリイには侯爵家の遠い親戚って言っていたよね？」

「うん。でも、実は侯爵じゃなくて公爵で、トーライナ公家の公女……」

最初からラルリーグはどこか高貴な家柄のお嬢様だとは思っていたが、まさか公爵家とは話が飛びすぎだ。

貴族が領地を統治する世界。その貴族の中でも別格なのが九大公家だ。

公家は王から直属に領地をもらい、国として統治することが許されている。

本来なら、リリイのような庶民が見る事も話しかける事も許されないような身分の方だ。

公女様だったら学校に入らなくても最高の教育を受けられるはず。なのに、どうして庶民のリリイがいるような学校に入ったのだろうか。今回の一件が関わっているのだろうか。

ラルリーグはジオガードとは会った事がないと言っていたが、シルバーとは顔見知りのようだった。

確か家出とか、シルバーが言っていたが。

そこまでして、何のためにここに來たのだろうか。

「ねえ、リー。ラルの家出って何か、作為感じるでしょ？」

アンの言葉にリリイは頷く。

もしかして、家出には意味があるのかもしれない。

どんな思惑があったにしろ、ラルリーグはリリイの元へ来てくれた。

ラルリーグは二年の間、リリイをずっと支えて守ってくれた掛け替えのない人。

今回も体を張って、リリイを守ってくれた。

身分とか、友情の間に関係はない。

でも、誰が仕組んだのだろう。

「まさか」

悪巧みが大好きな人物をリリイは一人しか知らない。

リリイの父アカギラだ。今回の事を仕組めるのは校長であり、リリイの父であるアカギラ以外できる人物はいない。

「お父さん……」

リリーの見えない所で、父はリリーの為に色々と動いてくれた。その為に、色々とごちゃごちゃとしてしまっているが。リリーはふと思い出した。買い物に町に出た時のラルリーグの言葉。

まだしっかり見てないけど、たぶん運命の人だと思う……

今にすると感慨深げなラルリーグが新鮮だった。誰を想っていったの？

シルバー？

違う。シルバーとジオガードが現れた時、ラルリーグはシルバーに目もくれなかった。そして、口論しながらも釘つけだった人。それは……

そうか。ラルリーグはトリーにスープを引っ掛けるジオガードを一瞬見ていたのだ。あの時に、ラルリーグは恋に落ちていた。意外にも、好きな人には素直になれないようだ。

そして問題はシルバーだ。

迎えに来てくれたのは事実なのは分かっている。だが、その裏に色々和不都合な事を抱えながらやって来ていて、一石二鳥の感覚でリリーの事も、厄介事の解決もしようとしている気がする。

そのどこがいけないのかと言われると、リリーも分からない。だが、それではリリーの気持ちは納得しない。

シルバーがどんな思いで十年いたのか分からない。もしかしたら、婚約式を破綻させようと思った時に偶然思い出しただけなのかもしれない。

でも、魔力を捧げてまで、未来のリリーを助けようとしてくれた。それが生半可な気持ちで出来る事ではないのは分かっている。

「リー？」

アンが心配そうに覗き込んでいた。涙が出てくる。  
どうして、こう気持ちが後ろに行ってしまうのだろうか。

「ねえ、リー。ローズの話してあげる」

「え？ お母さんの？」

「うん。覚えてないかな？ リーが生まれてから、ローズは毎日の様にリーに言っていた言葉があるんだ」

アンはリリーの腕の中でくすぐったそうに身を翻し、そっと、リリーの頬に触れた。

そういえば、母に頬や額を撫でられるのが好きだったとぼんやり思い出す。

「愛しいリリー。あなたは運命に導かれる日が来るわ。大丈夫、恐れないで。あなたなら分かるはず……自分だけの王子が誰なのか」

アンは母の口調を真似て静かに言った。

懐かしい言葉。忘れていたわけではない言葉。夢で、母が何度も伝えてくれていた言葉だった。

「恐れないで……私になら分かるはず……私だけの王子様」

「リーの王子様って誰？」

「私の王子様は……」

バラ園の向こう側。あなたは私をバラの精と言ったけれど、私はあ

あなたがバラの国の王子様だと思った。

優しい瞳。空よりも澄んでいて、海より深い輝きを持つ瞳。優しい声。悪戯っぽい表情。

輝く銀の髪。

あなたの真意を知るのが怖い。知ったら生きていけなくなるかもしれない。

それ程、存在感は大きい。忘れていたのに。ううん、忘れていない。忘れていない。

憧れていたのは童話の王子様じゃない。

会いたかった私だけの王子様。

怖い。けれど、恐れていたら動けない。歩み寄れない。

現実には色々な事が付き纏う。それを言い訳にしてはいけない。

「リー。良い顔になったよ。すっきりした？」

「うん。ありがとう、アン」

リリーはベッドから起き上がる。体が少しだるいが、動けなくもない。

会いに行こう。

あなたへ。

## 親友への想い

「し……シルバー？」

そつと、扉を開けると、こつてりとジオガードに絞られたのか、肩を落としているシルバーの姿があった。

ラルリーグとジオガードは言い合いながら、薬草を張り替えていた。

シルバーはリリーの姿を見ると、はつとしたように背筋を伸ばし、気まずそうに咳払いをした。

相当怒られたのが目に浮かぶようだ。

「あれ？ お父さんは？」

「えつと……兄の様子を見に行ってくれている」

「そつ」

自然と会話が途切れる。何だか少し気まずい。

だが、リリーは勇気を振り絞って、シルバーの手を取った。驚いたように、シルバーが顔を上げる。

「ちよつと来て。話したい事があるから」

リリーの言葉に、シルバーは無言で頷き、リリーの後を追って、ベツドのある部屋へと入っていった。

「あーあ。リリー、やっぱり毒牙に掛っちゃった」

「失礼な言い方をするな。主の想いは本物だ」

言い合いをしながらも、お互いリリー達の事をじつと見ていたラル



リリーグとジオガードは、扉が閉まると話し始めた。

「私はリリーを運命の輪から解放してあげたい。予言にリリーが縛られるのは嫌」

ラルリリーグは苦しそうに呟く。リリー本人にはとてもだが言えない予言の内容。きっと、知ったらリリーは深く傷つき、人の前から姿を消すだろう。

そして、その予言の存在がリリーを狙う者を作り出す。

「主と結ばれば大丈夫だ。主とリリーの間に生まれる子なら問題はない」

「子……そうかしら。運命の輪から解放してあげたいけれど、運命は簡単には覆せないもの」

ラルリリーグはそっと胸に手を当てる。

あの時もそう思った。

リリーが浚われそうになって怪我を負い、保護された時。

シルバーは存在を知られるわけにはいかなかったので、学校までジオガードが連れて、医務室に運んだらしい。

その姿を見て、ラルリリーグはリリーの抱えるものの大きさや辛さを実感したのだ。

助けてあげたい。

その時に自分は少し自分に対して疎かになってしまい、ニスの手に落ちた。

あれは自分が甘かったせいで起きた事だった。

そのせいでリリーが傷ついていない事を祈るしかない。

ジオガードは慰めようとしているのか、ラルリリーグの頭をそっと撫でた。

どう反応すればいいのか分からず、ラルリリーグは顔を背ける。ジ

オガードは気にした様子なく話を再開させる。

「信じなければ前には進めない。それに、主が結婚の証を立てたのなら他の誰よりも効力を発揮する。変に言い寄る男は減るだろう」  
「確かに？ シルバー様以上の方がリリイを望むのはまず無理でしょうからね。シルバー様の兄上も結婚されているし、まして王様はもうお妃を娶らないと宣言されているし」

結婚の証は式を上げていない者には婚約の証となる。それを覆すのは王にも無理だが、手を回そうとすればどうにかならなくもない。だが、それを絶対的にさせないのは誓いを立てたのがシルバーだからだ。

リリイはその事に気が付いているだろうか。

世界に君臨する公家の者が敬う相手はこの世に一つだけ。

ラルリーグは諦めたように空を仰ぐ。

リリイに苦しみが伴わないように支えてあげる事。

それは運命でもなく、自分の意思で決めた事だ。

リリイが飛び出してきたら、優しく抱きしめてあげよう。  
それが私の決めた事だから。

## 私だけの王子様

胸の高鳴りは切なくて、苦しい。

リリイは元氣のないシルバーをじっと見つめる。シルバーはリリイと目を合わせないように目を伏せていた。

「何で、こっち見てくれないの？」

「見たいのは山々なんだが、少しは反省をしている身だし」  
「反省？」

首を傾げるリリイを一瞥し、バツの悪そうにシルバーは息を吐く。

「だって、俺はリリイの事をあんまり考えていなかったみたいだから」

「どこいら辺が？」

「迎えに来たのも急だったし、誓いを立てたのも急だったし、兄上に結婚するって……リリイの返事もらっていなかったのを忘れた」

普通忘れるだろうか。そもそも、「結婚しよう」とも言われていないのだが。リリイは少し脱力しながらシルバーの話を聞く。

「俺はこの十年、お前の事を忘れた事はない。それは本当だ。でも十八で嫁をとるか婿に入らないといけない習わしがあって、兄上は勝手に婚約相手を決めたんだ」

「それがラルの妹？」

「お互いびっくりして。ラルの妹のラスク嬢っていうのはさ、男嫌いで有名なんだ。俺も拒絶されてばかりで……それであいつは家出してまで妹の婚約話を破綻させようとした」

複雑そうにシルバーは言う。確かに、いくら結婚する気のない相手だとしても、あからさまにそう嫌がられるのもいい気分のしないものだろう。

「それで、十年たった丁度その日に、置き手紙して城を出てきたんだ。途中護衛に捕まりそうにもなったけど。ジオドに一足先に入ってもらって、手はずを整えたんだ。リリイの事、すぐに分かったよ。会えて嬉しくて……結婚の誓いを立てたのも、お前に昨夜の様な思いをしてほしくなくてしたんだ。あれ？ リリイのせいみたいに言っている？ 違うんだ、俺がいけなくて、その……」

一気に話して、自分で何言っているのか分からなくなってしまったのか、シルバーは頭を傾げ始める。こういう天然なところは昔からちつとも変っていない。

憎めなくて、思わず笑ってしまうのだ。

リリイは小さく笑い、肩を竦める。

やっぱり、シルバーは変わっていない。何を怖がっていたのだろう。優しいシルバーなら信じてもいいと思っていたじゃないか。

「私ね、記憶を消されていたでしょ？ だから、シルバーの事覚えている筈ないと思っていたわ。でも、心の奥までは消せない。幻で、夢のように……でも私の心の中にシルバーはいたんだわ」

「リリイ……」

シルバーが大きな瞳でリリイを見つめている。信じられなさそうに、でも嬉しさが込み上がってくるように、熱い視線だった。

「私のシルバーへの思いはきっと、失われていない。しかも、あなたは約束をちゃんと果たしてくれた」

「約束？」

必ずまた恋に落としてやる。

幼い時の小さな約束。それをシルバーは果たしてくれた。

この想いはきつと、動き始めている。小さな芽が出たばかりだけだ。きつと確実に。

「結婚とかよく分からないけれど、あなたの傍にいたいと思うわ。それではダメ？」

「ダメなものか……ダメじゃない！」

シルバーに引き寄せられて、彼の胸の中に飛び込む。優しい温もり。この温もりが恋しくて、夢の中で何度も見ていた。やつと、思いが届いた。

「少しずついい。俺の傍にずっといてくれ。もう離れるのは御免だ」

「うん」

頷いて、リリイはそっと抱き締め返した。

優しい時が流れる。ずっと待ち望んでいた瞬間だった。

シルバーの顔が近づいてくる。そっと触れた温もりに、リリイは驚いたが、次の口付けは優しく受け入れた。

優しいシルバーの温もりに包まれながら、リリイは再び夢の中へと落ちていった。

シルバーはベッドに寝かせ、リリイの頬を愛おしそうに優しく撫でる。

ようやく会えた。もう二度と手放したくない。

だが、事が完全に収まったのかというとそうではない。

リリイは予言を知らない。そして、その予言はこれからもリリイの事を狙う者を作り続けるだろう。

リリイの子を生む力。その子が世界を揺るがす強大な力を得る。その父親は絶対的な君主になれるという。

そんな事、シルバーにとってはどうでもいい事だった。

リリイとずっと一緒にいられれば……そしていつか幸せの結晶として子に恵まれるなら最高だ。

その子がどんな力を持っていようと、持っていないとしても。

だが、リリイを取り巻く者はそれを許さない。

何としてもリリイを手に入れようとするだろう。そして、トーイのように無理やり奪おうとするだろう。

それが耐えられない。

あともう一つ、リリイの記憶が気かりだった。

アカギラに伝えられたリリイが二年前以降の記憶がない経緯、それもまた、リリイの心を傷つける事実が隠されてある。

本人も少し思い出しているようだが、どうしても里がもうないのか、どうして里の外にいるのかは思い出していないだろう。

そして、どうして黒魔法の事を知っているのかも……

二年前、ハールン一族は里を襲われ、滅んでしまった。唯一生き残ったのはリリイだけだったらしい。

黒教徒とダキネルの民による黒魔法によって、一夜にしてリリイ以外は殺されてしまったのだ。

ダキネルの民はハールン一族の相反の力を持つ。

そういう、とてつもなく恐ろしい相手にもリリイは狙われているのだ。

リリイを守れるのは自分しかない。

だが、自分も無条件でリリイの傍にいられるわけではない。

シルバーに戻った魔力。それに伴って戻ってきた本来の力の象徴。

それはきつと新しい争いを生む。

だから、さらけ出したくても出来ない秘密。リリイにも言えない秘密。

シルバーはそつと、リリイの手を優しく握り締めた。

## 不思議な物語へ

それから数日後、アカギラの元に留まっていたシルバーの元に一通の手紙が届いた。

再び、リリイとラルリーグは生徒として日々を過ごしていた。そして、授業が終わると、シルバー達のいる校長室に足を運ぶ。

そして、今日も何時と同じように校長室にリリイとラルリーグはやって来た。

四人と使い魔一匹とお茶を楽しんでいる時、ふとシルバーからリリイは手紙を渡された。

満面の笑みを浮かべているシルバーの顔が、嫌な予感を感じさせる。何故かリリイの予感的中率が良い。

そして、今回も的中したのは言うまでもない事だった。

外は夕刻近い、夕焼けがきれいな時だった。

静かな夕焼け空に鳥が家路と急ぐ時、

「な、なな……何よこれ！」

と、リリイの悲鳴が響いていった。

ラルリーグは卒倒しそうなリリイを抱きとめながら、手紙に目を落とす。

「……ダイヤレス様、どうしても結婚させたいみたいです」

やれやれと、半ば呆れているラルリーグ。

リリイはあまりの出来事に言葉が出ないのか、口をぱくぱくとさせている。

心配そうに、シルバーがリリイの手を取る。



「大丈夫か？ 寄りかかるなら俺に寄り掛かればいいのに」

そう言つて、ラルリーグからリリイを引き寄せる。どこか嬉しそうなシルバー。

軽くラルリーグが非難の視線を送つても気付かないほどに、シルバーはご機嫌で。

リリイの体はわなわなと震えていた。

リリイにとってシルバーは王子様だ。

でもそれは例え話である。

本物の王子様となるとこの世で唯一の王家の直系者しかない。

自分には雲を掴むほど、遠い存在なのだ。

そのはず……なのだ。

手紙に書かれてあつたシルバーの正式な名前。それは……

「し、シルバーはまさか……本物の王子様だつたの？」

「ん？ 知らなかったか？」

よくよく考えると公家のラルリーグとジオガードが敬語で敬うのは一つしかない。

真珠は王家を守護する宝石。

世界を統べる九公家を束ねる唯一の王家。ライツパー王家の子息。

シルバーの正式の名はオパールネス・シルバー・ライツパー。ライツパー王国の第三王子だ。

「知るわけがないじゃない！ だって、十年前は王都じゃなくてスグワール公国の屋敷に……」

リリイがシルバーと出会った屋敷は、スグワール公国にある大きな屋敷だった。だからリリイは、シルバーはスグワール公国内に領地をもつ良家の子息だと思っていた。それでも、身分とかどうしようとか、内心想っていたのに。

身分の中でも王子では比べ物にならない。

ダイヤレスの反応を思い出し、リリイは心の中で納得してしまっていた。

王の子がそこいら辺の娘に捕まったら大変だから、あれほど必死だったのだ。

「王家が王都にしか所有地ないと思った？ 全世界各地に王家の所有地とそこに屋敷や城の一つや二つはあるさ」

「王子なんて聞いてない！ 王子のくせに庶民と結婚しようとしたわけ？」

とてもだが、恐れ多すぎて、ダイヤレスに掴みかかりそうだった自分を思い出す。

もしそんな事をしていたら打ち首だ。

シルバーは不思議そうにリリイを見てから吹き出すように笑った。

「リリイは庶民じゃないよ？ 師範は神官をしているけれど爵位も持っているし。リリイはルルーミル侯爵家のご息女というわけさ。ああ。兄上にはリリイがハールン一族っていうのは内密にしてあるから、名乗る時はリリイ・ルルーミルって事にしておくんだよ」

父が侯爵の爵位を持っているのも初耳だった。

どこまで謎が多いのだろう、我が父君は。

そしてハールン一族だというのは内密にしておいた方がいいと思うから、名乗り方に関しては問題はない。

いや、それよりも。

につこりと説明をするシルバーを横目に、ラルリーグはリリイの様子に気づいて、少しずつ離れていく。

「いやあ、師範が兄上を説得してくれたんだ。そして、リリイが侯爵家の娘だと知って、兄上も問題ないと許してくれたそうだ」

「私……ゆつくりがいいって言ったわよね？」

「うん。だから婚約式の後にゆつくり、今までの空白の時間を埋めようじゃないか」

リリイは拳をぎゅっと握りしめた。

「結婚とかよく分からないって言ったよね？」

シルバーのすぐ横にいたジオガードもそろりと離れていく。

「だから、婚約の時間を大切にしよう」

最高の笑顔をリリイに向けるシルバー。  
リリイの中でぷつんと、何かが切れた。

「シルバーなんて……だいつ嫌いよ！」

リリイの拳が炸裂し、それと共に発動した風によってシルバーは飛ばされたが、誰も助けようとはしなかった。  
その時にひらりと手紙が舞い上がる。

愛しい我が弟へ

我が弟、オパールネス・シルバー・ライツパーとリリイ・ルルーミルの婚約式を行う事が決定した。

介添人はラルリーグ・トーライナ嬢に正式に申請をしておいたのだ、お前の方からも伝えておくように。

日が少ないので、リリイ嬢と共に即刻王城に帰還するように。

王子である事を忘れず、婚約式までは節度を持った振る舞いをするように。

詳しくは帰還してから伝えるので、短文だが失礼。

ダイヤレス・デイ・ライツパーより

「あなたとなんて……絶対結婚しないから！」

リリイの叫び声は、残念ながらシルバーには届いていなかった。完全に伸びている。

そして、リリイの叫びは無情にも流される。

がしり、とジオガードに肩を掴まれた。

「え？」

「ではリリイ。出立の準備をするぞ」

「ええっ？」

「リリイ、正式に申請されてしまった以上、私も逆らえないわ」

仕方なさそうな声とは裏腹の笑顔で、がしりと、もう片方の肩をラルリーグが掴む。

一生支えてあげるとい言葉はどうなったのだ。

「大丈夫。私も一緒にいてずっと支えてあげるから」

「そ、そういう意味なの？」

「リリイは名前通り白百合のような純白のドレスがいいかしら？」

「いや、純白は結婚式までとっておいた方がいいだろう。だったら春霧困気を出せるうすピンクのレースのあるドレスがいいのではないか？」

「そうね。急いでお針子を呼んでもらわなきゃ」

「ちょ、ちよつと……」

いつも口論ばかりしているくせにこういう時に限って仲良く話をしているのは、何故？

そして、二人とも何だか楽しそうなのは気のせいだろうか。

助けを求めて、スコーンを齧っている筈のアンに目を向ける。

だが、アンは満足そうにお気に入りの首輪を、どこから取り出したのか小さなカバンにしまっていた。

「僕、王都って初めてなんだあ。美味しいケーキがあるって、リイ。早く食べたいね」

「あ、あんたねえ！」

いつのまに懐柔されていたのか。アンはリリイを見ず、明後日の方を見ている。一番の理解者じゃなかったのか。

ここにはリリイの味方がいない事に、ようやく気がつく。

「みんな……みんなも大嫌いよ！」

リリイの声は虚しく響き、ずるずるとラルリーグとジオガードに引っ張られて行った。

「大丈夫……あなたは自分だけの王子様を見つけれられるわ……だから恐れないで……可愛い私のリリィ……」

巡りに廻って来た再会の時。母の言う通り王子様を見つけたリリィ。童話の様に幸せな結婚をした……のかはまた別の話である。

「だから、私は絶対にしないわよ！」

運命を捲る手は何を抱えているのだろうか。

希望、悲しみ、喜び、絶望。

何があるのか分からない。

何を抱えているのかは分からない。

決められたものをただ持ち、歩くだけでは運命の扉は開かない。

響き合って、重なり合って、自分で捲るからこそ物語は進んでいく。

自分だけの物語。

大切な人と響きあっていく、ただ一つの物語。

それは……不思議な物語。

## 不思議な物語へ（後書き）

これにて「不思議な物語」は完結です。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました

でもこの話はこれで終わりではないので、2章も読んでくださると嬉しいです

この話は魔法使いの卵のリリィと実は王子なのに庭師として魔法学校に入り込み出会うという。

なんともおかしな出会い方をするお話でした。

そしてこの話の軸となる記憶というのが十年前の二人の幼い日の約束。

そこから実は二人の物語は始まっており、十年間離れ離れになっていましたが。

再会という名の出会いを果たし、また二人で紡ぎ合う物語が始まったのです。

そして、まだまだこれからが二人にとって大変だという事だと思います。

まだまだ伏線を隠してあるままになっているので、2章で明らかにしていければいいかなと思います。

それでは！！

ここまで読んでくださってありがとうございます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4060p/>

---

不思議な物語

2011年3月6日12時34分発行